
黄昏の国のアリス

涼村 怜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄昏の国のアリス

【Nコード】

N1350D

【作者名】

涼村 怜

【あらすじ】

ふわふわと浮かぶような感覚から穴に落ちるような感覚へ・・・目が覚めたとき私は記憶を失っていた。周りの美形兼変人に振りまわされるアリスと周りの美形兼変人のお話。アリスのハートを射止めるのは一体誰？逆ハーレムもの。

1・アリスと時計白兔 前編

〈序〉

今日は何をしよう。ああ、そうだ。

机に大量におかれた手紙の山をあさる。

その中から細く綺麗な字で書かれた1通の便りを手にとった。

「やっと会える、なんて・・・」

内容を再確認し、そう小さく呟いた。

嗚呼、何度、どれだけ待ったであろうか。

この日がやってくるのをどれだけ。

「行きましょうか」

そつと上着を着ると外へと足を進めた。

春になってきたので外は暖かい。

片眼鏡をかけた青年は蒼色の髪を小さく揺らしながら足早にかけていった。

〈アリスと時計白兔1〉

ゆらーり、ゆらーり・・・ふわふわと。

浮かんでいるような感覚から、穴に堕ちるかのような感覚へ・・・
手足も身体も動かない。

高いところから落とされたような、そんな感覚。

・・・少しずつ手足の感覚が戻ってきた。

指先、手の平からわかる地面。

少々チクチクする。

目は閉じているものの、眩しいように感じた。

「っ・・・」

おそろおそろ目を開ける。

ここは一面の草原だった。

さっきのチクチクするものは芝生で、春の、匂いがした。

「じじ、どこ？」

金色の宝石のような髪をゆっくりと掻き揚げる。

日光を受けてキラキラと輝く。髪は少しウェーブになっていてふんわりと波打っている。

「私・・・私の・・・名前は、アリス」

何もわからなかった。ここがどこだか。

自分自身のことさえも。わかるのは“アリス”という自分の名前だけだった。

「何で・・・何も思い出せないの？」

何も何も思い出せない。

思い出そうとしても頭痛がアリスを襲う。

「アリスッ」

不意に後ろから声がした。

「え？・・・わっ」

振り向くと同時に誰かに抱きしめられていた。
気が付くと男性特有のがつちりとした腕の中。

「会いたかったです、アリス」

深海のような青い瞳と空のような蒼い髪。

そして白い兎の耳と片眼鏡、首にかけた時計。

おまけに端麗な顔立ち。

どうして美形な青年に抱きしめられているのだろう。

「あっうっうえ？」

思わず変な声をあげるアリスに、青年は心配そうに覗き込む。

「どこか打ったり怪我したりしていませんか？」

「あっあの！私の事知っているの？というかあなた誰」

アリスがそう言うと言青年は傷ついたような表情を見せた。

「私が誰かわからないんですか？」

ポツリと青年は訊ねた。アリスはコクリと頷いて、言う。

「え、ええ。自分の名前はわかるけど・・・私が何者なのか、ここがどこなのか全て」

「と、いうことは・・・記憶喪失」

青年は誰に言うわけでもなくそう呟く。
記憶喪失。それは記憶を失くすこと。

だが、今のアリスにはそれ以上に気になることがある。

「痛っ。アリスなにしてるんですか？」

アリスはどうしてもこらえきれなかった。
少々ピクリと動く白い兔耳が気になって気になって仕方が無い。
つい、引っ張ってしまった。

「え、えつと痛い・・・？」

アリスが言っているとクスリと青年は笑って、引っ張っているアリスの細く白い手首を握る。

「はい、痛いです。・・・私は正直、痛い思いをするより痛い思いをさせるほうが好きなんです」

につこりとした微笑に黒いものが見える。

「あ、あ、あなたもしかして・・・？」

「はい。どちらかというとSです」

100万ドルの笑顔、というのはこのような表情だろうか。
嬉々とした様子でアリスに笑いかける。
一方、アリスは表情を凍り付かせた。

1・アリスと時計白兔 前編（後書き）

登場人物紹介

主人公・アリス（17歳）

瞳：蒼色 髪：淡い金髪

武器：ダガー・オートンファア

特技・・・家事全般

趣味・・・お菓子作り

備考・・・美人で何かと美形兼変人に縁がある。

黄昏の国の女武官で、強いと評判。

よく美形兼変人に振りまわされる生活を送っている。

反響の国のキングから求婚され（しかも監禁）

逃げ出したときに記憶を失う。

2・アリスと時計白兎 後編

「アリスと時計白兎2」

（Sっていったわよね？まずい。この人、変人……？）

アリスは青年の手を振りほどこうとするが
しっかりと手首を掴まれていて、青年は離そうとしない。

「（しょうがない。離してくれないし、耳引っ張った私も悪いし）
あの、じゃあこのまま聞かぬ。ここはどこ？私、何者？」

諦めたアリスにフツと笑ってから一呼吸おいて話始めた。

「ここは“黄昏の国”と呼ばれる国の草原です。

アリス、あなたはこの国の武官……すなわち軍人のようなものです。」

私もあなたと同じ武官で、あ、名前は“時計白兎”といいます。
時計兎……と呼んでください」

今更だがそう自己紹介をした。

アリスは少しだけ首をかしげ、青年の顔を覗き込む。

「時計兎？それが名前？」

「はい。変わった名前でしょう？
私はこの名前が嫌いですけど、あなたのその可愛い声で呼ばれる
なら好きになれますね」

アリスは後半部分を聞かなかったことにして話を続けてとうながす。

「それで、この国には王であるスパート。キングクラス

クイーンクラス スペードの妹で、女王であるハート。ジャッククラス

王の近衛であるクローバー。エースクラス

王の補佐であるダイヤ、がいます」

少し違和感を感じアリスは時計兎に尋ねる。

「普通なら女王は王の妃なんじゃ？」

「普通なら、でしょう？ここは普通じゃないんですよ」

サラリとそう言うてのけられた。

時計兎はそれで、と話を続ける。

「この黄昏の国の隣国、反響の国。

私たちの国と反響の国の間にある“白雪の町”の所有権利をめぐ
って

敵対し始めたのです。白雪の町は元々こちらの領地なんです
が
あちらの国に近いせいか、反響の国の民が多く白雪の町に移住し
て
います。

反響の国が権利はこっちだ。と主張してきたんですよ。

アリス、あなたは反響の国への使者役。さすが 流石、アリスと言いまし
ようか。

滅茶苦茶死ぬこの糞野郎っていうくらいイラつくんですけど。

反響の国のキングがあなたに惚れたそうです」

「え、惚れた？………いたっ」

忌々しげに時計兎は自分のこぶしに力をいれる。
そしてアリスの手首を握っていた手も強く握ってしまう。

痛さで顔を歪ませるアリスを見て

「大丈夫ですか？私はアリスの笑顔が好きですけど、アリスはどんな顔も似合いますね」

と笑ってみせた。

アリスは少し身を引きつつも話に耳を傾ける。

「ま、そこでアリスは誘拐されてしまったんです。

いえ、監禁というほうが正しいでしょうが。私達はどちらようか悩んだんですけど」

そこまでいうと、時計兎は胸ポケットから手紙を出した。

「これ。あなたが書いたんですよ。

今日この時間帯にここへ、反響の国から脱出して帰ってくると。

そこで、私が迎えに来たと言うわけです。おそらくはその途中で頭を打つか何かして記憶が無くなったのだと思います」

アリスは手紙をまじまじと見つめる。

確かに「アリスより」と書いてある以上は時計兎のことを信じよう。

今からどうしようかと思いをめぐらせていると突然手の甲に生暖かいものが触れた。

「……っ！？何をっ……」

時計兎がアリスの甲に口付けしていたのだ。

「・・・嬉しかったんですよ、アリス。アリスはこの手紙を他の誰にも届けていなかった。

私だけに届けていた。それがとても嬉しかったんです」

そう言われると、アリスも怒ることはできない。

さっきまで少し引き気味だったが、アリスは少し信用してもいい気がした。

「時計兎・・・あなたのことを信用するわ」

「ありがとうございます。安心してください。

反響の追っ手が来たとしても全て返り討ちにしますからね。皆殺し、ですよ？アリス」

前言撤回。

アリスは少し後退するようにじりじりと後ろへ下がったのだった。

2・アリスと時計白兔 後編（後書き）

登場人物紹介

時計白兔（20歳）

瞳：濃い青色 髪：蒼色

武器：鞭

特技・・・お茶を淹れること

趣味・・・読書

備考・・・獣人で兔。

黄昏の国の武官。

アリスが好きで、アリスにちょっかい出す奴はM I・N A・G O・

R O・S H I

チエシヤ猫が大嫌い。

S。

3・卵男とチェシャー猫 前編

「卵男とチェシャー猫1」

「ここがアリスの家ですよ。　　どうです？何か思い出しませんか？」

アリスは何か思い出すかも。　という時計兎の考えで住んでいたという家へと来た。

「ごめんなさい。何も思い出せないわ」

申し訳なさそうにアリスが俯くと気にしないでください。　と声がかかる。

「でも、ずいぶん綺麗なのね。私がいなくて時間たっていたんでしよう？」

「まあ、それは掃除してますから。・・・ハンプティが」

最後のほうはアリスには聞き取れなかった。
なぜなら他の事に興味を引かれ、聞いていなかったから。

「ねえ、これ何？もしかして、私の武器・・・？」

部屋の壁に掛けてあった物に指をさす。

その先にあったのはアリスがいつも愛用していたトンファーとダガーだった。

「ええ。いつも使ってたよ。反響の国には持っていきませんで

したけど」

その中の一つのダガーを手にとると、手にしっかりと馴染む。身体自体はこの武器のことをすっかり覚えていようだ。

「アリス、着替えてきたほうがいいですよ。

その服は反響の国のドレスみたいですし、動きやすい服に……」

「うん、着替えてくるわ。……覗かないでね」

バレてましたか。と時計兎は笑った。

最後に釘を刺しておいて良かったと心底アリスは思う。パタパタと着替えのために2階へ上がった。

「よしっ」と

着替え終わり腰のベルトにトンファーとダガーを付ける。

ちゃんとフィットしていて、水色と白のエプロンドレスにしましまのハイソックスを着た。

「うーん。ミニスカート……足がスースーするわ。

やっぱりスパッツ履いところかな……」

「アリス！下に下りてきてくれませんか？」

1階から時計兎の声がした。

結局スパッツは履かずに鞆に丸めて入れておいた。

「アリス、似合ってますよ」

「あー・・・ありがとう」

いつの間にか時計兎のそばに青年が立っている。

その青年は、右目に傷があり片目しか開いていない。

「あれ？その人は？」

知っている人かもしれないのについてそう言ってしまい、青年は驚いたような顔になる。

「言いませんでしたっけ？記憶喪失になったと。

私も始めて見たときは全然信じられませんでした」

青年はどうやら、時計兎から事情を聞いていなかったようで益々片目が見開かれた。

「じゃあ、僕が誰だかわからない。ということになるんだね？」

コクリとうなずくと青年はゆっくりと口を開く。

「僕の名前はハンプティー・ダンプティー。

アリスは以前、僕のことをハンプティーと呼んでいたからそう呼んでほしいな。

・・・この目の傷は、戦場で塀の上で待機していたときに敵にやられたんだ。

塀から落ちるし大変だったよ・・・」

しみじみと語り、ハンプティーは右目の傷を指でなでた。

「記憶喪失だから一応、初対面ってことになるんだよね。変な感じだけど、よろしく」

につこりとそう笑って手を差し出してくる。

それに応^{こた}えて握手をした。

時計兎の黒い笑みを見てきた身としては、こういう白い笑みを見ると癒される。

「アリスとハンプティーは幼馴染なんですよ」

「幼馴染、・・・」

ハンプティーは赤毛の長髪で目は金色だった。

顔も美麗で傷があるのが少し残念なくらい。そんな人と幼馴染。アリスは少しこつも美形に囲まれ、変な気持ちになる。

「ハンプティーも武官なので腕は立ちますよ」

「武器は槍なんだ。ちなみに時計兎は鞭」

組立て式だから持ち運びも便利だよ。と、ハンプティーは槍の先を見せた。

「それでは行きましょうか、二人とも」

「行くってどこに？」

「森にだよ。」

別名チエシャー猫の森にね」

チエシャー猫・・・？

それは一体なんなのだろう。

アリスがそれと関わるまであと少しのこと。

3・卵男とチェシャー猫 前編（後書き）

登場人物紹介

ハンプティ―・ダンプティ―（19歳）

瞳：琥珀色 髪：赤色

武器：槍（組み立て式）

特技・・・掃除

趣味・・・散歩

備考・・・卵料理が好き。

黄昏の国の武官。

アリスの幼馴染。

右目に傷がある（反響の国の兵士にやられた）

夜になると性格が逆転する、いわゆる二重人格

（普段は優しいが夜は荒々しくなる）

4・卵男とチェシャー猫 中編

「卵男とチェシャー猫2」

アリスは記憶を無くしたせいで地理がわからなくなったいたと、言っても記憶を無くす前から極度の方向音痴だったのだからどうしても案内人が必要だ。

今回も前を歩いている時計兎とハンプティーについて行かなければ迷ってしまう。

回りの森の風景に好奇がわくが大人しくついていった。

「アリス。悪いけどここで待っていてくれないかい？」

「え、ハンプティー、どうして？」

先頭の時計兎とハンプティーは歩みを止め、アリスに向き直る。

ここは森の中の泉。木漏れ日が泉の水に反射してキラキラと輝いていた。

「探してくるんだよ、“アイツ”を……どこにいるか検討もつかないしね」

「それに、ここにアリスを置いて行くと、

アイツもあなたを見付けるかもしれないですから……」

ハンプティーと時計兎が目配せしながら答えた。

「（アイツって誰？まあ聞いてもわかんないか）待つなんて……」

「待っててください、ね？」

待たなきゃどうなるかわかってますよね？
と言わんばかりのオーラを感じ取り素直に頷く。アリスからはため息が出る。

こうしてアリスは森へ置き去りにされた。

それからしばらくたった頃。

アリスは待つのがそろそろ暇になって、うつらうつらと眠りそうになったいた。

「あれ？アリス？もしかしてエ、帰ってきたのぉ？」

語尾にハートマークが付きそうな声がしてうつむけていた頭をおこす。

そろりと、声がした後ろを向くが誰もいない。

「アーリースー、上だよぉ」

そう声がして、樹の上から1人の少年が降りてきた。
ストツと着地したその少年をまじまじと見つめる。

「わ、きれい」

少年の瞳を見て思わずアリスの口からそんな言葉がでた。

少年はオッドアイだった。右目が燃えるような赤色に、左目が深海のような青色。

髪は赤紫・・・いや濃いピンクというべきだろう。

頭には猫の耳。お尻には猫の尻尾。どうやら時計兎と同じ獣人らしかった。

パーカーを着た青年は、顔にニヤニヤとした笑みを浮かべている。

「アリスウ？」

その声でアリスはハツとした。

「あ、その凝視し過ぎでごめんなさい。

それに、私記憶喪失で・・・悪いけどあなたのことわからないの」

ハンプティーのときを習い、そう答える。

急に俺の事覚えてナインだア。と青年はしゅんとなりアリスはあわてた。

「ごっごめんなさい!」

何も自分が悪いわけではないけれど謝ってしまう。

「いいよー、気にしてないからア。

ちょーっと悲しいけどオ、反響の国のバカ王が悪いから」

ニパツと笑って言うてみせた。

「じゃあ、初対面ではないけど自己紹介だねえ。オレはチェシヤ猫。この国の武官なんだア」

私と同じ。と呟くと

「おっかしいなアー、覚えてるのお？」

こう問われた。

「覚えてはないけど・・・時計兎とかハンプティーとかと会ってて」
ふうんとチェシャ猫は面白くなさそうに顔をふてくされさせる。

「そういえば、時計兎がアリスの迎えいくんだったー。
ちエー、せつかくオレとアリスは恋人だったんだよ、とかウソ教
えたかったのにイ」

そのとき、心底アリスはチェシャ猫と先に出会わなくて良かったと思
った。

記憶喪失だから、きっとチェシャ猫の言うことを信じてしまってい
ただろう。

「まあいつかあ。

ところで、アリスをこの森においていくってことはあ、オレを探
してんのかなあ？」

「へ？どういうこと？」

アリスが聞くと、チェシャ猫は唇に手を当てて喋る。
いかにも得意げ、といった様子だ。

「オレ武官だけど気まぐれ、超気まぐれなのオ。でえ、住む所をこ
の森内で転々と変えてんだよねー。

それにい、オレ自分でいうのは何だけど、人に命令されるのは大嫌いなワケエ。

呼び出してもこないしい、力ずくで連れてくるしかないんだよお」

よくそんなので武官という職業が務まるな・・・とアリスは色んな意味でチエシヤ猫を感じした。

それにチエシヤ猫を雇っている黄昏の国も凄いと思う。

すると、チエシヤ猫はアリスの心を見透かしたように言葉を繋いだ。

「でもねえ、オレアリスが大好きだから。アリスに命令されるのは大好きなんだあ！

武官になるってアリスが言ったからオレも武官になったんだよお？

ねえ、折角だからなんか命令して？ね？」

アリスは思った。

時計兎はSだけど、もしかしてチエシヤ猫はMだったりするののか？と。

抱き付いてくるチエシヤ猫を見てアリスは本日2回目のため息をついた。

4・卵男とチェシャー猫 中編（後書き）

登場人物紹介

チェシャー猫（16歳）

瞳：右は青色 左は赤色 髪：赤紫色

武器：小双刀

特技・・・高い所に登れる

趣味・・・アリス（？）

備考・・・獣人で猫。語尾を伸ばす癖がある。

森に住む武官。

とても気まぐれで（アリスに対してだけ）M。

好きなものはアリス。

嫌いなものはそれ以外。

5・卵男とチェシャー猫 後編

「卵男とチェシャー猫3」

「でさでさー、アリス何か命令はあ？してくれないのー？」

「命令って言われても・・・」

しばらくどうしようかと悩むが、やがて思い付いたように手を叩いた。

「時計兎とハンプティーが探しているのはあなたなんでしょう？
だったら、時計兎とハンプティーと合流したいし、2人を探してほしいな」

そして、できれば連れて行くか、連れてきてほしいとも思う。

「ムウー・・・ほかの男のためっているのが気に入らないけどお。
しょうがないなあー、連れて行ってあげるよオ。ちよつとだけ、
ガマンしてねえ」

そう言うが早いがひょいっとチェシャ猫はアリスを抱きかかえる。
正直、恥ずかしい格好で。

（こ、これってお姫様抱っこ・・・！？は、恥ずかしい）

「でもでも、どうやって見付けるの？いくらなんでもわからないで
しょっ？」

アリスは恥ずかしさを紛らわすためにチエシヤ猫とにかく話し掛けた。

「オレは猫だかねえ、耳とか鼻はいいんだよっ」

「鼻が良いのは犬なんじゃ・・・」

突然ひよいとチエシヤ猫は樹の枝の上にアリスをお姫様抱っこしたまま飛び乗った。

「なっ何をして・・・!？」

「じゃあ行くよお？」

「えっ行くっ？」

チエシヤ猫がそうニッコリと笑い、つられて（引きつり）笑いをしてしまう。

「Let' GOー!!」

「え、ええええええ!?!いやあああああああ!!!!!!
下ろしてええええええええ!」

猛スピードでチエシヤ猫は樹の枝を飛び乗りながら駆け抜ける。

アリスは落ちるかもしれないという怖さから叫んで、叫んで、叫んだ。

「何か妙な音がすると思いませんか？」

一方こちらは、チエシャ猫を探していた時計兎たちだ。
チエシャ猫と同じ獣人の時計兎はハンプティ―にそう話しかけた。

「妙、というか変、というか・・・叫び声のようなものが聞こえる
気がするのですが」

「さあ？君は耳がいいから。ハア・・・全く、チエシャ猫はどこに
いるのやら・・・」

ハンプティ―はと言って相手にしなかった。しかし
段々、その音が人間の耳でも聞えるくらいに近くなった。

「いついよいよやあああああつあ！！！！下ろしてええ！！おちっ
落ちるっ！！！！」

この声はまさか、と2人が思ったと同時に音源と青年が現れた。

「アリスッ？」

「チエシャ猫っ？」

上からトンつと降りてきた2人に、驚いたような呆れたような声を
上げた。

「バカー！！チエシャ猫！！樹の枝の上を走るなんて！！」

「大丈夫だってエ。アリス軽いしさア」

「そういう問題じゃないでしょう!!」

そう言い争いをされて、時計兎とハンプティは無視された。内輪モメ。どうやら2人には気付いていないようだ。

「もうやめてよ!?!今後からずっと、永久に!」

そうアリスが振り向いたときに

「あ、時計兎、ハンプティ? いた、んだ・・・」

アリスは恥ずかしさから顔を朱色に染める。
一方ハンプティと時計兎はやっと気づいて貰え、安堵したかのような表情をした。

6・イカレ帽子屋と初戦闘 前編

「イカレ帽子屋と初戦闘1」

「あと1人欠けてますよね」

その時計兎の発言にうんうん、とハンプティーとチェシャ猫は頷く。

「あと1人つて？」

「ああ、大抵の場合は僕とアリス、時計兎、チェシャ猫ともう1人のメンバーで行動していたんだよ」

アリスの問いにハンプティーはにこりと答えた。

「どんな人なの？その人」

「ええつとねエ・・・イカレ帽子屋」

「は？」

チェシャ猫の答えにアリスはつい、素っ頓狂な声をあげる。

“イカレ”帽子屋・・・間違いなくそう言った。

「だから、イカレ帽子屋です。」

名前は帽子屋。イカレ帽子屋というのは他国での通り名なんですよ」

時計兎の説明だ。だが、なぜ“イカレ”なのだろう。

「・・・その心は？」

「イカレてるくらいに強い・・・ってことだよ。僕たち武官の中では最も強いくらいだから」

そんな人と今から会うなんて大丈夫だろうか。とアリスはすこし心配になる。

その心配事はしばらくしてから的中してしまうのだった。

不意に、前を歩いていたハンプティーの歩みが止まった。

思いもよらなかったアリスは止まれずにハンプティーにぶつかってしまう。

「うっ！どしたのハンプティー」

アリスはぶつかった鼻先を押さえる。

ハンプティーはごめん、と謝ってからある方向を指差した。

「着いたよ、ここが帽子屋の家、というか本家だ」

意外にもレンガ造りの普通の家である。

怖そうな印象だったのもっと雰囲気のある洋館などをイメージしていたアリスにとって予想外だった。

「あの、本家って？」

「武官は本来、城下町や城内の武官宿舎で暮らすんですよ。」

けれど、それとは別に実家など離れた場所に自分の家を持つんです。それが本家です」

丁寧の時計兎は説明してくれた。

アリスも村に自分の家を持っている。あれが、アリスの本家ということだ。

「じゃあ・・・呼んでみようか？おい、帽子屋あー」

チエシャ猫がそう呼びかけるが反応ナシ。

「いないのでしょうか。珍しいですね」

「この辺りを探してみよう」

その2人の提案にアリスは頷いた。

「でも、アリス。アリスはもちろん」

「わかってるわよ。ここで待ってる・・・でしょう？」

よくわかりで。と時計兎が目を細める。

方向音痴、記憶喪失のアリスは無闇に動かない方がいいのだ。迷われたらそれこそ迷惑になるのだから。

「でもお、俺は探さないよオ？面倒臭い・・・それにアリスの傍に居たいからねエ」

チエシャ猫は欠伸をしながらそう言うと、アリスに腕を絡めてくる。アリスはその腕を振り解いた。

「ダメ。チエシャ猫も探して、お願い」

「ハア、しょうがないなア。アリスの上目遣いには適わないしい。わかった、探せばいいンデシヨ？」

頭をポリポリと掻くと、チエシャ猫は腰掛けていた体を起き上がらせる。

「じゃあ行こうか。アリス、留守番頼むよ。帽子屋が戻ってきてても待ってて」

そう行つて、3人は探しに行つた。

(また・・・置いてけぼりか)

アリスはわかっているけれど、すこし眉をよせる。

「どうした、何を怒っている」

「そりゃ怒るわ。私ばかりいつも置いてけぼり、よ？」

記憶無かつたとしても、ちよつとは頼ってくれたつて・・・つて誰!？」

時計兎たちとも違う、低い声。

ノリで思わず質問に答えてしまったが、アリスは反射的に前に飛びのいた。

おそるおそる後ろを向くと、そこにはハンチング状の帽子を深く被つた青年が立っていた。

7・イカレ帽子屋と初戦闘 中編

「イカレ帽子屋と初戦闘2」

「記憶がない・・・ということは記憶喪失か？」

青年が腰に手をやりそう言った。

「ええ、記憶喪失よ。だからあなたのこともわからないわ」

おそらく、外見からして帽子屋だろうということは安易に予測できる。

「あなたが帽子屋・・・さん、よね？」

「そうだ。俺が帽子屋。・・・アリス、

少しお手合わせ願ってもいいか？記憶と共に腕も落ちたのか、見たい」

「ええっ！？ち、ちよつと待つ・・・！」

帽子屋はハンチング帽子をどこかへ投げ捨てた。

願ってもいいか？と聞いている癖に
有無を言わず、大剣で斬りつけてくる。

アリスの心配事は正に的中だ。

「待たない」

第2波。冷たく言い放たれた言葉にアリスはゾクツとしながらも大剣を紙一重でかわす。

あんな大剣、こんなダガーでは受け止められない。それに、アリスはただでさえも女だ。無理に決まっている。

「くっ・・・！」

「かわすだけか、アリス？ 以前のお前ならすぐにこんな勝負片付けていたぞ」

「うるさいわね！ 知らないわ、そんなの」

虚勢を張るが、このままではまずい。

アリスの体力にも問題ある。何とかしなければ。とは思う。

しかし、怖い。アリスの心には恐怖しかなかった。

理由は・・・帽子屋の目は本気だったから。

手合わせ、と言っても相手は手加減するつもりなんて、毛頭無いらしい。

ビキィ。

と、アリスに突然の頭痛が襲う。

「こんなときつに・・・！」

意識を失いそうな激痛。耐えがたい痛み。どうすることもできなかった。

『帽子屋・・・本っ当に組み手とかでも手加減ないわね』

『そうか?』

これは以前のアリスの記憶。記憶喪失になる前の一部の記憶。頭痛とともにアリスの頭の中でその記憶は鮮やかになっていく。

『そうよ。常に戦場にいるように殺気放ってるのよ? 怯むでしょ、普通』

『へえー・・・そうなのか。全然自覚ないが』

『あのねえ・・・ま、私はあなたの弱点知ってるし、いいわ』

『何? 何だ、教える』

『さあね、今度また戦ったときに教えたい』

それは最後、帽子屋と手合わせしたときの記憶だった。

(弱点。帽子屋の弱点は“アレ”だ・・・イチかバチか・・・!)

頭痛と戦いながら大剣をかわしていたアリスは、恐怖を振り払い意を決してトンファーを構えた。

7・イカレ帽子屋と初戦闘 中編（後書き）

登場人物紹介

帽子屋（20歳）

瞳：黒色 髪：こげ茶色

武器：大剣

特技・・・戦闘

趣味・・・紅茶を飲むこと

備考・・・意外と手先が器用。

黄昏の国の武官。

武官の中でも1番強いが、

フェミニストのためアリスには弱い。

普段は帽子を被るが戦闘では帽子を取る。

8・イカレ帽子屋と初戦闘 後編

「イカレ帽子屋と初戦闘3」

頭痛と戦いながら大剣をかわしていたアリスは、意を決してダガーをトンファーに持ち替えた。

そして、帽子屋が大剣を振り下ろした瞬間……。

タイミングを間違えたら、死ぬ。

帽子屋の大剣の上にアリスは乗った。

すぐに振り落とされそうになるが、その前にまたジャンプし帽子屋の目の前に跳ぶ。

ガッン。

とトンファーで一撃。

サッとすぐさまアリスは帽子屋から離れた。

一瞬の出来事だ。

「っ！……キツイな。お前のトンファーは」

帽子屋がトンファーで殴られた頭を摩さすった。

ハアハアとアリスは息切れする。

フーと呼吸を整えると帽子屋にビシッと指を差して一言。

「帽子屋。あなたの弱点はね“機敏さ”がない所、よ」

帽子屋と戦ったときに、アリスを襲った頭痛。

そのおかげでアリスの記憶がほんの一部だったたけれど一瞬戻った。帽子屋はそれを聞いて、驚いたような顔になったがすぐさまフツと笑う。

「今度から改善するよ」

地面に落ちていたハンチング帽子を被りなおすと思い出したように帽子屋が言った。

「ああアリス。お前・・・その、スパッツ履いたほうが良い」

「え」

「だからスパッツ。白のレース・・・だろう・・・」

「は？」

アリスは何が白のレース？と聞き返そうと思ったが、すぐさ思い当たり顔をボツと顔を赤くした。
顔から火がでる。で仕方がないだろう。

「み、みみみ見たの？」

緊張しすぎて舌がうまく回らない。アリスの体から嫌な汗がでた。

「・・・不名誉だな。アリスが跳んだ時に、見えた」

「うつ・・・嘘！履いとけば・・・良かった・・・」

あのと、スパッツを靴に入れなければ良かった。ちゃんと履いておけば良かった。

すっかり後悔先に立たず、である。アリスの悲痛な叫び声が響いたのだった。

「で？また、私達がない間に会ってるんですか」

帽子屋の淹れた紅茶を飲んでみると、3人が戻ってきた。

正直な話、帽子屋が淹れてくれた紅茶はとても美味しい。本人曰く銘柄にも淹れ方にもこだわってるとのこと。

もっと飲んでいたかったのが本音だが、仕方が無い。座っていたアリスは腰を浮かせた。

「これじゃ、さっきのチェシャ猫のときと同じパターンじゃないか」

ハンプティが溜息をつく。まるでこちらが悪いみたいだ。

大人しく待ってただけよ。と、トゲトゲしく言い返すと

そうつもりで言った訳じゃないとハンプティが慌てて弁解した。

「ま、いいんじゃないか？ナイトメアが全員揃ったからな」

ナイトメア？と聞き返すと後で教えてやる、と口を封じられる。

「帽子屋とハンプティはまだ、まともそう・・・」

アリスがボソリと呟く。少なくとも、泣き顔を可愛いと言ったり、初（？）対面で抱き付いてきたり、命令されるのが好きだと言ったり、樹の枝を全速力でかけぬけたり・・・はしないだろう。

「じゃア、城に行くのお？ハア、面倒くさいなあ。アリスがいるからいいけどオ」

そうだ。次の目的地は城。

これから始まる物語の全ての始まりとなるであろう場所だった。

おまけ1 アリスに50の質問

くおまけ・アリスに50の質問く

01 お名前をどうぞ!!

アリスよ。

02 性別は?

女。

03 誕生日!

冬生まれなの。

ちなみに私は17歳よ。

04 身体的特徴(身長とか顔立ちとか色々)

髪は淡い金髪で、瞳の色は蒼色。

すこし髪にウェーブがかかっていて、よく美人だと言われるわ。母が綺麗だったらしいからね。

05 動物に例えると?

うーん・・・チェシャ猫には兎っぽいつて言われたわ。

チェ「そりゃあ、意外と寂しがりやだし、色気もあるしねエ」

06 特技は?

一人暮らししていたから家事全般が得意ね。

07 ご趣味は?

お菓子作りよ。お茶会の時、よく作るの。

08 将来の夢など

特にない・・・歴史に名は残したいと思ってるけれど。

09 好きな言葉とかある？

「後悔先に立たず」前向きに生きていかなきゃ！

10 好きな動物は？

主人に忠実だし、犬が好きよ。

（時計兎とチエシヤ猫の視線を感じる）

11 好きな色

純白色。

12 好きな料理

基本的になんでも食べれるから、特に好きななんて物はないわ。

13 好きな異性のタイプ

うん・・・誠実な人がいいわね。

14 好きな同性のタイプ

基本的にサッパリとした性格の子とか・・・

15 座右の銘は？

そうね。

16 暇なときなにしてる？

お菓子作りか、お茶会。

17 旅行とか好き？

うーん。戦争の使者としか他国には行ったことが無いから、観光はしてみたいわ。

可もなく不可もないってとこね。

18 癒されることって何？

自分で作ったお菓子を美味しいって言うてくれること！

19 一緒にいて落ち着く人はいる？

ハンプティーが落ち付くわ。

20 ぶっちゃけその人は恋人です！？

まさかまさか！！“ただの”幼馴染よ！ね？ハンプティー。

ハン「うん・・・そうだね・・・」

時計「ハンプティー、傷は浅いですよ！頑張ってください」 哀れみの目。

21 コンプレックスとかあったりなんかしちゃったりする？

女だから、他の武官より弱いこと。迷惑かけっぱなしなの。

22 それを解消するために何か努力はしてる？

修行しているけど、ダメね。もっと頑張らなきゃ。

23 じゃあ逆に自慢できることは？

家庭的な所とか？私自身は自慢できることなんてないわ。

自慢できるくらい自分に満足しちゃったら、そこで終わりだもの。

24 人生で一番嬉しかったことは何？

ハンプティーに人生で初めて作った（失敗してたみたい・・・）お菓子を

無理して食べてくれたうえに、美味しいって言うてくれた時よ。

25 人生で一番驚いたことは？

反響の国のキングに結婚してくれと言われた時・・・
ドッキリ大成功って書かれた看板ないか探したくらいよ。

26 人生で一番楽しかったこと

武官の試験に合格したことだわ。

27 人生で一番怖かったこと

初めての戦場。戦いの冷酷さを身に叩きこまれたもの。

28 人生で一番辛かったこと

武官の一人が私を庇って大怪我を負ったこと。

29 外向的？内向的？

どちらかっていうと内向的かもね。

初めて会った人とかと打ち解けるまで時間かかるし。

30 道に1000万（日本円で）が落ちてました。どうします？
届け出るわ。

31 じゃあ、1000万円もらいました。どう使う？

孤児院とかに寄付したり、教会とかに寄付したりね。
貧しい地方に寄付もいいわね。

32 子犬が捨てられていた！！愛らしい声で鳴いています。どう
でる？

拾って、飼主が見つかるまで世話をしてあげる。

33 突然頼みごとをされました！ あなたならどうする？

内容を聞いてから、私にできることならするわよ。

34 とても仲のいい友達と喧嘩しちゃったよ！どうしよう！？
自分の非を認めて、許してくれるまで謝るわ。

35 嘘はつけるタイプ？

ええ。あんまり、つきたくないけど。

でも、使者は駆け引きが上手じゃないと務まらないしね。

36 もしかしてその嘘はついてもすぐバレちゃったりしない？
いいえ、バレないと思うわ。

だけど唯一ハンプティーにはバレたりするのよねー・・・どうして？

37 何か癖ある？

自分ではあんまり自覚が無いのだけれど、髪をいじる癖があるとか。

38 誰かに何か言いたいことたまってる？
あるわ、もちろん。

39 あるって答えたそのあなた！　じゃあこの穴に向かって
思う存分叫んでください！！！！
時計兔のセクハラ！！！！

チエシヤ猫の変態！！！！

40 ……酸素マスクいる？

いるわ・・・ハアハア、他にも言いたいことがあるけど、もう
いい。

41 あなたにとって一番大事なものは？
黄昏の国、ね。

この国は、私の全て……って言ったら大げさだけど、それくらい大切な。

42 自分といたらコレ！ みたいなのある？
金髪碧目は安易かしら……？

43 崇拜してる人とかいる？
いない、けど、尊敬している人はいるわよ。
私に戦い方を教えてくれた、師匠ね。

44 どうしよう！ 財布を掏られた！！
落ち付いて、被害届を出すわ。

45 コレだけは誰にも負けないものってある？
変人に好かれる率かしらね……

46 こいつには敵わないっていう人いる？
時計兎よ。チエシヤ猫とかなら言うこと聞いてくれるし……
時計兎はドSだしね。嫌がっても喜ばれるのよ。

47 全部答えてきたね？じゃあこのノリで普段なら言えないような秘密トークをお願いします！！
えーっと……思いつかないわ……
ああ！そうだ。私の初恋は私の師匠だったのよ。

48 ぶっちゃけ作品内での自分の立場ってどうよ？
かなり受難ね。不幸だわ。

49 ここぞとばかりに生みの親になんでも言っちゃえ！
もつと私を幸せにしてよね！これ以上不幸にしないで！！

50 ここまで読んでくれた方に何か。

ここまで読んでくれてありがとう。

これからも頑張るから、応援ヨロシクね。

オリキャラに50の質問

「Water Future」 <http://waterfuture.finito-web.com/orichara50.html>

9・王都への道中と他国の呼名 前編

「王都への道中と他国の呼名1」

パカラッパカラッと帽子屋の家から城を目指して馬を歩ませた。

「ねえ、チエシャ猫」

「ん？なあにー、アリス」

アリスは記憶喪失のせいで馬を上手く扱えないので、チエシャ猫と相乗りしていた。

「密かな疑問なんだけどね、この国って実質強いのか？
反響の国とかも強い？・・・あと王ってどんな人？」

大まかには説明されたが、細かい所までは聞かされていない。
まだ城に着くまではこのペースまでいくと2日かかるらしいので、
どうせならアリスはチエシャ猫に聞いてみた。

「正直、この国は強いよお。反響の国も強いけどねエ」

詳しく聞くと、黄昏の国は“量より質”らしい。

兵隊は他国と比べて小規模らしい。だが、武官1人1人が他国と比べ強い。

しかし、それとは対照的に反響の国は“質より量”派だそうだ。
大帝国なので人数がやたらと多い。

「まあまあ、この国は結構周りの国から恐れられているらしいよ

オ？

確かにー、『イカレ帽子屋』にイ『三月白兔』とかあ『殻のハンプティードンプティー』、

『チェシャー猫』、『黄昏の国のアリス』とか屈強武官がいるしねえー」

これらは他国でのアリスたちの呼名だ。よひなイカレ帽子屋は言わずともわかる。

三月白兔とは、時計兔のことなのだ。3月はウサギの発情期。その時期のウサギは気違いで、おまけに強い。なので時計兔も三月白兔と呼ばれている。

殻のハンプティードンプティー。ハンプティーのことである。しかし、詳しく意味はわからない。ハンプティーが卵料理好きということが

関係しているのだろうか。・・・よくこの意味は知られていない。

アリスとチェシャー猫の呼名はまんまだ。チェシャー猫はチェシャーの猫のようだから。

アリスは良い呼名が見つからなかったのか何なのか・・・自分の呼名が適当すぎることに、アリスは少々不満そうにした。

しかし、これらの呼名は全て・・・見下して嘲あざわらっている。

“イカレ”や“3月”など呼ばれて嬉しかったりなどするはずも無い。

「・・・で？王ってどんな人なの？」

「アリスウこれ以上喋ると舌嚙むよお」

こうサラリと流されてしまった。

「もう！答えてよね。答えてくれないなら良い。他の人に相乗りさせてもらってくるわ」

「ええー！！アリスひどおい。答えるからやめてエ」

と、手綱を握っていたチエシャ猫の腕が、アリスの腰にがっちりと固定されてしまう。

「ちょ、ちょっと・・・！危ないからちゃんと手綱持つて！」

「アリスが言うならア」

（選択ミスだわ。何で、私とチエシャ猫が相乗りしてるの？）

心の叫びは誰とも知られること無く
空しくアリスの心の中でこだました。

10・王都への道中と他国の呼名 後編

「王都への道中と他国の呼名2」

そもそもアリスとチェシャ猫が相乗りしている理由はチェシャ猫が、『アリスと一緒にやないと行かないよぉ？』こう駄駄をこねたせいである。

「アリス」

と、その様子を見ていてもたってもいられなくなった時計兎が馬を歩ませて来た。

「大丈夫ですか？ “バカネコ” の世話は疲れるでしょう？
なんなら私と相乗りしますか？」

につこりとドス黒い笑みを絶やさず時計兎が言う。
アリスはその笑みに恐怖を感じ逃げ腰になってしまう。

「大丈夫だよぉ？ 年中発情してる “三月変態兎” よりはマシだから
あ」

しかしチェシャ猫は物怖じとせず言い返す。
そしてその瞬間、両者お互いから殺気という殺気が発した。

「（何です？ チェシャ猫、この私に喧嘩でも売ってるんですか？）」

「（うん。オレのケンカは少々値が張るけどねえ）」

「（いいでしょう、買ってあげますよ。ですがそれなりの覚悟はあるんでしょうね）」

アリスには2人の心の会話、つまりテレパシーが聞こえたが、こう思い込むことにする。

「（今は幻聴よ！！！そうよそう。違ういわ）」

「あのハンプティー、帽子屋！相乗りさせてくれる？」

火花を散らす2人を放っておき、先頭にいた2人にそう呼びかけた。

「どうしてだい？チエシヤ猫は？ケンカか・・・」

「あの2人仲悪いの？」

「仲悪いというか犬猿の仲だな。」

いや、猫兎ねこの仲というべきだな」

帽子屋が感慨深くそう言った。

くわしく聞くと、時計兎とチエシヤ猫は獣人という種族同士らしい。獣人は産まれてから10歳まで完全な獣の姿をしている。

10歳から今の時計兎とチエシヤ猫のような半人半獣になり、成人と認められるのだ。

かつてあの2人が10歳未満のとき、時計兎はチエシヤ猫に食べられそうになったことがあったとか・・・

いくら時計兎とはいえ兎。兎VS猫では例え兎の方が年上でも猫のほうが強いだろう。

まあ、こんなことがあつてそれ以来、時計兎はチェシャ猫が大っ嫌いらしい。

チェシャ猫も、10歳を過ぎてから時計兎に逆襲され大っ嫌いだと。

「（ま、しかもそこにアリスがねえ・・・）」

「（絡んでくるから余計厄介な仲になつたんだが。本人は自覚なんて全くないしな）」

そのことを知らぬは本人ばかりなりであつた。

「で、どっちか乗せて。早くしないと夕が暮れちゃうし。このまま止まっておくのも悪いから」

そうだ。先ほどから全くと言っていいほど進んでいない。

やはり、チェシャ猫にまかせるのは無理がある。人選ミス。だと帽子屋は思った。

「ハア、じゃあ俺でいいんじゃないか？」

「ダメだよ」

帽子屋はそう言うがすぐに反対の声が上がる。

ハンプティーだ。

「アリス、帽子屋は駄目だよ。“むつつり”だから。僕の方がいいよ？」

結局、ハンプティーもアリスと相乗りしたいただけだと思うが帽子屋は大人しく押し黙る。

「（俺だつて、アリスと相乗りしたい。普通、当たり前だろう？何が嬉しくて

男と相乗りしなきゃならないんだ。・・・だいたい、むつつりつてなんだこの“卵”！！）」

しかし内心では思いつきり毒づいている。

そんなこんなであまり進まないまま、1日を終えてしまふという事態。

次の日は死ぬ気で馬を走らせた（馬はご臨終様という程可哀想だが）そのおかげで城に着いたのだった。

おまけ2 時計白兔に50の質問

〈おまけ・時計白兔に50の質問〉

01 お名前をどうぞ!!

時計白兔です。時計兔と呼んでくださいね。

02 性別は?

男です。

03 誕生日!

春生まれです。

歳は20歳です。

04 身体的特徴(身長とか顔立ちとか色々)

瞳は青色で髪は蒼色です。

あと兔の獣人なので兔耳と尻尾がついてますよ。

05 動物に例えると?

兔が妥当でしょう。

06 特技は?

お茶を淹れることですかね。

自分でいうのもアレですけど得意ですよ?

07 ご趣味は?

読書です。中でも神話や古文書は好きです。

08 将来の夢など
アリスの夫ですねえ。

09 好きな言葉とかある？
「因果応報」です。

10 好きな動物は？
え？兎ですね、同じ種族なんで。
猫は大嫌いですけど。

11 好きな色
碧色が好きです。

12 好きな料理
私は肉より野菜派です。ベジタリアンなんですよ。
どっかの猫と違って。

13 好きな異性のタイプ
そりゃもうアリスしかないでしょう。
あなたも野暮な質問をしますね。

14 好きな同性のタイプ
・・・うーん、アリスに嫌われていて
アリスに全つく興味ない奴なら考えてあげます。

15 座右の銘は？
「蓼食う虫も好き好き」好みは人の勝手ですから。

16 暇なときなにしてる？
暇なんてあるわけないじゃないですか、何言ってるんですかあなた。

17 旅行とか好き？

嫌いです。面倒臭いです。

18 癒されることって何？

アリスの笑顔か泣き顔を見たときですかねえ。

19 一緒にいて落ち着く人はいる？

落ち着く人・・・はいないです。

アリスは一緒にいると落ち着くというより激しく燃え上がりますから。

アリ「まって、それ何が燃え上がるの？」

言っただろうがいいですか？

アリ「・・・いや、いいわ」

20 ぶっちゃけその人は恋人です！？

ノーコメント。

21 コンプレックスとかあったりなんかしちゃったりする？
無いですよ。私にそんなものあると思ってるんですか？

22 それを解消するために何か努力はしてる？

だから無いと言っているでしょう。

23 じゃあ逆に自慢できることは？

耳がいい所とかですか。

24 人生で一番嬉しかったことは何？

アリスが私だけに手紙を送ってくれたこと。

25 人生で一番驚いたことは？
アリスが監禁されたことです。
あのクソキングめ。

26 人生で一番楽しかったこと
ナイトメア全員で戦ったこと。

27 人生で一番怖かったこと
幼いころどっかの野良猫に食べられそうになったことですよ。
人生の汚点です！！

28 人生で一番辛かったこと
ノーコメント。

29 外向的？内向的？
内向的なんじゃないですか。

30 道に1000万（日本円で）が落ちてました。どうします？
どうもしません。素通りです。

31 じゃあ、1000万円もらいました。どう使う？
いりませんけどねえ、まあ、アリスにでもあげますよ。

32 子犬が捨てられていた！！愛らしい声で鳴いています。どう
でる？

無視です。犬は猫の次に嫌いですから。

33 突然頼みごとをされました！ あなたならどうする？
即断ります。自分でやってください。

34 とても仲のいい友達と喧嘩しちゃったよ！どうしよう！？
放っておきます。

35 嘘はつけるタイプ？
もちろん。

36 もしかしてその嘘はついてもすぐバレちゃったりしない？
いいえ、バレませんよ？墓場までバレない自信があります。

37 何か癖ある？
片眼鏡をかけなおす癖でしょうか。

38 誰かに何か言いたいことたまってる？
はい、ありますよ。

39 あるって答えたそのあなた！じゃあこの穴に向かって
思う存分叫んでください！！
では遠慮なく・・・

バカネコさっさとくたばってください！

40 ……酸素マスクいる？
いりません。私を舐めないほうがよろしいですよ。

41 あなたにとって一番大事なものは？
アリスのみ。

42 自分といたらコレ！みたいなのある？
兎の耳と片眼鏡。

43 崇拜してる人とかいる？
いませんねえ。

44 どうしよう！ 財布を掏られた！！
減るものじゃないですしいですよ。
アリ「減るものでしょう！！」

45 コレだけは誰にも負けないものってある？
戦略です。

46 こいつには敵わないっていう人いる？
いいえ？

47 全部答えてきたね？じゃあこのノリで普段なら言えないような秘密トークをお願いします！！
そうですね。小さいころはいじめられっ子だったんですよ。
いまSなのはそいつらのせいかもですね。

48 ぶっちゃけ作品内での自分の立場ってどうよ？
影が最近薄いような気がするのですが・・・

49 ここぞとばかりに生みの親になんでも言っちゃえ！
目立たせてください。

50 ここまで読んでくれた方に何か。
ご苦労様です。

これからもアリスと私の恋の行方に向後ご期待！！！

オリキャラに50の質問

「Water Future」 <http://waterfut>

h u
t r
m e
l .f
i
n
i
t
o
-
w
e
b
.
c
o
m
/
o
r
i
c
h
a
r
a
5
0
.

11・ハート女王とジャック 前編（前書き）

遅くなりましてすみません。
では新話をどうぞ。

11・ハート女王とジャック 前編

「ハート女王とジャック1」

「う、ご愁傷さまで・・・」

アリスと目の前にいる屍と化した馬に哀れみの目を向けた。無理もない。城下町までぶっ続けで走らされたのだから。

馬をこのようにした犯人たちは城へ行っている。

ここで待っているように言われ、ずうっと待っているのだ。またまたアリスは置いてけぼりになった。

「馬も大変よね。私も大変だけど・・・」

苦笑しながら、やんわりと馬の鬣たてがみを撫でる。

栗毛の馬は唯一の安らぎにうっとり、気持ち良さそうに目を閉じた。

ふわっと暖かく優しい風が吹く。

その風は春独特の花の香りがする。

暖かな春の陽を感じ、次第にウトウトと眠りの渦に沈み込んでいった。

この世の全てはあたしのもの。

あたしが願えば何でも手に入るの。

あたしに逆らうものは全て・・・壊しちゃえばいいんだから。

「やっぱり、城下町は華やかで良いわね」

あたしはとつても有名人。何たって、黄昏の国の頂点^{トップ}なんだもの。
有名人であるあたしはフードを被り、城下町へお忍び中。

ドンッ

「キャッ・・・」

「うおっ！？わわわ、譲ちゃんすまねえな」

何この男。かつこ良くもないし、価値無しね。
そう思ってたあたしはパンパンとスカート^{はた}を叩く
ベチヨツと音がして手に何かが付いたわ。

「やつやだ！ケチャップ！！」

男とぶつかった時に相手が持っていた食べ物のケチャップが
スカートに付いていたのよ。

「うわぁー・・・悪いなあ、本当にごめんよ」

「・・・ない」

「え？」

「許さない！！！！あんなんで死刑にしてやるわ！！！！！！」

このワンピースは、あたしが城下町へお忍びで出てもわからないよ

うにと

自分で必死に作ったものだったのに・・・！

「はぁ！？」

素っ頓狂な声を男があげる。なぜ死刑？と言う表情だ。

「ちょっと・・・あの人“死刑”って頭おかしくない？」

「クスクス、確かにそうかも」

ざわつきと共に嘲りが聞える。ムカつくムカつくムカつくわ！！！！

ただでさえイライラしているっていうのにね。

「何よ！！今笑った奴も死刑にしてやるわよ！」

こんな高位のあたしを嘲笑するなんて、許されると思っているのかしら？

残念、あの人たちの生命いのちはもう終わり。

「あたしの名前は何だと思う？この国の女王ハートよ」

フンと笑みながらフードをとる。笑ってた人達の顔が一気に真っ青。

クス、面白いわ、最高よ。

「は、ハート女王さ・・・ま・・・うつわあああ！俺、本当に殺されちまう！！」

あたしに逆らった奴らは全員打ち首にしてやったわ。

キングクラスのスピード兄様や、エースクラスのダイヤや、ジャッククラスのクロバーに「やめろ」と言われるけれど気にしない。

何でかって、黄昏の国は王より女王の方が権力が強いから。

王は他国との交渉のための御飾り。女王は自国では何でもし放題なんだから!!!

「いやああ！ハート女王様許してください！！」

笑った奴らもそう言っこんがんて懇願してくる。

「さよなら、今の家に家族や友人たちに別れを言ったほうがいいわよ？」

そうよ、そう。この世の全てはあたしのもの。
人の生命でさえもね。

「ま、待って！」

そこに静止の声がかかる。

「殺すなんてやりすぎよ！相手も謝ったじゃない！」

ああ、こんなあたしでも一番大っ嫌いな最悪女。
名前はアリス。初恋だったハンプティハートの恋心を奪った
口うるさい凡人武官。

監禁されてたくせにどうしてまたここへ戻ってきたのよ？

11・ハート女王とジャック 前編（後書き）

登場人物紹介

ハート（16歳）

瞳：紫色 髪：金色

武器：ハート型宝石の付いたステッキ

特技・・・メイク

趣味・・・宝石集め、ドレス集め

備考・・・左頬にハートマーク（紅色）がある。

黄昏の国の女王 クイーンクラス

王であるスペードとは兄妹。

自分本位で我侷。

露出的なドレスを好み、美少女。

12・ハート女王とジャック 後編

「ハート女王とジャック」

眠りから覚めると、何だか騒がしかった。

近づいてみると女の子と男性が言い争いをしている。

ただ、単純にやりすぎだと思った。だから静止の声をかけた。高々、服にケチャップを付けた程度で打ち首死刑だなんて。

これは、一体どうなっている・・・の？

チェシヤ猫たちから聞いた王というのは優しい人だとも、その王の妹の女王はどうなっているの？

その場では多くの疑問が混ざり合っていた。

アリスは王の妹であるハートが、王とは性格が真逆だから驚いている。

ハートは軟禁されていなくなり、清々したと思っていた大嫌いなアリスがここに帰ってきたから驚いている。

それは周囲の人々も同じこと。

反響の国の王に見初められ、この国から消えた我が国の女性武官アリスがどうしてここにいる？

そもそも、ハートがここに居ることすら異質だろうに。

まるで時間が止まったようだった。

同じ金髪でも、淡い色のアリスと濃い色のハートでは見る人に違う印象を与える。

空のような蒼の瞳と、アザミのような紫の瞳はお互い見詰め合ったまま動かない。

また、人々もその場から動こうとはしなかったし、動く術も無かつた。

しばらくして

「取り込み中の所すまぬが」

と、どこからか男の声がする。

人々の間を慣れた動作でかいくぐり、見詰め合う二人に近づいてきた人物。

「クローバー」

ハートがその男に向かってそう言った。

アリスは記憶の糸を辿り、この国で王の近衛^{ジャッククラス}を務める青年だと思いつく。

城に住むハートにとってとても良く見知った人物である。

アリスも記憶をなくす前はとても良く見知った人物であった。

「ハートを連れて来る様に頼まれたのでな、迎えにきた。

城には“悪夢のお茶会”のアリス以外は揃っている」

「ナイトメア……が揃ってるの？」

ナイトメアティーパーティー
悪夢のお茶会。

アリス、時計兎、ハンプティ、チェシャ猫、帽子屋の5人の武官の
ことをまとめて言う呼び名だ。

ナイトメア
悪夢由来はこの5人と戦うと、必ず数日間悪夢にうなされる。とい
う説や

この5人が揃うと、辺り一面が悪夢のような地獄絵図となるという
説。

ティーパーティー

お茶会の意味は、この5人はそれが敵地であつても・・・
いや、敵地であるからこそお茶会という名の会議を開く。

当初は普通の作戦会議だったのだが、何時の間にか気持ちを落ち付
かせるという

名目でお茶を飲むようになった。それを見た敵兵がつけた・・・・・・
と一般的にはいわれている。

以上の理由から何時からかこの5人を総合し、

ナイトメアティーパーティー

“悪夢のお茶会”略してナイトメアと

呼ぶようになったとアリスは帽子屋から聞いた。

「クローバー、どういうこと？アリスはなんでここに！？」

「うむ、落ち付け。アリスは反響の国から逃げてきたのだが
その際記憶喪失になったらしい。我々のことも誰だかわからない
とのこと」

簡潔にそう告げた。

ハートは「記憶喪失・・・！？」と絶句している。

「あ、あの」

「アリス、某は城の使いであるから安心して良い。
他の4人からも頼まれている」

クローバーの新緑の束ねた髪が風でなびく。

本当にクローバー色の綺麗な色の髪をしていた。

「いや、違うの。あの死刑って言われた人は見逃してあげられない？」

自分が口出しできることでは無いかもしれない。

けれど、人として言わなければならないと心の底から思った。

だからクローバーに頼んだだけであって、ハートが嫌いなわけでも、あの男性が好きなのでもない。

ただ、ハートは人として間違っている。

ヘリオドール石のような黄緑色の何の感情も
無いように見据えた目は

「承知」

少し笑ったように優しくアリスを見た。

12・ハート女王とジャック 後編（後書き）

登場人物紹介

クローバー（18歳）

瞳：黄緑色 髪：新緑色

武器：刀

特技・・・暗記

趣味・・・刀の手入れ

備考・・・右頬にクローバーマーク（濃緑色）がある。

黄昏の国の王の近衛 ジャッククラス

和風を好み、古い喋り方をする。

見習い武官時代にアリスと同期。

アリスに淡い恋心をいただいている。

出身は東の島国「誇称の国」

13・黄昏の王とエース 前編

「黄昏の王とエース」

「わー！アリスー、無事で良かったあ」

城に着いたら真っ先にチェシャ猫に抱きつかれたアリスの図である。

「チェシャ猫っ離して・・・首が・・・しまってる」

ワザとではないのだろうが羽交い絞めにされ、アリスは苦しそうに喘いだ。息ができなくなる。

「ハートが城にいないことに気付いてえ、ハートはアリスが嫌いだからアモシカしたら街で会ってるかもってねエ。苛められてたらどうしようかと思ったよオ」

全くの聞く耳持たずだ。

さらに強く抱かれてアリスは間違いなく死ぬと悟った。

ゴッソッ！！

突如良い音がある。

おそろおそろアリスが目を開けると、時計兎がその辺にあった花瓶で思いつきりチェシャ猫を叩いていた。

「いったいなア。三月変態兎何するのぉ？男の嫉妬は見苦しいよオ??？」

チエシヤ猫は打たれた後頭部を擦りながら文句を垂らす。

だが時計兎は花瓶を元あった場所に戻すと、見下すように立つ。

「フン。アリスが死に掛けてましたけれど？ 気を使えない男って嫌われるんですね」

ああ言えば、こう言う。

「アリスとオレのラブシーンを邪魔するなんてネエ。気を使えないのはそっちじゃない？ 空気読めないバカウサギ」

「ア・レ・の・ど・こ・が！！ラブシーン何ですか？ 馬鹿な私には理解できません。ね？ 阿呆猫」

どこまでも低次元に落ちていく、不毛なやりとりだ。子供染みていて大人気ない口論に一同は呆れる。

「まあまあ2人とも、その辺にしておいて。王が、スペードが呼んでいるよ」

ハンプティーが割って入りそう伝えた。

仕方が無いので猫兎は一時休戦する。

会見の間に行くべくアリスたちはゆっくりと歩った。

「あー、アリス。言っておくが王だからといって敬語は使わなくていいぞ」

帽子屋は、緊張した面持ちのアリスにそう言う。

誰がどう見ても、アリスの顔は引きつっている。

「そ、そうなの？」

謙讓語や尊敬語を使わなくても良いなんて。

王である人物に多少失礼ではないか。

「うん、アリスは何時も通りにしておけばいいんだよあ」

チェシャ猫は呑気に笑うが、アリスにはそれができなかった。

「アリス、良く反響の国から戻ってきたね」

会見の場につくと相手の第一声はこれだった。

恐らく、真中の王冠を被り玉座に座っている人物が王のスペード。その右に座っているのがアリスと先ほど会った女王のハート。左右に立っているのは、ジャックのクローバーとエースのダイヤであろうことは予想がつく。

王はハートと同じような金髪に紅い瞳。狂眼と呼ばれる赤系統の瞳だが

どこか優しげな印象をもたせた。

（本当に兄妹なの？あの2人・・・）

右に立っているダイヤは陽だまりのような橙の髪とトパーズみたいな黄色の目。しかし、左目に眼帯がしてある。

ハンプティーように片目に怪我でもしているのか。などと
考えていると

「アリス」

急に話しかけられビクッと一瞬震える。

「は伊ッ」

「「・・・・・・・・」」

別のことを考えていたのでつい変に声が裏返る。

じーっと視線を感じ、アリスは恥ずかしさからか顔を赤くしていく。

突如スピードがクスッと笑った。

13・黄昏の王とエース 前編（後書き）

登場人物紹介

スピード（19歳）

瞳：紅色 髪：金色

武器：無いらしい

特技・・・話術

趣味・・・勉強

備考・・・左頬にスピードマーク（青色）がある。

黄昏の国の王。

ハートの兄にあたる人物。

交渉が上手く策士。

19歳に見えないくらい大人びている。

アリスに対して特別な感情を持っているようだが・・・

14・黄昏の王とエース 後編

「黄昏の王とエース2」

「アリスは本当に変わってないね。
記憶喪失になったというのは本当？」

そうたずねるスペードにアリスはコクリとうなずいた。

「そう・・・でもよかった。例え記憶を失ったとしても
傷一つなく帰ってきてくれたのだから」

笑って言うスペードのお陰でその場に和やかな空気が流れた。
しかし、隣の女王によってそれは壊される。

「良くなかないわよ、兄様！都合よく記憶なくして
どうせあんたがあたしにしたことも覚えてないんでしょ！！」

ビシッとハートに指を指され、アリスは困惑する。あまりの剣幕に
たじろいでしまう。

「ハート、やめや。失礼やで」

すると右に立っていたダイヤがかばうように助け舟をだしてくれた。
スペードもそれに便乗する。

「やめないか、ハート。“あれ”は仕方のないことじゃないか」

「う、うるさい！どうせ兄様にあたしの気持ちなんて・・・！！」

判る訳ないし、判ってほしくない！！！！」

ハートは場から逃げるように立ち去った。

「あ、の。“あれ”って……？」

アリス一人がついていけず、頭の上にはさぞかしクエスチョンマークがついていることだろう。

「……この話を聞いても、自分のせいだとか思わないでくれるかい？」

はい。とアリスが返事をする、スペードはゆっくりと語りだした。

「ハートは、本来ならば反響の国の王の下へ嫁ぐ予定だった。

しかし王様は君を好きになってしまったね。

向こうが婚約破棄をしたんだ。ハートは嫁ぐ準備もしていたから原因……ともいえる君を恨んだということさ……」

サカウラミ

という言葉がアリスの頭の中を駆け巡ったが、すぐに頭を振る。

ハートも哀れだ。政略結婚だとしてもそれは恨まれても仕方がない。

「アリス……どうかハートを見捨てないでほしい」

「大丈夫です」

微笑んで言うと、スペードも微笑み返した。

「じゃあ話も終わったことやし、改めて自己紹介といこか。
俺はエースクラスをしとるダイヤゆーねん」

ダイヤは人の良さそうな笑みをみせる。

陽のように明るく笑うダイヤは眩しくみえた。

スピードもダイヤの後に言葉を紡いだ。

「僕はスピード。この黄昏の国の王。

聞いてると思うけれど、ハートは女王で、僕の妹なんだ」

スピードは16歳のころ、王と女王であつた父と母を亡くした。
と、いうのもなんと他国で暗殺されたらしい。

まだ少年ともいえるスピードを王として、少女といえるハートを女
王として

黄昏の国の激動期が始まったのだ。

王の仕事は、他国との交渉や自国の武官文官の整理。

女王の仕事は、国王代理や自国の治安を守ること。

幼き頃から神童として知られていたスピードは王らしく

歳を重ねるたびに威厳を持ち、話術に優れた。

それに比べ、甘やかされて育ったハートは

女王が本来するはずの治安を守る所か掻き回してしまっている。

黄昏の国は王と女王が協力し合い、初めて国として起動する。

だが、ハートは王に負担を掛けさせるばかりなのだ。

次に左にいるクローバーが口を開いた。

「先ほど、城下町で会ったが、ジャックのクローバーだ。アリスとは見習い武官時代の同期であつたのだが」

一瞬、黄緑の瞳が悲しそうに揺らめく。
だが、アリスはそれに気付いてはいなかった。

「ナイトメア、行き成りで悪いのだけれど、話したいことがある。
ここでは侍女たちに聞かれ兼ねない。国家機密にしたいから会議室へ来てほしい」

こうして、アリスは重苦しい雰囲気からは解放された。

14・黄昏の王とエース 後編（後書き）

登場人物紹介

ダイヤ（19歳）

瞳：赤みがかかった黄色 髪：橙色

武器：体術

特技：・・・勉強

趣味：・・・体を動かすこと。

備考：・・・左頬にダイヤマーク（オレンジ）がある。

黄昏の国の王の補佐。
エースクラス

おちゃらけているように見えるが実は真面目。

飄々としていてつかみ所のない性格。

武官ばい文官で文武ともに秀でている。

喋り方が訛っていて、銅の一族の跡継ぎ（予定）

あかがね

銅の一族・・・黄昏の国の有力で昔からある一族。

一応親王家ではあるが、今の王を認めていない。

外交には干渉せず、厳しい一族である。

（銅の一族は喋り方が、ダイヤのように関西弁訛り）

15・宣戦布告と会議 前編

「宣戦布告と会議1」

「え、私もなの？」

「ここは会議室前。

どうしてか記憶喪失のアリスまで連れて来られた。

「ああ、ナイトメアはいつも最前線で戦ってきたからな」

帽子屋の答えにアリスは首をかしげる。

「アリスもナイトメアの1人だからね」

「それに、アリスに関わることだろうな」

ハンプティと帽子屋がちゃんと言い直してくれた。
コンコンツと時計兎は会議室の扉にノックする。

「入りますよ」

カチャリと音をたてて扉が開く。

続いて皆も中へ入っていくので、アリスも大人しくついていった。

「まあ、先ほどと面子は変わらないけれど・・・

邪魔が入らず話ができるね」

スピードがにこりとそう言う。まさにその通りだ。

会議室には、スピード、クローバー、ダイヤとナイトメア・・・ハートを抜かしたメンバーがそろっていた。

「じゃ、座って」

こう促され、アリスは1つの椅子に腰掛けた。

「では、今回の議題はズバリ反響の国との関係についてだ」

「アリスが逃げたのでな、王はカンカンに怒っているかもしれん」

「相手の出方にもよりますね」

「いや・・・でも・・・」

アリスは会話に入れない。

しかし、自分が逃げてきたせいで大変なことになっているというこ
とはわかる。

それは、次のダイヤの言葉で決定的になった。

「そうやらなあ、反響サンのほうは宣戦布告してきたで」

宣戦布告・・・それは戦争を始めるといふ合図の狼煙^{ろっし}。

「ごめんなさい」

消え入るような声でアリスは謝る。

所詮、謝るしかできない。逃げずに結婚したほうが
よかったのではないか。そんな疑問が頭の中をよぎる。

「や、別に謝ってほしいわけでもないし、謝らんでもいいんじゃない？
アリスちゃんが可愛すぎて気に入られただけなんやし」

ダイヤがそうフォローしてくれる。

「そうですよ、魅力的なのは良いことですから」

「そうそう」

と、次々に続けて周りがフォローしてくれた。

「それに、元々反響の国とは白雪の町の権利争いで
戦争するかもしれないのだから」

そろそろとうつ伏せていた顔を上げると、
スピードの穏やかに微笑む顔が目につく。

しかし、すぐに王らしい威厳のある面立ちへと変わった。

「そこでナイトメア。君等に国境に行ってきてほしい。
もうすでに武官を送り込んでいるから、その補助だと思うけどね。
・・・アリスはどうするか」

スピードは目で字を追いかけるながらパラパラと資料を捲る。

やけに静かな会議室に紙の擦れる音だけが聞こえた。

16・宣戦布告と会議 後編

「宣戦布告と会議2」

「記憶を無くしているから、連れて行かぬ方が良くはないか？」

アリスを危険に晒すよりはマシだ。

男性陣はそう思ったが、1人異議を唱える者がいる。

「待て、俺はここに来る前アリスと戦ったが実力は落ちていない。連れていっても問題無いだろう。それに・・・記憶が戻るキーワードに

なるかもしれないしな」

そう言われ、皆も納得した。

「だがっ危険だ！！！」

珍しいことにスピードが声を荒げる。

それに周囲も驚いたような表情になる。

スピード自身もこんなに大きな声をだして驚いていた。

「大丈夫だよお、スピード。もし危険でも、オレがいるしィ」

ニパツとチエシャ猫が笑い、アリスに抱きつくこうとする。

「“オレ”じゃなくて“オレ達”でしょう、バカネコ」

が、時計兎によって阻まれた。

「スピード、心配しなくてもいいよ。ね、帽子屋」

「ああ、アリスは俺等が守る」

そつとハンプティーがアリスの頭に手をのせた。
優しい手つきで撫でられる。

（なんか、懐かしい）

こんな状況、前にもあった気がする。
何だか懐かしい匂いがした。

「で、アリスちゃんはどすんの？行く？行かへん？」

ダイヤの問いにアリスは

「行く！」

と即答で答えた。

「決まり、だな」

帽子屋がフツと口の端を上にあげた。

「ザ・ン・ネ・ンでしたね。スピード」

時計兎の意味有り気な言葉にそれぞれ、

「ん、どうしたの？皆・・・」

チエシャ猫はお腹を抱えて笑い、時計兎も小さく笑い、ハンプティーも笑いを堪えながら、ごまかすように紅茶を口に持っていき、

帽子屋は手で口元を覆い、顔を逸らして笑いを堪えているようで、ダイヤも吹き出し、クローバーは哀れみの目をスペードに向けていた。

スペードに至っては眉を寄せ、あからさまに不機嫌そうだと、体から負のオーラが出ている始末。

（でも、怒ってても綺麗な顔だなあ）

と、見とれてしまう。

こんな時でもそんなことを思うアリスは自分自身に呆れた。

「・・・全く、王である僕を笑うなんてね。他国では絶対無いですよ。」

アリスとクローバー以外は今月給料ナシ」

ズバツと一刀両断でこのようなことを言う。

その瞬間、ダイヤとチエシャ猫がピシリと固まった。

ハンプティーたちは予想していたのか然程騒いでいない。

「なっんねんそれ！アリスちゃんはいやーないとしてもなんでクローバーは罰受けてへんのや！」

「クローバーは“貴様等”と違って僕を笑わなかったからね。」

何か文句でも？」

にっこりと笑ってはいるが、内容は全くの悪魔ぶりだ。

ダイヤが職権乱用やゝ！といまだ騒いでいる。

「さてと、じゃあ今日は解散といこうか」

また明日に。と、告げてからスピードは会議室を出た。
しかし、出る前、こっそりアリスに耳打ちした。

「話したいことがあるんだ。後で中庭に居てくれないかい？」

アリスは返事をする代わりにスピードを見つめる。

スピードはフツと笑むとと、今度こそ出て行った。

話したいことって何だろう？とアリスが考えを巡らせていると
会議室一杯に帽子屋が淹れた紅茶の甘い香りが広がった。

17・誰そ彼れ時と王の顔

「誰そ彼れ時と王の顔」

黄昏時

誰^たそ彼^かれ。

誰が誰かと見分けのつかないほどの黄金色の時。

この国の黄昏時は、何よりも美しい。

「お待たせ、アリス」

王冠を被っていないせいもあるだろうが、初めアリスはスペードが来たとき

一体誰なのかわからなかった。

「アリス？」

その声でやつと誰だか認識する。

「あ、何でもないです・・・そんなに待ってませんから」

ぶんぶんと手を横に振るアリスに、スペードはいつものような微笑を浮かべる。

アリスの座っているベンチに腰掛けて

スペードはアリスを真っ直ぐ見つめると話し始めた。

「アリス・・・君は本当に記憶が無いんだね？」

確かめるようなスピードの問いに肯定すると、
スピードは顎を右手で押さえた。

「アリスからして、どういう感じだい？」

「え？」

主語のない問いかけに、アリスは首を傾げる。

「・・・僕らだよ。以前のアリスとナイトメアやダイヤやクローバーは
とても仲が良かった。でも、もうそれも憶えていないのだろう？
僕はね、人と仲良くなるには、相手のことを良く知らない駄目
だと思う。」

でも、今のアリスはその段階を吹っ飛ばした状態で友人になれと
言っているようなもの。アリスはそれをどう思う？」

探るような目でアリスを見る。

「あ・・・」

先程のような優しき瞳ではない。

紅蓮の炎が宿っているかのような紅の目。

穏やかな瞳が“狂眼”に変わった瞬間だった。

「わ、私・・・」

アリスはぎゅっと目を瞑る。

手もきつく握り締めて、拳をつくる。

「た、しかし・・・時計兎もチェシャ猫も変態だし、

皆変わっててヒトクセあるけど・・・」

ヒトクセどころかフタクセ、ミツクセもあるだろう。

クセという言葉では締めくくれないほどの個性の濃さだ。

「でも！」

と、アリスは強く言い放った。

「悪い人たちでは無いということは、判る。だから大丈夫だとも思う。」

私は彼らを、そしてあなたを信じるわ！」

アリスは敬語すら忘れ、真剣な眼差しでスピードを見つめた。

スピードはというと、“狂眼”をフツと緩め、いつもの優しい瞳に戻る。

「その言葉、僕も信じるよ。アリス」

そこには王がいた。

国の頂点に立ち、時には国の命や、民の生命いのちさえも扱うことができる存在。

両親を亡くし、16という若くして王座についた青年、スピード。

臣下を信じ、自分も臣下に信じられる。

そんな青年の王の顔がここにはあった。

「所でアリス、敬語取れたね」

御免なさいとアリスが謝ってもスピードは顔を横へ振り、この方が嬉しいとスピードは笑う。

アリスは夕陽よりも顔を朱に染め上げる。

（そんなことをサラッと・・・天然のタラシね・・・）

ふと、アリスは心に蟠^{わだかま}りを覚える。
考えるうちにそれが何なのか気付いた。

「あの、スピード。お願いがあるの」

言ってみてと促され、アリスは口を開いた。

「ええ。・・・スピードは、私を前のアリスや今のアリスと言うけれど、

私はどんなことがあっても“アリス”であることは変わらないわ。
・・・今も、記憶を失う前も“アリス”よ」

そう例え、アリスの外見が変わったとしても、アリスはアリスだ。
アリスは自分が“アリス”であることに、どんと誇りを持っている。

「・・・そうだね」

スピードは少々驚いたような表情を見せたが、すぐに表情を戻すと言った。

「アリスは、アリスだ」

18・漆黒の夜空と夜のヒト 前編

「漆黒の夜空と夜のヒト1」

それからしばらく和やかな会話をした。星が空に昇るまでずっと。

「スピード、こんな遅くまで話につき合わせてごめんなさい」

「うっん、気にしないでほしい。僕も中々楽しかったから」

それじゃ、とアリスが案内された部屋に戻ろうとしたとき、突然手首を掴まれた。

「わっ！！！びっ・くりした。どうしたの？」

「え・・・あつごめん」

どうやら無意識の内にした行為だったらしく、本人も意外そうな顔している。

慌ててパツとスピードは手首を離した。

「あの・・・どうして会議中に皆が僕を笑ったかわかるかい？」

「全然判らない・・・けれど」

アリスには見当もつかない。

「そう・・・引き止めてごめん」

不審に思いながらもアリスはその場を離れた。

スピードはアリスが完全に去ったのを確認し、空を仰ぎ見る。

「・・・アリスを、前線に行かせたくなかったのは心配だったからだよ」

その後、ギュツと瞼を瞑って吐き出すように呟く。

「あと、ナイトメアと他の男共と一緒に居させなくなかった・・・僕も、かなり心が狭いものだ・・・」

その呟きはアリスには届かず、漆黒の夜空へと吸い込まれていった。

一方、部屋に戻ったアリスは夕食を摂るため武官用食堂へと向かっていった。

はずなのだが。

「ま、迷った！！！」

先ほどから同じような所を行ったり来たりしている。
運が良いのか悪いのか、人一人とも出会わない。

「だいたいね、ここ広すぎるのよ。」

一体どこに行けばいいのお！？

記憶喪失&方向音痴。迷って当たり前である。
どうしようも無くうろつくと彷徨っていたら、

「あ！ここ、ハンプティーの部屋じゃない」

天の助けとばかりに「ハンプティー」と書かれたプラートを掛けた部屋を見つけた。

ハンプティーが居れば案内して貰えると思い、部屋をノックするしかし、返事は返ってこない。

（いないのかな）

もう一度部屋をノックする。それでも返事はないので仕方なく（また迷うハメになるのだが）ハンプティーの部屋から離れようとした。

ガシャーン！

「・・・！？」

突如、ハンプティーの部屋から何かが割れる音。

「ハンプティー！？いるの？どうしたの？」

いてもたってもいられず、返事を聴く前に部屋に転がり込んだ。中は薄暗く、正直不気味だ。

足を進めていくと、ベッド近くでガラスのコップが割れて机から床に落ちているのを目視した。

液体が床に染みていることから水でも飲んでいたのだろうと当たりをつける。

名を呼ぶが返事はない。

「やつ・・・!？」

不意に肩を掴まれる。そのまま押されアリスはベッドに倒れた。押し倒されているのか、誰かが上にいる。

「ハ、ハンプティー・・・？」

段々と闇に目が慣れていく。

赤い髪が見え、そのすぐ後、闇の中で光る黄の瞳と視線がぶつかり合う。

間違いなく、それはハンプティーだった。

「な、なに・・・？」

この組み敷かれる体制はまずい。
いくらアリスでもこれは羞恥に耐えられない。

「ハッ・・・まさか夜に、男の部屋に来て、何も無いと思ったわけじゃねえよな？アリス」

喋り口調が違う。

ほくそ笑むようにアリスを押し倒している人物。
顔はハンプティーだ。でも、違う。

このヒトは、誰？

19・漆黒の夜空と夜のヒト 後編

「漆黒の夜空と夜のヒト？」

ハンプティーとそっくりな外見をした男は、指先でアリスの首筋をなぞる。

ビクリとアリスはその動きに反応してしまう。

「いつ・・・や・・・!!」

じたばたと抵抗するアリスを男は押さえつける。
これが女と男の力の差だ。

アリスは身体でひしとそのことを実感し、少し悲しくなった。

「そっちが勝手に部屋に入ってきただろ。
何があっても文句は言えねえと思うがなあ？」

男は器用にもアリスの服のボタンを片手ではずす。

本気の本気で貞操がまずい。

アリスがそう思った瞬間、なぜか男がアリスから離れてくれた。
と、同時にハンプティーの部屋の扉が吹っ飛ばされて、
（誰が弁償するのだろうか）部屋の中に転がった。

「な、何っ？」

状況判断をする前に部屋に1つの影が入ってくる。
横目で男を見ると戦闘開始とも言つかのように槍を構えていた。

闇の中からしなやかな鞭がアリスにのびる。
そのまま鞭は腰に巻きつき、ぐいと引っ張られるのをアリスは感じた。

「無事ですかアリス！？犯されたりしてませんよね！！！？」

「お、犯され・・・そんなのされては無いけど・・・」

「ならいいですけど・・・アリスボタンなおして下さい。
正直目に毒です」

「あーご、ごめん。ほ、本当にこれ以外何もされてないからね」

その人物は時計兎だった。

鞭は時計兎の武器。攻撃する他に、
カウボーイの如く物を取り寄せられるとは。使い勝手の良い武器だ。

守るように時計兎はアリスを抱きしめる。
そして男を強く睨みつけた。

「乱暴だな、時計兎？後でドアを直しておいてくれよ」

「ええ、後で良ければいつでも直してあげますよ。
それより、アリスで遊ぶことは絶対に許さないという忠告、
前にもしましたよね？“ダンプティー”」

ダンプティー？

それは、それは一体。

「どういうことなの・・・？」

時計兎は今、確かに、この男をダンプティーと呼んだ。

ここは“ハンプティー”の部屋であったはずだ。

つまりは、双子なのか？けれど、ハンプティーは以前自分のことを“ハンプティー・ダンプティー”と名乗った。これはどういうことなのか。

「ああ、記憶無くしたんだっけ。お前」

ダンプティーの端麗な顔が近くにある。

いつの間に、こんなにアリスの近くまで来たのだろう。

手を伸ばせば届きそうなほど、ダンプティーは近づいていた。

「アリスに触れないで下さい」

ダンプティーとアリスの間に庇うように時計兎が立ちはだかる。

「残念」

ダンプティーは少しも残念がってない顔でこう言うと、アリスから離れた。

アリスは身震いした。

時計兎とダンプティーの殺気にも似たような気が肌を通して伝わってくるのだ。

「・・・っねえ、時計兎。この人、ハンプティーと同じ外見をしてるけど

ハンプティーじゃ無いわよね？何なの？」

アリスは場に立ち込める黒雲を振り払おうと躍起になる。

アリスの発言に対し、時計兎はかぶりを振る。
「どうやら、話を逸らすのには成功したようだ。」

「教えてやるよ、アリス。ハンプティ―・ダンプティ―ってのは姓と名じゃない。」

ま、簡単に言えばハンプティ―は二重人格なんだよ。

昼の理性がハンプティ―。夜の本能がこの俺ダンプティ―。

あまりにも性格が違いすぎて、二重人格つつうより

1つの体を2人の人間が共有してるみたいな感覚だな」

ハンプティ―は幼い頃から自分の感情を内に隠す子だった。

親の言い成り。嫌なことも嫌とさええず、期待に応えるために自由でさえ奪われた。まるで操り人形のように。

しかし、ある時、遂に我慢していた感情が爆発した。

翌日には元通りいい子ちゃんのハンプティ―に戻ったが、

夜になれば化けの皮が剥がれたかの様にダンプティ―という人格ができた。

ハンプティ―はダンプティ―であつた頃の記憶が何一つ無い。

例え、自分には夜になれば暴走する人格があると認知していても、だ。

殻・・・にこやかで心優しい自制心のかたまり。それが「殻のハンプティ―」

内・・・ハンプティ―の裏側の感情を持つ本能のかたまり。それが「内のダンプティ―」

「アリスはさ、こんな男と付き合っていけるか？」

「どういう意味ですか」

アリスの代わりに時計兎が問う。

「こんなところと性格が変わる奴に、記憶を無くした

“今のアリス”は仲良くできるかって聞いてんの」

グラリとアリスの心は揺らいた。

アリスはアリス。そう先程スピードにも言っただけだ。

だけど・・・昔と今が違うのも、また事実。

決心したはずなのにまた心が揺らめく。なんて、脆いのだろう。

「アリスは、ハンプティ―はまともだと思ってたかもしれないけど、
実質名前はイカれてるがイカレ帽子屋が一番まともだぜ。

こいつも、ハンプティ―・ダンプティ―も狂ってやがる」

「狂ってない！！！」

弾かれるように、アリスは言い返した。

小さくダンプティ―と時計兎が目を見開くのが見える。

「狂ってなんかいいわ！ハンプティ―ダンプティ―っていう人物は
ちょっと変人かもしれないけれど良いヒトよ！私はそう思う！」

少し、驚いた。

ハンプティ―とダンプティ―をアリスは今、同じ人間と見なした。
他の人間は個々とするのに、だ。二重人格なのも全てひっくるめて
ハンプティ―・ダンプティ―という1人の人間と見ている。

やはり、以前と何一つアリスは変わらない。

記憶を無くしたのも、少し痴呆があるのだと思えば良い（アリスに

とつては良くない)

「まあ、アレだ。ちょっと変人つーのは余計」

ダンプティーは苦笑する。

「じゃあ、これからどんなことがあったとしても、見捨てるなよ？
ハンプティー・ダンプティーを」

挑発するような口調。

アリスも便乗し

「望むところよ」

そう言い放った。

19・漆黒の夜空と夜のヒト 後編（後書き）

「時計兎君の嘆き」

皆さんこんにちは。これは私、時計兎の嘆きを語る場所です。

涼村 数少ない時計兎ファンにささげます！

今回の話・・・ダンプティー本当に邪魔ですよ。

結局私が助けに行った意味ないのではorz

涼村 まあまあ、時計兎が助けに行かなかったら、

アリス完璧に処女喪失してたし。

え！？そうだったんですか。意外です。

涼村 そうなんです。アリス生まれてこの方

男性と付き合ったこと無いから。初恋程度ならあるけどね。

モテるのに勿体無い。でもその方が有難いです。

涼村 じゃあ嘆き（というより対談？）は終了！

×に時計兎君から一言よろおね。

よろおねって・・・いつの時代ですか、本当に。

じゃあ×は「もしかしたらまた続くかも」です。

涼村 全然×れてないじゃん・・・

ぐだぐだなまま終了。

20・初出兵とアリスの溜息

「初出兵とアリスの溜息」

色々なことがあった。

ハートとの出会い。スピードとの会話。ハンプティーの秘密。

「んー」

気だるさを感じ、朝なのだろうが起きずにアリスはベッドで目を瞑る。^{つむ}

（ずっとこのまま眠っていたい）

しかし一度目を覚まし、意識が覚醒仕切っている状態で、二度寝はできなかった。
仕方なく重い^{まぶた}瞼を開ける。

「ひいっ！」

アリスは女性らしさの欠片も無い悲鳴を短く上げた。

「チエ・・シャ猫」

チエシャ猫が同じベッドに入り、くうくうとさぞ気持ち良さそうに寝息をたてていた。顔はとても幸せそうだ。
本当に、いつの間に入ってきたのだろう。

アリスは息を吸い込み、チエシャ猫の名前を呼びかけた。
しかし、全く持って起きないので体を激しく揺さぶる。
すると、当事者は大きく伸びをして起き上がる。

「ううん・・・うるさいなア・・・あー、アリス。おはよう」

「ええ、おはよう。・・・じゃっない！ななななんっで！
入ってきて・・・！？い、何時の間につ！！」

慌てるアリスを尻目に、チエシャ猫はニヤリと笑んだ。

「ええっと、アリスを起こしに来ただけどお
オレも眠くなっちゃってエ」

アリスは呆れて物も言えない。

「アリスの香りだア」と喜ぶチエシャ猫に対し、アリスは頭を抱え
たくなった。

偶然と言いたいのが、絶対故意でチエシャ猫はベッドに入ってきたに
違いない。

アリスは本日、何度吐いたかわからない溜息を吐き出した。

あれから数日。

今日が反響の国との戦争の始まり。
そしてアリスたちナイトメアの出兵日だ。

いつものお気に入りの服に着替えたアリスは、城門へと急ぐ。
そこにはもうナイトメアは集まっていて（チエシャ猫とアリスは除
く）

馬に乗れないアリスのために馬車があった。

馬車にスツと乗り込むと、アリスはゆっくりと深呼吸する。

「緊張する、わね」

「アリス、リラックスしろ。今日まで俺と修行したから殺られることは無いはずだ」

「戦場では絶対僕たちと離れないようにね、アリス？」

そうだ。アリスも何もしなかった訳ではない。

帽子屋と手合わせしたし、ハンプティーと何度も作戦確認したのだから、確信は無いが大丈夫だろう。

未だ、ドツドツと激しく飛び跳ねる心臓を落ち着ける。胸に触れ、押さえ込むように。

「じゃあ行きますよ？」

馬の手綱を持つ時計兎に肯定の返事を返すとゆっくりと動き出す。段々と早くなり、城が離れていく。

今、馬車と共に運命は動き出した。戦場へと向かって。

21・戦場光景と錫杖の音

「戦場光景と錫杖の音」

ギンギンツと刃がぶつかり合う音がし、幾重もの矢が飛び交う。上空から見れば、此処戦場は反響の国の方が優勢に見えるのだが、実は黄昏の国が小規模ながら圧制している。

「っ……!!」

眼を逸らし、震えるアリスの肩を帽子屋が抱く。

「目を逸らすな、アリス。いくら見たく無いようなものだとしても、目に焼き付ける。これが、戦場だ」

アリスは戦争というものを甘く見すぎた。

国のために戦う？そんな志こころここでは無意味だ。
生きるか死ぬか、生と死をかけた性質たちの悪い遊戯ゲーム。

切れば血が出る　　当たり前。
死ねば動かない　　当たり前。
当たり前のことのはずなのに、戦場では当たり前であってほしくない。

死にたくなければ、勝て。

これが戦場であり、アリスの生きていた場所なのだ。

「紅茶、飲むかい？」

アリスを気遣ったの言葉だろう。

しかし、ここでは少しでも何かを口にすれば吐いてしまいそうで堪らない。

「アリス・・・」

「へ、いき。行きましょ？味方の武官はナイトメアを待ってるわ」

倒れそうなのを堪え、ゆつくりと踏みしめる。

「アリスウ、オレはアリスから離れないよぉ？」

いつもは即断っているはずのチエシヤ猫の言葉が、
今では何だか温かい。

「うん。ありがとね」

人を殺めたくないという切実な願いから、トンファーを構える。

アリスはまだ自主的に戦うなんて出来やしない。

襲われたら、正当防衛として身を守る。

皆の傍にいて、戦いを見守るだけだ。

それでも、記憶を取り戻すキーワードになるかもしれない。

その様子を遠くから見つめる人物がいた。

「ふむ。これはまた・・・思わぬ獲物が引つ掛かったものだな。しかし、好戦的でない所を見ると・・・記憶喪失という噂は真であられたのか」

一風僧侶のようないでたちをした男はフウツと息を吐いた。

「・・・“式”で敵を翻弄せよとの命であつたが、已むを得ぬな」

スツと右手を上げる。

それを合図に、後ろに控えていた者達が男の前に跪く。

「兇手たち、捕まえに行くぞ。『黄昏の国のアリス』を」

その言葉で、兇手たちは四方八方へ散らばった。
男は錫杖をシャンと鳴らすと、兇手の後を追う。

「あれほど・・・戻って来られるかと告げたのだがな、アリス嬢」
シャンシャンという音が、静かに響き渡った。

どんどん人が倒れていく。

時計兎の鞭、ハンプティの槍、
チェシャ猫の（どこから補充しているのやら）大量なナイフ、帽子
屋の大剣・・・。

血飛沫があがる。アリスは思わず顔を顰めた。

「・・・これが」

死ぬ、ということなのだ。

「~~~~！！もう駄目駄目！！戦場に行くって言ったのは私なんだから！

いい加減慣れなきゃ」

人の死に慣れることは恐ろしい。が、せめて血には慣れた方がいいだろう。

アリスは血を見ただけで青くなる。

ハアとアリスはまたもや溜息を吐く。

が、その時。。

「あう・・・！」

アリスは体に急に異常を感じた。

何かに圧迫されるかのような感覚。

目の前に、一枚フィルターがなされているかのように、
耳も壁を通じて聞いているかのような感覚。

この身体は自分の物の筈なのに、自分の身体のようにではない感覚。

「う・・・あ・・・？」

何故だ。何故何故何故何故。
身体が勝手に動くのか。

足がどこかに行こうとしている。駄目駄目駄目だ。

ナイトメアから、皆から離れては危険なのに。
足が、言うことをきかない。

「ダメ」

何とか動く足を押しとどめようとする。

しかし、圧迫感が強くなり、アリスは意識を手放した。
ドサリと地に崩れ落ちる。

「……アリス!!?」「……」

皆の声が重なりあう。

以外にもアリスは直ぐにムクリと起き上がった。
しかし、安心したのもつかの間……

「大丈夫か!?!」

帽子屋が兵士^{ボーン}の攻撃を受け流しながら訊く。

けれど、アリスは何一つ言葉を発しないまま、フラッとどこかへ行こうとする。

「チエシヤ猫!!」

「わかってるよお!」

チエシヤ猫はアリスを追う。

どうして、アリスは急にこんな行動を起こしたのか。
それはだれにもわからない。

22・アリスの罪と天の罰（少々の流血表現あり）（前書き）

ほんのちよっぴりですが、流血表現があります。

苦手な方はお避けください m（―――） m

22・アリスの罪と天の罰（少々の流血表現あり）

「アリスの罪と天の罰」

来い。私の元へ。

アリスの頭に声が響く。これは誰だ？

こちらに歩め。さあ、早く。

頭が割れそうに痛い。一体、何だというのか。

「アリス！」

大きな声で名を呼ばれ、朦朧としていた意識が覚醒した。
先程アリスを襲っていた圧迫感は今ではすっかり無くなっている。

「え・・・あ？チエシヤ猫？」

「もー、チエシヤ猫？じゃないよオ。どうしたのオ？」

アリスは言葉に詰まる。

どうした、と言われても答えようがない。

「何でもないならいいけどお、心配だったんだア」

チエシヤ猫は困り果てたアリスを見て、深く追求しようとはしない。
そこが少し有難くて嬉しかった。

「うん、ごめん。所で、ここは？」

どうやらここは森の中。

日が当たらないせいで何とも言えない不気味さを放っている。

「ああ。アリスを追ってたらねえ、アリスがここで立ち止まったからあ。」

戦場からはそこまで離れてないよあ？」

戻ろつか、と言われアリスもそれに従った。

だがしかし、チェシャ猫がアリスの手をとった瞬間……

「うあつ！」

チェシャ猫に電撃のようなものがはしり、そのまま痺れ倒れた。

「なっ……！チェシャ猫！！大丈夫？どうしたの？」

軽く揺するが起きる様子は無い。

それもそのはずだ。電撃のせいで体中が麻痺しているのだから。突如、刃が空を切る音が聞こえた。

ガキインツ！！！！

「くっ！」

アリスがトンファーで何とか刃を受け止める。

が、思った以上にその攻撃は重く、片手で受け止めたせいか腕が小さく痺れた。

「へえ、さすがだな。『黄昏の国のアリス』さんよあ」

どこからか下婢^{げひ}た笑い声が聞こえる。
一人ではなく、複数の。

「悪いが、あんたを反響の国に連れさせてもらっぜ」

一瞬にして、囲まれた。

ざっと人数は10人弱。しかも中々の手練だ。

「行くぜ」

舐めきっているのか、聞こえよがしにそうリーダー格の男が言う。
それを合図に、兇手たちが四方八方から襲いくる。

トンファーを構えなおし、何とか攻撃から身を守る。

甲高い金属同士がこすれあう音。
見事な攻防戦だ。

「ん・・くっ!!」

敵の剣にトンファーが弾かれる。
そして後方へ飛んでしまった。

「おいつ捕らえろ！」

兇手が一気に間合いを詰めてきた。
チエシャ猫は眠ったままで、起きる気配はない。
頼れるのは、自分のみ。

「チツ!まだ武器を持ってやがる。気をつけろ!
四肢が無事なら多少傷つけても構わねえ!」

チャツと腰にぶら下げていたダガーを手で握り締める。
できる限りなら、使いたくなかった武器だ。

ざあつと脳裏に何かが横切る。

甦っていく、昔の映像。

敵が、今いるはずのない敵が阿修羅のごとくアリスに向かう。
その思い出と、今の兇手が見事なまでに被る。

怖い、とアリスは直感的に感じた。

目の前にいる兇手は剣をアリスにむけて振り下ろす。

アリスは何かを考えるより前にダガーで剣を弾いていた。
その隙に、相手の首を掻つ切った。

「ひっ」

一瞬の出来事。

相手の頭が右へころりと落ちて、首から
勢い良く溢れる血がアリスの全身にかかる。

ナイトメアティーパーティー

悪夢のお茶会と名づけられた理由。

この5人が揃うと、辺り一面が悪夢のような地獄絵図となると
いう。

それは迷信や、噂などではない真実。ほんとう

真つ赤な、真つ赤な真つ赤な血に濡れたユメ。
それが、悪夢。ナイトメア

「このアマ……よくも……」

前後両方から剣を振り切られる。

しかし、アリスはすぐに右に跳び、その2人の首を切る。首を切れば勝つ。いとも簡単に。

（これが、私なのね）

多くの人の命を救い、多くの人の命を奪った。

これが、『黄昏の国のアリス』なのだ。

・・・アリスは全身で息をする。

その場にはアリスと倒れているチェシヤ猫以外に誰もいない。

つまりは、そのか細い手で皆殺しにしてしまったのだ。

記憶を無くす前のアリスがしてきたこと。

けれど、こんなことしたく無い。戦上での記憶なんて甦ってほしく無かった。

どうせならば、もっと楽しい記憶が欲しい。そう考えるのは贅沢か？

不意に、ポツポツと空から雫が滴る。したた

しだいに絶え間なく雨が降り始めた。

まるで、天罰のようだとアリスは自嘲する。

この、返り血を流してくれないだろうか。

この身にこびり付いた人の血を。

人を殺した罪を洗い流してくれないだろうか？

そんなアリスを責めるかのように、雨は鋭く降り続けた。

おまけ3 ハンプティ―（ダンプティ―）に50の質問

（おまけ・ハンプティ―（ダンプティ―）に50の質問）

01 お名前をどうぞ！！

ハンプティ―だよ。

（ダンプティ―だ）

02 性別は？

男。

03 誕生日！

僕らの世界には誕生日という概念が無いんだ。

（そーゆーことだ。一応秋生まれではあるけど）

04 身体的特徴（身長とか顔立ちとか色々）

目の色は黒味のある黄色で赤毛だよ。

（んで、右目には傷跡があるぞ）

05 動物に例えると？

うーん・・・どうだろう。ダンプティ―、どう思う？

（ああ？お前は結構腹黒な感じだしイタチじゃねえ？俺は・・・）
じゃあダンプティ―は狐だ。イタチと狐で化け勝負、ってね。

06 特技は？

掃除かな。アリスの家の掃除してたくらいだしね。

（ハンプティ―と俺は同体だから、好きじゃねえけど
俺も掃除が得意なんだよなあ）

07 ご趣味は？

散歩かな。早朝と日暮れの散歩は綺麗なんだよ。

（へえ。俺は女を口説くこと。アリス以外の女には良い顔してんだぜ？）

僕の体でそんなことしないでほしいな・・・

08 将来の夢など

今もう夢は叶ってるからね。武官になることっていう夢が。

（夢か・・・ハンプティと別な体にして欲しいってこと。夢って
いうより願望）

09 好きな言葉とかある？

「努力すれば報いられる」かな？「求める者は与えられる」とか類
だね。

（ふうん。俺は「酒地肉林」？）

・・・もつとましな答え、無かったのかい？

10 好きな動物は？

以前は猫が好きだったんだけど、チェシヤ猫を見てたらねえ・・・

（そりゃもう犬だろ。生意気な犬ほど調教のしがいが・・・）

ダンプティ、一応健全な小説なんだからやめてあげてくれる？

11 好きな色

緑色かな。目に優しいし。

（赤。炎の色だし赤が好きだ）

12 好きな料理

そりゃ卵料理かな。中でも料理人の腕の良さのわかるシンプルな卵
焼きとかね！

（へえ庶民的。俺も卵料理は好きだがやっぱ肉だろ）

13 好きな異性のタイプ

えっ・・・好きな異性かぁ。母性の強い人が好きだね。

（周りくどい言い方せずにアリスが好きだって言えばどうだ？

俺は勝気か、強気な女が好物だ）

14 好きな同性のタイプ

そうだねー、ムードメーカーな人とか好感もてるなあ。

（俺、あんまそういうの考えたことねえな）

15 座右の銘は？

好きな言葉と同じかな。努力あるのみだね。

（「鳴かぬなら殺してしまえ^{ほしく殺す}不如帰か？」

何だいソレ。

（あの緑（クローバー）の故郷誇称の国の偉人の言葉だと）

16 暇なときなにしてる？

掃除かな。汚いところとか見ると掃除したくなる。

（俺はメイドとか口説いたり、酒場行ったり、賭け札したり）

17 旅行とか好き？

好きだよ。世界の絶景とか見て回りたいな。

（はぁマジで？めんどくせー）

18 癒されることって何？

・・・好きな人が笑顔でいてくれる時とかね。

（癒しとかないな）

19 一緒にいて落ち着く人はいる？

・・・アリス。

（あいつは無駄にパワフルでうざってえ。こっちがソワソワさせられる）

20 ぶっちゃけその人は恋人です！？
まだ違うよ。

（オイ待て “まだ” ってなんだ。いずれモノにするつもりかお前）

21 コンプレックスとかあったりなんかしちゃったりする？
やっぱり二重人格な所。

（俺はお前のつけてくれやがった傷跡だ。せつかく女を落としやすい綺麗な顔してたっていうのによ）

22 それを解消するために何か努力はしてる？
無理じゃないかな。解消できるようなものではないよ。

（傷跡消せてか・・・無理な話だ）

23 じゃあ逆に自慢できることは？
うーん・・・髪質が良いってところ。

（ああ、アリスに褒められてたな。自分よりサラサラしてるって）

24 人生で一番嬉しかったことは何？
二重人格だとわかってても、アリスが傍にいてくれたことだよ。

（昔のことか。「一生離れたりしないから」ってアリスは言ってたけど

今から思うと結構ハズいこと言ってんなー。逆プロポーズじゃね？）

25 人生で一番驚いたことは？
兵士に奇襲かけられて塀から落ちたことだね。

（特に無し。あえて言うならアリスが記憶喪失になったことか）

26 人生で一番楽しかったこと

アリスと朝焼け時の散歩をしたこと。すごく楽しかったよ。

（女と寝る心地よさを覚えたことだ。って、言わない方がいいか？）
当たり前。健全な話だって言ってるじゃないか、ダンプティー・・・

27 人生で一番怖かったこと

母親が狂ったとき。あれは怖いとかそういうものじゃないくらい。

（ああ、丁度俺という人格が出始めた頃か。あれは狂気の沙汰だったな）

28 人生で一番辛かったこと

親に勉強と武術を無理に叩き込まれたとき。頼れる人がいなくて辛かった。

（特にねえな）

29 外向的？内向的？

微妙だね・・・

（お前は初対面の奴には警戒解いたりしねえから内向的じゃないか？
俺は男を除く女には外向的だな）

30 道に1000万（日本円で）が落ちてました。どうします？
とりあえず届出を出すね。落とした人が可哀想だ。

（バァカ！この真面目！！普通は遊女屋に行ってハーレムだろ！）

31 じゃあ、1000万円もらいました。どう使う？

国に寄付。貢献するよ。僕が金を持っても仕方ないし。

（本当に真面目ちゃんだなお前は）

32 子犬が捨てられていた！！愛らしい声で鳴いています。どう
でる？

拾ってあげたいけど無理だね。拾ってくれそうな人を探してあげる
しか・・・

（無視だ無視。自立して野生的に生きのびろ）

33 突然頼みごとをされました！ あなたならどうする？
できる範囲ならちゃんとするよ。

（等価交換ギブアンドテイク。報酬を貰わないとしない）

34 とても仲のいい友達と喧嘩しちゃったよ！どうしよう！？
自分に非があれば謝るけど、無い場合は謝らない。

（こつ見えてお前って結構頑固だな・・・）

35 嘘はつけるタイプ？
つけるよ。できる限りつきたくないけどね。

（嘘はつけないが猫は被れる）

36 もしかしてその嘘はついててもすぐバレちゃったりしない？
そうでもないけど、アリスにはバレるよ。どうしてだろう？

（このバカップル！お前ら本当は恋人同士じゃねえのか？）

おまけ1の同じ質問（36番目）を見ればどういう意味かわか
ります。

37 何か癖ある？

手で傷跡に触れる癖ならあるよ。

（やたらと髪が気になって触ってしまうんだよな。切るか結ぶかし
ようぜ？）

38 誰かに何か言いたいことたまっていない？

あるよ。

（無い）

39 あるって答えたそのあなた！　じゃあこの穴に向かって
思う存分叫んでください！！！！

じゃあおもむろに・・・

帽子屋は実はむつつりだよ！！アリス気をつけて！！！！

（そうなのか。まあがつつりタイプじゃ無さそうだしな）

40 ……酸素マスクいる？

酸素マスクじゃなくて水が欲しいな。

（喉からからってか）

41 あなたにとって一番大事なものは？

もう一人の自分であるダンプティー。

（悪いんだが俺別に男に興味はないから）

誰も別にダンプティーに対して恋愛感情抱いてるなんていってない
から。

42 自分といたらコレ！　みたいなのある？

右目の傷と赤毛かな。

（あと二重人格）

43 崇拜してる人とかいる？

尊敬はあるけど、崇拜はいないかな。

（俺は尊敬している奴自体いねえ）

44 どうしよう！　財布を掏られた！！

あらら。

（余裕だな。まあ掏^すった奴は間も無くハートに処刑されると思うぜ

？)

45 コレだけは誰にも負けないものってある？
槍をつかった戦闘。

(女を口説き落とす業^{わざ})

46 こいつには敵わないっていう人いる？

アリスには弱いね、僕は。

(弱いつていうか甘いじゃね？ちなみに俺は時計兎は苦手。執念深いし)

47 全部答えてきたね？じゃあこのノリで普段なら言えないような秘密トークをお願いします！！

特に秘密なんてない。あ！でもこの傷ができた当初、アリスが「ハンプティードンプティーが塀から落ちた」とかいう縁起でもない歌歌ってたよ。

(あいつの親歌手だったから歌詞除けば歌は上手かったな)

48 ぶつちやけ作品内での自分の立場ってどうよ？

影が薄くなったり濃くなったり・・・

やっぱり優しいお兄さんキャラは目立たないのかな。

(かもな。でも最近は帽子屋が一番影薄いと思う)

49 ここぞとばかりに生みの親になんでも言っちゃえ！

僕とアリスの幼い頃の馴れ初め話か何か書いてくれると嬉しいな。っていうか書いてね？

(おい、お前一瞬だけ黒いオーラがでてたぞ)

50 ここまで読んでくれた方に何か。
お疲れさま。読んでくれてありがとう。

(ここまで読む何て相当暇人だろ)

ダンプティー失礼だよ、素直になれば？こう見えてダンプティーは結構ツンデレなんだ。見捨てないであげてね。

オリキャラに50の質問

「Water Future」 <http://waterfuture.finito-web.com/orichara50.html>

23・雨の音声と僧侶の表情

「雨の音声ノイズと僧侶の表情かお」

バシヤツ。

雨と血で濡れた地面を、誰かが踏む音が聞こえた。段々とその足音がアリスへ近づく。

それと、同時にシャンシャンという鈴のような鉄同土が軽くぶつかるような

場に不釣り合いな澄んだ音も聞こえる。

不意に足音と澄んだ音が止まった。

頂垂れているアリスでさえもその人物が近くまで来たことを悟る。

「ふう・・・兇手達もあまり強くなかったものだ。

ま、足止め程度にはなったやもしれんな」

低い男の声。それはアリスの知っている誰の声でもない。

アリスは閉じていた目をゆっくりと開いた。

そこに居たのはクローバーと同じ、誇称の国の服を纏った男だ。

髪はスキンヘッドに剃られている。恐らく僧侶と呼ばれる者だろう。

クローバーから借りた“誇称国書記”という本に

「邪な心を髪と共に落とす」と記してあった気がする。

“人を殺した”という闇に支配された脳内ではんやりと客観的にアリスはそんなことを考えていた。

「久しいな、アリス嬢」

久しい。ということは、かつてアリスはこの男と会ったことがあるのだろうか。

そんなアリスの様子を察したように男は口を開く。

「ああ、そういえば記憶が無いのであられたか」

僧侶の持つ金色の錫杖が、男が動くたびシャンと音をたてた。

「……だ……れ……?」

途切れ途切れに虚ろな瞳でアリスは男に訊く。

「……反響の国の王の補佐。ビショップ、だ」

つまり、ダイヤと同じ立場ということだ。

クローバーのような反響の国の王の近衛のナイト。

女王の近衛のルーク。

そして一般兵をまとめて兵士^{ボーン}。

ビショップはスツとアリスの髪に手を伸ばす。

傲慢とも言えるアリスの金髪は、血で赤く紅く染め上げられていた。

「哀れなものよ」

触れるか触れないかの寸前の所でビショップは手を引っ込める。

ザアアア

と静かに音をたてる雨の音声^{ノイズ}。

未だ冷たく突き放すように雨は降り続けている。

ビショップも濡れることを構わず、唯^{ただ}アリスの頬に擦り付いた返り血を拭うように触る。

まるで繊細なガラスの玩具を扱うように。

敵とは思えぬほど優しく残酷に、親指で血を拭ってやる。

「アリス嬢……」

アリスに目線を合わせるためにしゃがんでいたが、ビショップは立ち上がる。

ドスツと音をたて、錫状をぬかるんだ地面に突き刺す。

そして、自身の両手を合掌するように合わせると

祈るようにブツブツと何かを唱え始めた。

なぜか急な眠気がアリスを襲う。

「っ……眠……い……」

起きようと必死にアリスは瞼を開ける。

が、しかし段々と重くなる瞼には逆らえない。

そのまま床に突っ伏した。

最後にアリスが視^みたモノは、
どんな感情を宿しているのかわからない複雑な表情をしたビショップの顔だった。

24・式術と反響の国の官位

く式術と反響の国の官位しきじゆくわいく

（っ……いくら待っても、チエシャ猫とアリスが帰ってこない）

帽子屋は不審に思う。

戦闘で手が離せなかったとはいえ、早まった事をしたものだ。

雨の中を2人を捜していると見つかった。

だが、そこにはアリスの姿は無く、チエシャ猫が倒れているだけ。

周囲は血の海、という言葉が似合っている悲惨な状態だった。

敵の切り傷からして、アリスのダガーで斬られたものだと言測できる。

おまけにアリスのダガーとトンファーは血まみれになって落ちていた。

『アリスは一体どこへ行った？』

俺はアリスも心配だったが、チエシャ猫の容態も気になり、一度城へ帰る事にした。

しかし、それにしてもどうりで可笑しいと思ったのだ。

争っていた兵士ボーン達が、指揮をとっていたナイトが

「見つかった」と言えば、あっさりと引き下がった。

あの時は何という意味かさっぱり解せなかったが、今じゃハッキリとわかる。

反響の国へ連れ去られたか。

最悪だ。

自分に対する自己嫌悪で胸が一杯になる。

心の中は苛立ちや焦燥感で覆い尽くされている。

ほぼ、八つ当たり気味に壁を強く叩く。

いてもたってもいられない。チェシャ猫が起きるまで待つなど無理だ。

どうして他の奴等はあるそこまで落ち付いていられるのだ。普段は一番冷静にいるはずの自分が、一人の女の所為でここまで乱れるなんてな。自分ですら子供臭いと思う。

そもそもアリスを戦場に連れていこうと言ったのは俺だ。スピードに任せればよかった。

“守る”と言ったのに守れていないじゃないか。

・・・本当に俺は最低だ。

不意に医療室の扉が開く。

「あ、帽子屋さん。チェシャ猫さんが意識を取り戻しました。

ナイトメアさん達や、ダイヤさん、クローバーさん、

国王陛下を連れてきていただきますか？」

医者がおずおずと言う。

迷う暇無く、俺は直ぐに皆を呼びに行った。

・・・すっかり日は落ちている。

通り雨はもう止んでいて、雲も無い。
月の光が医療室を明るく照らしていた。

「それで、チエシャ猫。一体何があつたんです？」

丁重だが、どこか荒々しく時計兎が問い質した。

「わからない」

と、チエシャ猫は、普段からは予想がつかない口調で言葉を紡ぐ。

「アリスを追いかけていたんだ。それでアリスと一緒に皆のところへ帰ろうとしたら・・・オレの身体に電気のようなものはしつた。気がついたら、意識を失ってたのか、ここで目が覚めた」

「敵の姿は見たん？」

ダイヤの質問に、チエシャ猫は小さく頭を振る。

「魔法だとしても、詠唱も聞いてねえのか」

ダンプティーに対し、ゆつくりと頷く。

「じゃあ、おかしいな。魔法は相手の近くで詠唱しなければ距離的に届かないはずだ」

帽子屋も言うが、チエシャ猫の表情は曇つたままだ。
一同、考え込む。

「・・・まさ、か・・・」

クローバーが突然、しぼりだすような声で呟いた。
目を見開き、思いつめたような表情を見せる。

「ス、スピード。断定は・・・できぬ、が・・・その方法がわかった。

おそらく・・・アリスを浚った本人も」

一気に視線がクローバーに集まる。
クローバーは伏目がちに口を開く。

「チェシャ猫を倒した方法は“式術”と呼ばれるものだろう・・・」
式術？と問い返すとクローバーは「ああ」と言う。

「通称は式・・・唯の魔法では詠唱が聞えぬほど離れれば、
まじな呪いをと覚えても遠すぎて標的に当たらぬ。

しかしながら、式はいくら離れても・・・例え千里離れたとしても、当たる」

そうして、式術の説明が続いた。

式は紙に呪字という特別な文字を書く。そして、術主が呪いを唱えると

書かれた呪字がそれに反応し、発動する。というものだ。
術主の力が強ければ強いほど、発動距離も長く延びる。

「アリスが戦闘中にふらつとどこかへ行つたというのも
“傀儡”の式が発動しておつたのだろうな。

チェシャ猫にはしつた電撃とやらも“麻痺”の式が発動したのだ

と・・・」

ならば、アリスがあんな行動をし、チエシヤ猫が倒れたのも肯ける。いつ発動するのか、その呪字が書かれた紙がどこにあるのか？
わからないのであれば避けようもない。

「でも、式術なんて聞いたことも無いですね。
反響の国で独自に発展した術とかですか？」

「それにしたって、どうしてクローバーは式というものについて
詳しく知っているんだい？」

時計兎とスピードに訊ねられ、クローバーはそつと視線をそらすし、
窓を開けた。

雨上がりの爽やかな空気が医療室に入り込む。
夜空には、月と満天の星が輝いていた。

「式は反響の国では無く、“誇称の国”で発展した術・・・
アリスを浚った犯人は、反響の国在住で、式が得意で、誇称の国
出身の者。

該当者は・・・彼奴きやつしかおらぬ」

反響の国の高位。

国王であるキング。皇女であるクイーン。
兵士指揮官兼、キングの近衛であるナイト。
門番であり、皇女の近衛であるルーク。
そして、クローバーと同じ様な誇称の国特有の着物を纏った王の補
佐ビショップ。

「ビショップ・・・？」

そいつが恐らく、アリスを浚った。

25・反響の国の王と専属メイド

「反響の国の王と専属メイド」

アリスは微睡まどろみの中にいた。

「（ベッドの匂いも、感覚も違う・・・？）ん・・・」

浅い眠りの中でそう思う。

アリスが今まで寝ていたベッドは、とてもフカフカで包み込まれるかのようなだった。

けれど・・・このベッドは、フカフカだが沈み込んでいくような感覚。一度沈めばもう、2度と戻ってこれないようで・・・。

そこでパチッとアリスの目が覚める。

「っ・・・！ここどこ？」

最近、こんなことが多い気がする。いつの間にか知らない土地にすることが。

ベッドの周りをレースのカーテンが囲っていて、いわゆるお姫様ベッドというやつだ。部屋は正直、とても豪華絢爛。

「と、いうよりこの格好は一体・・・」

アリスは白いワンピースのようなネグリジェのような着を身に纏っていた。

「アリスさま」

不意に声をかけられて驚く。

アリスが振り向くとそこには1人のメイドがいた。

髪を後ろで一つに束ねていて、金髪碧眼。

外見から判断するに、アリスより少し幼く16歳程度だろう。

「えっと・・・？」

「あ、リデルと申します。リデルはとても心配しました。

アリスさまが一生起きないかと思いました」

心底心配そうにアリスを見つめるリデルという少女は
一体何者なのだろう。そんなことを考えているアリスを尻目に、
リデルはてきばきと説明し始めた。

「リデルはアリスさま専属のメイドです。御用がありましたらすぐにお呼び出しくださいませ。これからよろしくお願いいたします」

ペコツと一礼され、つられてアリスもお辞儀し返した。

思わず「ここどこですか」と聞くのを忘れたまま。

「アリスさまは汚れていましたのでお風呂に入れさせてもらいました。
下着と服はこちらで用意したものです。

ここはアリスさま専用のお部屋になりますわ」

すっかり、なぜ専用のメイドや専用の部屋が用意されているのか

という疑問はアリスの頭からは吹き飛んでいた。

「私の着ていた服はどこへ？」

「洗わせていただきました。・・・ですが」

そう悲しそうにリデルは目を伏せる。

長い睫毛で頬に影ができていた。

「どうしても血が落ちなくて」

ドクン。

と、アリスの心臓が跳ねる。

全身の血が逆流していくかのようなのである。

血・・・血・・・兇手たちの返り血。

アリスは人を殺したのだ。

その手で、相手の首を刎ねた。

武官として当たり前の行為かもしれない。

しかし「アリスが武官だから」「これは戦争だから」

そんな理由で人の命の重さが軽くなるわけではない。

戦争では虫けらのように人は簡単に死ぬ。本当に、あっさりと。首と心臓を狙えば即死だ。

「アリスさま？どうかいたしましたか」

蒼白になっていたためか、リデルから心配そうな声があがる。

アリスは引きつりながらも無理に笑顔をつくった。

コンコン。

突如、ノックの音が辺りへ響く。

「入って良いだろうか？」

アリスはリデルの顔と扉を交互に見、どうぞと返事をした。
低い男の声だった。

「では失礼」

ギイイと音をたてて、開いたドアの先には予想通り男の姿だ。

「こつ 皇帝陛下！ー！よ、良くいらっしやいました」

リデルがふかぶかと頭を下げた。

（皇帝陛下って！キングさんのこと！？と、いうことは・・・）

目の前にいる男が、アリスに求婚した“あの”反響の国の王なのだ。

「リデル、下がっていてくれ」

リデルははい。と返事をする。と部屋から出ていった。
妙な空気が広がる。

「アリス」

今まで聞いた事の無い声で名を呼ばれ、アリスはすこしどきりとする。

キングはアリスに向き直ると視線を合わせた。

「・・・記憶喪失になったと聞いた。それは真実なのか？」

キングは物静かにただ、それだけを聞いた。
アリスは困惑しつつも肯定する。

「そう、か。もう俺のことも忘れているのだろう」

「はい・・・あ！でも誰だかは知ってますよ。キングさん、ですよ
ね？」

刹那、キングは驚きに駆られたかのような表情かおをしたが
すぐに真剣な顔をし、アリスを見つめる。

「なら話しは早いな。アリス、単刀直入に言う。

結婚しよう」

そのとき、アリスは頭の中が真っ白になるかのような錯覚を覚えた。

25・反響の国の王と専属メイド（後書き）

登場人物紹介

キング（21歳）

瞳：碧色　髪：銀色

武器：全身（つまり魔法）

特技・・・賭け事

趣味・・・読書

備考・・・結婚したい男NO・1の座に輝く。

反響の国の皇帝。

姉が一人おり、両親は故人。スピードと環境は似ている。

昔は今と違い冷血で非道、敗者切り捨てな性格だった。

21歳にして“反響の国最上治の皇帝”と呼ばれる。

アリスが大切にそれ以外の女は眼中外。

26・女王の決意と王の決断 前編

「女王の決意と王の決断1」

ビショップ、いや反響の国にアリスを攫われて少し経った頃。
スペードはただ1人、書斎に籠っていた。

ダイヤとクローバーは今はいない。

クローバーは書斎外で、スペードを守っている。

ダイヤは宣戦をされたため、文官として世話しなく働いているからだ。

スペードは夕闇に包まれた部屋のなかで、目の前のコップを手にとった。

中の水を飲み干すと、何か決めたように立ち上がる。

そうしてスペードは自身のマントを脱ぎ、胸元で隠されるように
なっている鎖を外す。
チェーン

鎖には金色の鍵がかけられていた。

金の鍵で机の上にある小ぶりだが宝石で彩られた宝箱を開けると、
中からスペードの瞳の色と同じ、紅い宝石で飾られた指輪を取り出す。

「“彼”を呼ばなければ、いけない・・・な」

ポツリと呟くと、その指輪は華奢な指にはめた。
と、その時

「兄さまっ！戦争ってどういうこと！？全く訳がわからない！」

派手な音をたててハートが入ってきた。

すると、ハートはスペードの中指にはまっている指輪を見て瞠目する。

「それ！その指輪！！もしかして、“彼”を呼ぶの？」

「ああ・・・」

そう短くスペードが肯定の返事をする、ますますハートはまくし立てた。

「やめてよ！兄さま。たかたが一武官のために王家直属の「仕方ないじゃないか！」

普段穏やかな兄のその声に驚き、ハートは押し黙る。

スペードはシャツとカーテンを開け、窓から外を眺めた。

「仕方ないじゃないか・・・好きになってしまったものは、変えられないんだ・・・」

「っ！どうして！？どうしてみんなアリスアリスって！

初めて好きになった人・・・！ハンプティーだって目線の先にはいつもアリス！

なんでみんな！どうしてなの！？」

目に涙をため、それでも泣かまいとハートはこらえていた。

愛されたい。

人がそう思うのは当たり前だ。それが好きな人からなら尚更。事実、スピードがそう思っているように。

今にも泣き出しそうなハートの頭をそつと撫で、スピードはゆっくりと口を開いた。

「ね、ハート。ハートは小さい頃から父上と母上の愛情を受けて育ってきただろう？・・・でも、アリスはそれらの愛情を受けなかった。

いや、受けなかったんだよ」

「・・・、どういうこと？」

その言葉に、静かにスピードは過去を語り始めた。
アリスの幼いころの話を。

「あれは、僕も小さい時だったからハッキリとは覚えてないけれどね・・・」

・・・アリスの母は白薔薇の国1の歌姫と謳われた美女、ロリーナ。アリスの父は紅薔薇の国1の軍神と呼ばれた男、イーデイス。白薔薇の国と紅薔薇の国は敵国同士だった。それでも2人は結ばれた。国なんて関係無い、と。

しかし、2人とも自国から「反逆者」「非国民」と非難され、迫害され、亡国した。追っ手に追われながらも。そこでもうすでにアリスという子を宿していた夫婦は、黄昏の国へ逃げてきた。

黄昏の国は他国人や多種族で成り立つ国である。
誇称の国出身のクローバーや、獣人の時計兎やチェシャ猫がいい例だ。

そして黄昏の国へ来て、スペードとハートの父、前代国王に謁見した。

夫妻は自分の子をこの国へ滞在させてくれと頼んだ。
前代国王は「子だけでなく君らもいるといい」と言っただけで、追っ手が来て、子はおるか、この国にまで迷惑がかかるというて2人の愛おしい子、アリスの平穩を祈り泣く泣く思いで国を出て行った。

「ハートだって知っているはずだ・・・
頭を優しく撫でてくれる父上の大きな手や、僕らを抱きしめてくれる母上の暖かな腕」

ハートはなぜか泣きそうな顔をしてスペードを見た。
スペードは気付かないフリをして言葉を繋げる。

「でも、アリスはそれを・・・親の愛情を知らずに生きてきた。
僕はね、一度だけアリスからこんな話を聞いた」

『親なんてものは知らなかったし、必要もないわ。
だって・・・今までずっと無かったし与えられなかった存在だから・・・』

だけど、村でハンプティや他の子たちが親と一緒に手をつないで歩いているのを見るのがなぜかつらかった。目を剝らして、見ないようにしてたの。

心の中ではやっぱり寂しかったり羨ましかったりしたんだなあっ

て実感したわ。

・・・だから私“親”になるわ。皆を隔てなく抱擁できる親みたいな存在に。

私みたいな孤児の子に愛情を与えられるような人間になりたいの』

そう言っアリスは笑った。

だからアリスはいつでも笑って、いつでも人に愛される。

あの温かい心に触れるたび、いつしか自分も温かくなれる。

「アリスは父のように皆を守りたいからと言って武官になった。それに元々軍神イーデイスの娘だったから素質もあったしね。だから“母”のように優しく、“父”のように強く・・・」

そこまで言っアリスは言葉を切った。

目を伏せて、まるでアリスという存在をかみ締めるかのように。

27・女王の決意と王の決断 中編

「女王の決意と王の決断2」

「・・・アリスは鏡だ」

そう言つてスピードは目を伏せた。

「理想の母親像と父親像を映すだけ。鏡の裏側はとても脆い。アリスも、そうだ。ハートよりも脆いかもしれない」

アリスは、人の死に直面すると「落ち込んでも前には進めないわ」と言う。

けれど誰も居ないところでは泣いていた。泣いて泣いて泣いた。戦場でも同じように。無力な自分を嘆いて、深い悲しみに覆われている。

「まさか・・・アリスに限ってそんなこと」

「あるよ」

ハートの声が震えている。

今まで堪えていたはずの涙がポロポロとこぼれ落ちた。

「はじめ・・・なさっ・・・アリス」

その時、生まれて初めてハートは“他人^{ひと}のため”に泣いた。

「僕は、そんなアリスを好きになった。

ただ、強くて優しいだけのアリスだったら、僕がアリスを好きになる可能性は無いよ・・・守りたいと思った愛護心が何時の間にか

愛情に変わっていたんだ」

ゴシゴシとハートは赤くなった目を擦る。

それを見て、スペードは決心したようにハートに向き直った。今のハートにならこの国を任せられる。そう判断して。

「ハート、君にも王家に伝わる宝を託すよ。

僕が反響の国へ行っている間、王の代理をするために」

ハートがこくりとうなずく。

それを目で確認すると、スペードは棚の奥から大きめの宝箱をだした。

「母上から、いつも肌身離さず持つ様にと言われた鍵を持ってるだろう？」

出してくれ」

ハートはスペードと同じように鎖チェーンで繋がれた鍵を取り出した。

スペードとは対照的に銀色の鍵をスペードに手渡す。

ガチャリ、と重々しい音がして宝箱が開いた。

「これ・・・は・・・？」

中には、様々な宝石で装飾された棒の上に、真紅でハートの形をした宝石がついたステッキが入っていた。

「王代理を勤める女性だけが持つことを許される杖。これがあれば、王代理、すなわち他国との交渉や自国の武官文官の整理をする権利を持てる。ハートに託すよ、これを」

重みのあるステッキを持つ。

ハートはそのステッキを持った時点で、仮でも王だ。

「でも、やっぱり平気かい？」

その問いにハートはフフンと不敵に笑む。

「あたしをだれだと思ってるの？」

ハートはこうみえて頭が良い。

ダイヤに匹敵するほど。

「脳ある鷹は爪を隠す」というが、正にハートのためにあるような言葉だ。

「そうかい・・・じゃあ、頼むよ」

スパードはスツと指輪に触れ、窓近くに移動する。

窓を開け、身を乗り出す。

金色の髪が、闇夜のせいだろうか、黒く見える。

「あ、兄さま。アリスに一言伝言お願いっ」

ハートは深く息を吸い込み、年相応の笑顔で言う。

「帰ってきたら、一緒にお茶しない？って伝えて！」

その言葉を耳にしたスピードは、口の端を僅かに吊り上げて窓から飛び降りた。

27・女王の決意と王の決断 中編（後書き）

今更な気もしますが、ビショップの紹介です。
（ただ単に忘れていただけでしょうb y時計兎）

登場人物紹介

ビショップ（20歳）

瞳：黒色 髪：ハゲだが黒色

武器：錫杖&式術

特技・・・観察すること

趣味・・・植物を育てること

備考・・・髪型が髪型なのでわかりづらいが

実は誰よりも男前。

反響の国の王の補佐（ダイヤと同じ）

クローバーとは何か因縁がある。

純和風な人物で、法衣をきている。

広い視野で周りを見渡せる知識人。

28・女王の決意と王の決断 後編

「女王の決意と王の決断？」

城の最上階から飛び降りたが、スペードが死ぬことは無いだろうとハートは思う。

（・・・“彼”も付いているしね）

と、その時突然「入るで！」という声がしたかと思えば、ダイヤとクローバーが室内に入ってきた。

「スペード！ナイトメアを反響の国に！・・・ってあれ？」

今日一日駆けずり回っていたダイヤは肩を上下させている。息を落ち着かせてから問う。「スペードはどこや？」

ハートはというと窓に手をかけボソリと小さく言った。

「アリスを救出に行ってたわ」

その言葉を聞いた瞬間、ダイヤは目を剥いた。

「どうということやねん！ハート！！」

ハートの肩をつかみ強く揺さぶる。

その激しさに、ハートは気絶しそうになった。

「ダイヤ、少し落ち着け」

クローバーが咎めると、ダイヤはパツとハートを離す。ダイヤの瞳には焦り、ともいうべき感情が宿っていた。そんなダイヤをクローバーは横目で見やり

「で、どういうことだと？」

と、物静かに訊く。

ハートはクラクラするのが暫く黙っていたが、やがて口を開いた。

「兄さまはアリスが好き。ソレは知っているでしょ？」

・・・だから例え地位を捨ててもアリスを助けに言ったのよ」

流石にこれにはクローバーも驚きを隠せない。だがすぐに気を引き締め、キツと前を見据えた。

「・・・勝手なことをしてくれたもんやな、スピード。地位を捨てても・・・？ふざけとるん？」

「そうだな。王なんて地位を、スピードがやらねば誰がやるというのだ？」

甘えたこと、言うものだな。今の王とやらは」

2人の声には怒りに似た何かが籠っていた。

そうだ、2人は怒^{いか}っているのだ。

王位を捨てても・・・なんて馬鹿げたことをいうスピードに対して。

「ま、今文句言っても仕方あらへんし、説教は後回しや。クローバー、ナイトメアに伝えるで」

自分達もナイトメアに同行するということを。

隠されたその言葉をクローバーは正確に読み取ると、作業に戻るため走って部屋を出ようとした。

「待つて」

しかし、そのハートの声に2人は足を止める。
ハートは静かだがよく通る声で言った。

「兄さまが・・・反響の国へ行つて良かったわね。
これであな達のアリスを助けられるから」

「・・・どういう、意味だ？」

ゆつくりと振り返ると、そこにはハートの不敵な笑みがあつた。
やはりスピードとは兄妹だ。
スピードが良からぬことを考えているときの笑顔と似ていた。

「兄さまは知ってるわ。クローバーとダイヤはアリスが心配で仕方無いってことを。

でもあな達達は王の近衛と補佐。王の傍を離れるわけにはいかない。

だから、兄さまが反響の国へ行つたことにより、あな達も反響の国へ行ける。

・・・兄さまを捜すついでにアリスも捜せる。まあ、アリスを捜すついでに

兄さまを捜す、かもしれないけどね」

「あんだ、ほんまにハートなん？」

いつもとは違う様子のハートに思わずダイヤは呟いた。
ハートは笑いながら

「脳ある鷹は爪を隠すつてのはあたしのためにあるような言葉なの！」

と言い放った。

やはり、ハートはハートだった、とも2人は思う。

「もうね、あたしは爪をかくしたりしない！第一、宝の持ち腐れだしね！」

・・兄さまは死んでも、王位を捨ててもアリスを守ると決断したので。

だから私も決意した。本気で黄昏の国の女王として働くことを」

王は危険を冒しても反響の国へ行くと決断した。
例えばそれが、多くの人物に迷惑と心配をさせても。

女王は今ここに、黄昏の国のために“女王”になると決意した。
女王のように気高く、それこそ母のようになると。

ハートはぐっと胸の前で握りこぶしをつくって、祈るように瞼を閉じた。

29・主の記憶と好きな理由 前編

「王の記憶と好きな理由^{わけ}1」

アリスはただ焦っていた。

いきなり結婚しようなどと言われれば誰だってそうなるだろう。しかも「して下さい」ではなく「しよう」だ。

「アリス」

と名を呼ばれ、考えにふけていたアリスは、油をさしていない玩具のようにギギギと振り返った。

「で、披露宴はいつがいい？」

急に話が飛躍していることに苦笑しつつ同時に焦る。

「ちょ、ちょっと待ってください！」

「敬語はいらない、どうせ夫婦になる身だ」

さらに話が跳んでいる。キング、恐るべし。

「そうじゃなくて・・・急に結婚なんて！
私の意志はどうなっているの？」

そんなアリスを他所に、キングはクスリと笑う。

「ふむ。意思というが、俺とアリスはすで婚姻済みだぞ」

「え”？」

思わず間抜けな声をあげるアリス。
それに比べてキングは真剣な目でアリスを見つめる。

「覚えていないだろうが本当だ。

アリスに俺が求婚したとき、アリスはそれに応じた」

「お、応・・・じた・・・？」

ドクン、と心臓がはねる。

何かが、何かがおかしくないか

？

「ああ、条件つきだったがな。しかし、そうでもしなければ
アリスが応じないことくらいわかっていた」

少し自嘲気味にキングは言う。

確かに条件付だったのだ。

それは、黄昏の国と同盟を結び今後一切争いをしないことと、
白雪の町を諦めること。

アリスが応じぬ場合、本気で黄昏の国を攻めるし、白雪の町も貰う。
こうキングは言った。脅しと言っていていいほどのエロ。

所詮、国を動かす王であっても人間だ。

キングも、そしてスピードも。

アリスが欲しいから、アリスを手に入れたいから、
アリスに自分の傍で笑っていてほしいから、

王らしくない行動を起こす。

それは、唯^{ただ}、アリスが為に・・・。

30・主の記憶と好きな理由 中編

「王の記憶と好きな理由^{わけ}2」

国を何より思うアリスは迷い、そして頷いた。
キングの妻になると。

キングはアリスの心を利用した。
例えばそれが利己的^{エゴ}だとしても、アリスは了承した。
それは一番楽な道への逃げなのに。

「まあ、どうしてか君はしばらく行方不明になった・・・
それがアリスが黄昏の国へ戻る十日前のことだ」

おかしい。

どういふことなのだ。

アリスは結婚に応じた。だが、何故か国から逃げた。
黄昏の国を想う、アリスにしては不思議な行動。

そして、反響の国から黄昏の国へ行くのは約二日半。
残った八日間何をしていた？

おまけに、反響の国の民が国からアリスらしき人物を見たのは、
アリスが行方不明になってから八日後だ。

一体これはどういうことなのだろう。
どこかで、矛盾が発生している。

キングもアリスも考え込むように目を伏せる。

しかしこうやって考え込んでも、わかるのは記憶を無くす前のアリス、
否、^{いな}“アリスの以前の記憶”のみだ。

アリスはやがて深く息をつく、話を逸らす。

「あの、キングはどうして私を好きに・・・？」

それは少しばかり興味のある話だった。

だからついでに、と聞いてみた。

キングは顔をあげ、アリスを正面から見る。

「ふっ」と微笑し、アリスの隣に腰掛けた。

アリスが座っているベッドが二人分の体重を受け、小さくギシと鳴る。

「これは、以前もアリスに話したことのある話だ・・・」

そう切り出し、ゆっくりとアリスに語り始めた。

アリスと出会う以前のキングは冷血で、操り人形マリオネットのようだった。

今のように感情豊かではない。淡々として役者のように理想の王を演じるだけの。

ある時、国土拡大のために目をつけた、白雪の町。

できる限り、穏やかに済まそうと思っていたが、そうはいかない。

当たり前だが、黄昏の国は使者を送りつけ抗議した。

直接話するため、謁見の場に引き出された使者。
誰もがその人物に目を奪われた。

金色のやわらかな髪に、空のように碧く青く蒼い吸い込まれそうな瞳。

使者は女だった。てっきり男だと思っていた周囲が驚きに駆られるのが
手にとるようにわかる。

女は慣れたように息をつくと、つれまわ跪き、こう言った。

「初めまして。黄昏の国の使者、

アリス＝“リデル”です」

30・主の記憶と好きな理由 中編（後書き）

ついに三十話突破しました！！

記念にまた番外編でも書こうと思います！！

それでは

The thanks that are great to
reading people!

（読んでくれる皆様に多大な感謝を！）

31・王の記憶と好きな理由 後編

「王の記憶と好きな理由^{わけ}3」

一同はさらにざわめく。

この少女をすぎたばかりであろう人物が、あのナイトメアの一味である

“黄昏の国のアリス”である、とは。

「それ程、珍しいでしょうか。女の武官・・・いえ、こちらの国では兵士といいましたね」

丁寧の裏に、どこか棘々（とげとげ）しさのある口調で、アリスは喋った。

挑発にも似た発言に、内心キングは嘲笑するとすぐにアリスに向き直る。

「じろじろ見て失礼した。何せ、使者で女性とは初めてだったのでね」

仕^{おつか}事の笑顔振りまくと、その場にいた貴族の娘や侍女が顔を赤らめる。

ああ、なんて女は単純な生き物なのだろう。
キングの胸に寂れた風が吹き込む。

アリスはキングの笑みにも動じず、ぐつと顔を上げた。

「では、アリス＝リデル。黄昏の国の言い分を」

「ならば、遠慮なくいたします。まず始めに、白雪の町を諦めていただきます。」

無駄な争いは避けたいのです」

「だから、諦めると？そちらが譲れば話は済むだろう？」

キングのその言葉に、予想していたかのようにアリスは口を開いた。

「お忘れですか皇帝陛下。今の国土は遥か昔の世界大戦、その結果分けられた物。」

もうこれ以上国土でとやかく言うのはどうかと思われれます」

・・・討論がしばらく続くが、どちらも譲る気が見えない。時間だけが刻々と過ぎていき、本日は一旦止めることになった。

「わかりあえず、残念です。また明日、良い返事を期待してますね」

そう言つてアリスは踵を返す。

が、なんとなく、ほんの気紛れで、キングはアリスを呼び止めていた。

「・・・何かおありでしょうか？」

釈然としない様子でアリスは返事をする。

キングはというと内心冷や汗をかいた。

なぜ、こんな取るに足らない女に声をかけてしまったのだろうか、と。

「・・・っ。アリス＝リデル。何故武官とやらになった？
女の身であるのに」

何故かこんなことを聞く自分がいて、キングは変な気分になった。どうして、身分が下の者に私情を聞いているのか。それはキングにもわからない。

「何故・・・？愚問ですね、皇帝陛下。

私は別に何も血が、戦が好きだから武官になった訳ではありませんせん。

むしろ戦事は嫌いですが、けれど、愛しい人々が国にいます。その人達を守るため、戦を無くすため・・・矛盾しておりますが、戦うことを選びました」

目を、キングの目をしっかりと見て、彼女は言った。
王、ではなくキングを見て。

「そして今まさに戦争が始まろうとしています。

皇帝陛下、貴方は間違っています。国の王は国の声、つまり民を中心に考えるべきです。止められる、しなくてもいい筈の戦争を・

・
物を破壊するだけの戦争を、貴方は今、自主的に起こそうとして
いるではないですか！」

キングは、今でもその時のことを昨日のことのように思い出せる。
キリッとした表情。凜とした声。きつぱりとした口調。
そして何より、“キング”を見るその瞳。

この女は今まで自分が出会ってきた女とは違う。

今までこんな女に会ったことは無い。

侍女も貴族の娘も、自分の姉も、誰とも違う。

確かにこのアリスという存在は、容姿が美しかったし教養も素晴らしかった。

けれど、そんな物、アリスの心と比べれば・・・意味が無い。霞むべきものとなっていた。

大勢の前で討論をすると、貴族の横槍が入るので非常に煩わしい。アリスの申請もあったので、二人で会議することになった。そんなとき、アリスが不意に言った。

「あなたは操り人形マリオネットのようですね」

アリスは既にわかっていた。

キングを演じていることも全て。操り人形であることも、全て。

「たまには、心から笑ったらどうです？」

そう言っアリスは微か、ほんの微かだが微笑んだ。

初めて、自分に見せた笑顔。正直キングはアリスの笑顔は見たことがある。

城内の侍女や侍従と話しているとき、笑っていた。

だが、それとは違う。

“自分”に向けられた笑顔なのだ。

どうしてか、胸の奥を締め付けられるような感覚が、キングを襲う。

初めての、感情だ。

手に入れたいと、初めて思った。誰にも渡したくないと、初めて思った。

ああ、どうして。

こんなにも、この女性に惹かれるのか。

思わずスツと自然にアリスを抱きしめていた。

最初はアリスも驚いていたようだが、やがてぎこちなく腕を動かし、頭を優しく撫でてくれる。なぜだろう、

不快には、感じなかった。

「と、まあこのような経緯だな。

我が国は自由恋愛主義国だから、身分が違っても誰も反対しない」

語られた過去に、自分も随分大胆なことをしたのだとアリスは思う。運がわるければ首を刎ねられていたかもしれない、というのに。

この人は本気で自分を好きなのだ。と、感じると急に
キング
恥ずかしさを覚え、思わず目をそらした。

そんなアリスを見て、キングは心から微笑った。

アリスが自分に言った「心から笑う」ということ。

今では不自然無く笑えるようになった。それもすべてアリスのおかげ。

時は、穏やかに流れていった。

扉の前、その話を聞く二つの影があるとも知らずに。

小話1 梅雨と恵みの雨

- 帽子屋の見聞録 -

黄昏の国、はとても過ごしやすい国だ。

地理的に四季というものがある、というのも理由の一つだろう。

夏には夏の良さがあるし、冬には冬の良さがある。

だからこそ、黄昏の国は住んでいて飽きない国だ。

しかし、梅雨期は勘弁してほしいものである。

俺、帽子屋はそんなことを思いながらため息を吐いた。

というのも、俺は何時ものごとく仕事しようと城に行った。

だが、その帰り急に雨が降ってきて、今も雨宿り中だ。

(俺は城内ではなく城下町の宿舎で生活している)

そういえば、昨日から梅雨入りしたとか云われていた気がする。

雨は豊かな森を育む恵みの雨だ。それをわかつてはいる。

でも、嫌なものは誰だって嫌だ。

ジメジメするし、カビは生えるし、洗濯物は乾かないし。

・・・宿舎暮らしをしているせいか、物凄く主婦臭くなっているな、俺。

そんなことを思いつつ壁にもたれた。

雨宿りというものは、とてつもなく暇でとてつもなく憂鬱だ。

この分だと雨は止みそうにない。

しかたなく濡れて帰るしか・・・

「あら、帽子屋？」

そんな憂鬱な気分も吹っ飛ぶくらいの女の声がした。
顔を見なくても声でわかる。その人物は

「アリス・・・」

自分の想い人、だった。

でも何故アリスが此処にいる？

どうして傘をさして俺の前にいるのだろう。

確かアリスの宿舎は時計兎たちと同じ城内だったはず。

なぜ城下の細道の、今では使われていない小屋（俺は雨宿りのためにいる）の前にいるのか。

買い物でもしていたのか？にしてはこんな細道通る訳も無い。

それにアリスは傘以外は何も持っていない、手ブラだ。

「なんでこんなところにいるの？」

アリスの方から俺に尋ねて来た。

相手にしてもきつと俺と同じことを思っていたんだろうと推測できる。

「雨宿り。宿舎に帰ろうとしたら降ってきた」

体を壊したくないしな、と付け加えるとアリスも確かに、と笑う。
質問に答えたのだから今度はこちらから質問だ。

「アリスこそ何故ここに？」

「んー、散歩」

「散、歩・・・？」

啞然とした。よりによってどうしてこんな雨の日に。晴れた日の方がよっぽど良いと思う。

「うん。・・・私、雨の日好きだから」

「は、好き？雨の日が？俺はジメジメして好きじゃないが」

湿気を含んだ服の裾を摘みそう言うと、何が面白いのかアリスは笑んだ。

「私もね、前までそう思ってたけど。雨は雨なりに良い所があるわ。晴れの日なんか、太陽の下にトンファー置いてたら火傷しそうに熱くなってたし」

懐かしむようにそうアリスは話しかけてくる。

確かに夏場は武器が熱を吸収してもものすごく暑くなっていた。俺の大剣も例外ではない。

「雨はマイナス面の方が強いかもしれないけど、植物、花、農民には物凄くありがたい恵みの雨なのよ。私個人の意見だと猫は雨が苦手だから、

雨が降るとチェシヤ猫も大人しくなるしね。ありがたいわ。帽子屋はそういう風に思ったことない？」

俺は少しだけ考えてから「いや、無い」と返事した。

するとアリスは少しだけ残念そうな顔をしてから

「これからあるといいわね」と呟く。何で残念がるのか分からない。自分の好きな物を、他人にも好きになってもらいたいという心理だろうか。

悪いがその心理は当てはまらない。何よりこれ以上アリス好きな奴が増えてたまるか。

「で、帽子屋これからどうするの?」

「どうするったって・・・何時上がるか分からない雨が止むのを待つか、

濡れて帰るかのどちらしかないだろう?」

「じゃあ、傘、入る? 宿舎まで」

俺は思わずアリスの顔をまじまじと見た。

まさか、そんなことを言われるとは。普段ならそんなことをしてみよう。

間違いないと殺られる（主に時計兎）睨まれる（主にチェシャ猫）
すぐるような目で見られる（主にハンプティ、スピードetc）
ことが安易にわかる。

・・・そう言えばそんなことをポツリとハートに洩らしたところ
「イカレ」帽子屋じゃなくて、「ヘタレ」帽子屋ね」と呆られた。

このチャンスを逃せば、二度とこんなことは無いと思う。
だったら、逃さないまでだ。

「頼んでいいか?」

「了解。じゃ、入って」

アリスの隣で相合傘。まさか嫌いな梅雨でこんな幸運なことが起こりうるなんて、思ってもいなかった。今日は何て恵みの雨なのだろう。

「あ、そうか」

「なに？どうしたの？帽子屋」

「いや、雨の日も悪くないって今思えただけだ」

「へえ、何があったかわからないけど・・・よかったわね」

本当に、良かった（この際アリスの鈍さには突っ込まないことにしよう）

どうやら、雨の日も好きになれそうだ。

小話1 梅雨と恵みの雨（後書き）

30話記念に書いた

「帽子屋の見聞録・梅雨と恵みの雨」です。

いかがでしたでしょうか？

「イカレ帽子屋」「ヘタレ帽子屋」のネタは

絶対しようと思いました。これは実話なので（笑）

では、これからも「黄昏の国のアリス」を
よろしく願っています。

おまけ4 チェシャ猫に50の質問

くおまけ・チェシャ猫に50の質問く

01 お名前をどうぞ!!

チェシャ猫だよ。

02 性別は?

って表明するほうが正しいかなあ。

03 誕生日!

遅生まれでねえ。

歳は16!

04 身体的特徴(身長とか顔立ちとか色々)

右目が赤で左目が青お。でエ、髪は赤紫、濃いピンクだねえ。

あとお猫の獣人だからー、猫耳と尻尾がついてるよお。もちろん髪と同じねエ。

05 動物に例えると?

気まぐれだし、猫かなア。

06 特技は?

高いところに登ることお。得意だよお。

07 ご趣味は?

ええく、そんなこと聞くのお?

・・・アリスかなあ。アリス「の何か」を聞くことは野暮だからね

え？

08 将来の夢など

アリスの婿さん。アリスがダメっていうならペットでもいいよお。

09 好きな言葉とかある？

「悠々自適」だねえ。まさにオレのためにあるような言葉だねえ。

10 好きな動物は？

いないよお。同種の猫もあんまりかわいいとアリスがとられちゃうからア・・・

兎は大嫌い。

11 好きな色

オレンジ色。陽だまりの色だもんねえ。

12 好きな料理

オレは魚とか肉が好きだなあ。

どこかの兎と違ってエ。

13 好きな異性のタイプ

アリス（即答）

14 好きな同性のタイプ

面倒見の良さそうなあ、帽子屋みたいな感じい。

15 座右の銘は？

えへへえ「天真爛漫」だよお。

無邪気な子供のままでいようと思ってえ。

16 暇なときなにしてる？

アリスの傍でごろごろしてえ、日向ぼっこしてえ・・・

17 旅行とか好き？

アリスとなら天国でも地獄でもお。

18 癒されることって何？

アリスの笑顔だよお。本当に好き好き大好きなんだあ。

19 一緒にいて落ち着く人はいる？

アリスだけえ。

20 ぶつちやけその人は恋人です！？

んゝ・まだあ。いつでもオレは準備できてるのにイ。
照れ屋なんだからさあ。

21 コンプレックスとかあったりなんかしちゃったりする？
んう、水が苦手なことお。

22 それを解消するために何か努力はしてる？
こればかりはあ、猫の遺伝子だからねえ。

23 じゃあ逆に自慢できることは？
高い場所は得意だよお。

24 人生で一番嬉しかったことは何？
アリスと出会えたことと、
アリスが（オレがまだ成人してなくてえ完璧猫のとき）ギョツとしてくれたことお。

25 人生で一番驚いたことは？
アリスの記憶が無かったことだねえ。

26 人生で一番楽しかったこと
アリスと黄昏の国のお祭りに行ったことだよ。

27 人生で一番怖かったこと
これだけはアリス関連じゃないけどお、
時計兔に小さい頃の復讐されたときかなあ。口に出すのも恐ろしい
！・・・

28 人生で一番辛かったこと
アリスと喧嘩（というよりアリスに一方的に嫌われた）こと・・・
仲直りできたときはあ、泣く位良かったよ。

29 外向的？内向的？
どっちでもないかも。

30 道に1000万（日本円で）が落ちてました。どうします？
興味ない。

31 じゃあ、1000万円もらいました。どう使う？
アリスにあげる、興味ないからあ。

32 子犬が捨てられていた！！愛らしい声で鳴いています。どう
でる？

うーん、美味しそうなら食べるウ。
・・・冗談だよ？騙された？

33 突然頼みごとをされました！ あなたならどうする？

気まぐれだからあ、気が向いたらいいよお。

34 とても仲のいい友達と喧嘩しちゃったよ！どうしよう！？
アリスさえいれば友達はいらないよお。

35 嘘はつけるタイプ？
うん。

36 もしかしてその嘘はついてもすぐバレちゃったりしない？
どおだろお。微妙だねえ。

37 何か癖ある？
爪を研いだりすることお？わかんないやア。

38 誰かに何か言いたいことたまつてない？
うん。

39 あるって答えたそのあなた！ じゃあこの穴に向かって
思う存分叫んでください！！
アリスうゝ、オレもう飢え死にするよお！
アリスに飢えちゃうよお！！

40 ……酸素マスクいる？
いないねえ。

41 あなたにとって一番大事なものは？
アリス！（即答）

42 自分といたらコレ！ みたいなのある？
気まぐれ猫。

43 崇拜してる人とかいる？
いないよあ。崇拜も尊敬もないよあ。

44 どうしよう！ 財布を掏られた！！
財布は持たない派あ。

45 コレだけは誰にも負けないものってある？
ネズミ捕りの才能でねエ。

46 こいつには敵わないっていう人いる？
アリスだけ。

47 全部答えてきたね？じゃあこのノリで普段なら言えないような秘密トークをお願いします！！
うーん・・・無いナア。

48 ぶつちやけ作品内での自分の立場ってどうよ？
なんだろねえ？Mキヤラなはずだけどその設定が生かしきれない気がするよあ。

49 ここぞとばかりに生みの親になんでも言っちゃえ！
48でも言っただけお、Mな設定はどうなるのお？
それにい、この前の小話なんで帽子屋なのお？オレも小話書いてよ
！。

50 ここまで読んでくれた方に何か。
お疲れさまあ。
これからも黄昏の国のアリスをよろしくねえ。

オリキャラに50の質問

「Water Future」
http://waterfut
ure.finito-web.com/ori
character50.html

32・反響の国の女皇と近衛（注意！）（前書き）

一部話の都合上、近親相姦的な表現が含まれます。

例：弟に対して恋愛感情を持つようなもの。

（そこまで過激じゃないですが）

苦手な方はお戻りください。

読んでやるという猛者の方のみどうぞ。

32・反響の国の女皇と近衛（注意！）

「反響の国の女皇と近衛」

「くそっ！あの女・・・」

忌々し^げにその女は壁を叩いた。

その女の後ろには、鎧に身を包んだ者が静かに立っている。

「何故、戻ってきた・・・！！」

暗いその部屋に、鎧を着た者が灯をとす。

ボウ。という音とともに女の顔も、鎧を着た者の姿も明らかになった。

女は美しい黒髪を巻き毛にし、真紅のドレスを着ていた。

見るからに派手派手しいドレスなのに、女と違和感なく

むしろ美しいと感じさせてしまうのは、その女的美貌故だろう。

「クイーン様。どうか落ち着いてください」

クイーン、と鎧を着た者 女皇の近衛であるルーク は女にそ

う呼びかけた。

クイーンとはキングの姉。つまり反響の国の女皇。

狂眼と呼ばれる赤い瞳を爛々と光らせ、

「これが落ち着いていられるものか！」

と吐き捨てた。

「アリス＝リデル！あの女・・・よくもキングに！！」

女だてらに兵士として活躍し、女皇の近衛に選ばれたルークは悲しげに目を伏せた。

クイーンは狂っている。

それは、ビショップとナイト、ルークしか知らないこと。いや、もしかするとキングも気付いているかもしれない。ただ、気付かないフリをしているだけで。

クイーンは、実弟であるキングを愛している。おとうと

本物の姉弟であるにも関わらず、だ。

血の濃さを保つため、従兄弟など血の繋がった者同士結婚するのは王族では良くあること。だが・・・姉弟はまずない。いくら王族といえどもそれはない。

誰よりも知的で、誰よりも強く、誰よりも美しかった皇帝。キング姉はその者を愛した。たとえ近親相姦であろうとも。

血の禁忌であろうとも。

女皇は、狂愛といえる狂った愛情を実弟に向けたのだ。けれど、長年の間、女皇は誰にもそれを悟らせなかった。いくら弟が自分にたいして、本当に欲しかった“恋愛心”を向けてくれず

姉弟愛というものしか向けてくれなかったとしても。

女皇はそれでも構わなかった。

けれど。

「クイーン様。まだ“リデル”が在る以上、“アリス”リデル”という者は

“存在しません”。あの者はアリス”リデルでなく“アリス”です」

「ふふ・・そうだったな」

一つの町が、一つの使者が、クイーンの奥底に潜む狂愛を引きずりだしてしまった。

白雪の町のことと交渉することになり、そしてアリスという名の使者が送られた。

そうしてキングはアリスに惚れてしまった。

キングは愛した。アリスのことを。

あんなにクイーンが心で欲していた恋愛心を、アリスは数日の間で手に入れた。

それは、クイーンを狂わすのには充分だった。

「まあいい。また私の呪^{まじ}で消せばいいだけのこと」

クイーンは前から黒魔術という禁呪に魅入られていた。

危険すぎるその魔術は、狂眼の目を持った者だけに使える。

狂眼でない者が使えば、使用者も相手もどちらも死ぬからだ。

長年、勉強していたその魔術をクイーンはアリス”リデルに向かって使用した。

流石に殺せば厄介なことになる。だから殺さずに、

「記憶を、ですか？」

アリスの記憶を奪った。

そしてその際偽装工作もした。

ビショップの式術「傀儡」を使わせ、アリスに黄昏の国あてに手紙を書かせたのだ。

そうすれば、黄昏の国は「アリスは結婚は嫌で、反響の国に監禁されたが、

逃げてきた。しかし途中で事故で記憶を失った」と思わせられる。誰もがその術中にはまった。

「そう。・・・だが、リデルの存在は予想外だったがな・・・
ルーク、命令と作戦を今から言う」

クイーンは赤い口紅で彩られた口元をくつと歪ませる。

「アリスを、捕らえる」

その一言は、何よりも狂った言葉で。

それを分かっているながら、ルークは静々と自身の蒼い髪を揺らし、
頭を垂れた。

32・反響の国の女皇と近衛（注意！）（後書き）

登場人物紹介

クイーン（24歳）

瞳：赤色　髪：黒色

武器：杖（黒魔術）

特技・・・魔法

趣味・・・読書（歴史書や魔術書）

備考・・・スペードと同じ狂眼の持ち主。

反響の国の女皇。

キングの姉。キングを心から愛している。

普通の魔法より強力な黒魔術に魅入られている。

目標を達成するには手段は厭いとわない人。

美にも魔術にも教養にも一切の妥協をゆるさない。

33・自己犠牲と女皇の罖

「自己犠牲と女皇の罖」

キングから、昔の話を聞かされたのはつい数日前のこと。

アリスはどうしようか迷った・・・が、国のため、そして既に婚約済み

ということから考え、結婚を承諾した。

それがきつと、一番良いのよ。

アリスは王妃となる。黄昏の国も安寧。良いこと尽くしではないか。

悲しいかな、自己犠牲というものは。

キングによると早い方が良いというので、今日、形だけが結婚式が執り行われることになった。そのせいか、城は朝から賑わっていた。

流石は、自由恋愛主義国というべきか。アリスが王妃になるということには

何も反対意見は無かった。というのも、黄昏の国の住民だから人質にも使える、利用価値があると判断されたのだろう。

それでも、すんなりと事が進むので良かった。

「（黄昏の国にも手紙を出しておいたし、大丈夫よね）」

そんなことを脳内で考えていると、

「アリス様、とっても美しいですよ。リデルはとても嬉しいです」

そうリデルが心から嬉しそうに、目を細めて笑った。

リデルはとても良い娘だ。

黄昏の国へ来て、独りだと思っていたアリスの傍にいつもいてくれた。

心の支え、とも言える程にまで。

白いドレープのついたドレスを着、様々な装飾品をつけ、リデルの手によってメイクアップしていく。

アリスは自分の変わりように苦笑しつつ、鏡を見た。
メイクは女の武装といわれるのも解る気がする。

「ありがとう、リデル」

リデルはアリスの言葉に「いえ」と微笑むと、パタンと部屋の外へ出て行く。

先程までは、リデルのみでなく数十名のメイドがいたのだが、アリスの希望で全員戻（らせ）たのだ。

しかし今は、そのリデルでさえも部屋から出て行った。

突如、コンコンとドアをノックさせる音が部屋に響く。

首を傾げ、アリスがドアを開けると、ノックした本人が姿を現し、言った。

「こんにちは。アリス様。この国の女皇の近衛、ルークです」

そこにはいつもの鎧を今日はしておらず、シンプルなドレスに身を包んだ

ルークが立っていた。ルークはアリスに頭を下げる。

「! ! ! . . . あ の、ルークさん？」

「アリス様、失礼かと存じますが . . . 」

「いやあの、ルークさん? . . . 顔、上げてもらえませんか？」

私もただの武官ですし。今回の玉の輿ってやつですし . . . 」

アリスがおずおずと言うと、ルークは頭を上げた（それでも敬語は抜けないが）

「我が主、クイーン女皇陛下にお会いしてもらえないでしょうか？」

「（クイーン女皇陛下って、キングの姉の方だっけ . . . ?）
一度も顔見せしていない私の方が失礼ですから、行きます」

では来て下さい、とルークの後をアリスは大人しく着いて行く。
これが、女皇の饗とも知らぬまま。

33・自己犠牲と女皇の畏（後書き）

登場人物紹介

ルーク（18歳）

瞳：黒色 髪：蒼色

武器：剣

特技・・・剣術

趣味・・・絵を描くこと

備考・・・実はナイトと恋人同士。

反響の国の女皇の近衛。

女だてらに剣を振るい、女皇の近衛へと登りつめた。
クイーンのことをもっとも尊敬し、心配している。

故に女皇の命令には逆らわない。

おしゃれには興味があるが、今は戦い>おしゃれである。

34・第三者と狂う齒車

「第三者と狂う齒車」

ルークに言われて、ついてきた先は女皇の部屋だった。

「やはり王妃で、自身の義妹君になられますから。一度は二人きりで話がしたかったでしょう」

ルークはそう一言残し、アリスを部屋の中へと促す。おずおずと扉を開け、中に入る。すると・・・

「お入り、アリス」

むせるような薔薇の香り。そして、そこに座っていたのは女皇。同じ女王でもハートとは違う雰囲気をもとわせていた。

「少し、話してきたいの。良いわよね？」

「あ、はい」

にこりと笑んだクイーンに、アリスはどこか安心感に似たものを覚えて、

またアリスも笑み返した。

『スピード』

馬車の中、真つ暗闇で黄昏の王の名を呼ぶ声があった。

王　スピードは閉じていた目を徐々にあける。
声の主は確認できない。それもそうだ。姿形などその者には無いか
らだ。

「何だい？」

『本当にこれでいいと思ってるのか？お前は王なのだぞ。
一人の私情で、国を戦争に巻き込んだ。一人の人間だけのために
国が犠牲になろうとしている』

その者の言葉はぐつとスピードの胸に突き刺さった。
けれど、もう引けないのだ。

『アリス・・・あの女がああ皇帝と結婚すれば、全て丸く収まるだ
ろう。』

国も守れて、妃きごうきにもなれる』

「っ・・・」

確かにそうかもしれない。アリスは“それ”を望んでいるかもしれ
ないのだ。

アリスを救う・・・この言葉は一見、アリスのための事に思える。
しかし、結局は周囲の者の私情でできた言葉に過ぎない。
全て、利己的な、考え。

「・・・ア、アリスは王妃になりたくないはずだよ」

それは“王”としてアリスを視みていたから言える一言。
アリスが王妃になりたいというのなら、自分を視てもいいはずだ。
が、アリスはスピードを見ていたけれどスピードを視てはいない。

スピードを王として思っているけれど、想ってはいなかった。

「アリスがなりたいのは、皆を守れる武官だ」

『だから、アリスは違うと？』

ウン、とスピードは頷くと、その者は「人間はわからん」と溜息を吐いた。

第三者から見て、本当にこいつは馬鹿だスピードと思う。

好きなら好きと言えば良いのに。好かれていないなら、好きにさせれば良いのに。

何故、そんな単純なことができないのか。

つくづく思うが、人間とは不思議なイキモノだ。

「それにね。僕は・・・たった一人でも、犠牲が無いと築けない国なんかいないんだ」

スピードのその顔は合間見える王の、王としての表情だ。

誰かを犠牲にしないとできない国は平和ではないと。

そうスピードははっきり言った。まるで、スピードの父、先代の王のように。

『フ・・・そうか。まあ、俺はあまりあの女が好きでない。

言うておくが、助けるのはお前の命めいだからだぞ』

「ははは。変わらないね、そんなところ。

・・・それでも良いから、力を貸してくれよ？ジョーカー」

姿は見えないが、その時、ジョーカーと呼ばれた者が笑っているの

をスピードは感じ取った。

34・第三者と狂う齒車（後書き）

登場人物紹介

ナイト（20歳）

瞳：こがね黄金色 髪：翡翠色

武器：剣

特技・・・剣術はもちろん体術など

趣味・・・体力作り

備考・・・ルークとは幼馴染でもある。

反響の国の皇帝の近衛。

剣さばきは帽子屋なみ。そうとう強い。

皇帝に忠実を誓っており、結構フラフラしている
ビシヨップとは良い喧嘩友達。

おまけ5 帽子屋に50の質問

くおまけ・帽子屋に50の質問く

01 お名前をどうぞ!!
帽子屋。

02 性別は?
正真正銘の男だ。

03 誕生日!
冬生まれ。20歳だが。

04 身体的特徴(身長とか顔立ちとか色々)
ハンチング帽子を被っていて、目は黒色で髪はこげ茶色。
金髪蒼目のアリスや赤髪黄目のハンプティやその他モロモロの中
では地味な方だな。

05 動物に例えると?
?・・・何だろう。アリス、何だと思う?
アリ「えーと・・・群れの統一性あるし、強いし狼かしら」

06 特技は?
戦うことだけだろ。

07 ご趣味は?
紅茶を飲むことだな。

08 将来の夢など

夢、か。幸せに生きれたら良いな。

09 好きな言葉とかある？

有無相生。その意味は、有と無は、有があつてこそ無があり、無があつて

こそ有があるという相対的な関係で存在すること。また、この世のものは

すべて相対的な関係にあること。というものだ。

10 好きな動物は？

犬が好きだ。忠犬は良いと思うぞ。

11 好きな色

空の色、つまり蒼色が好きだな。澄んだ色だから。

12 好きな料理

紅茶に合う・・・クッキー。(クッキーも料理の一つだろう?)

13 好きな異性のタイプ

凜としている女が好みだ。

14 好きな同性のタイプ

そうだな・・・クローバーのような責任感の強い奴は友人になりた
いと思うが。

15 座右の銘は？

「おこれる者は久しからず」クローバーの故郷の言葉だな。

16 暇なときなにしてる？

掃除や料理作り、食材の買い込みに行っている（だから主婦臭いと言われるのか？）

17 旅行とか好き？

多文化には触れてみたい。

18 癒されることって何？

お気に入りの紅茶を飲んだとき。

19 一緒にいて落ち着く人はいる？

空気を読むダイヤだ。うるさいときはうるさいが、物静かなときは物静かだしな。

20 ぶつちやけその人は恋人です！？

そんな訳ないだろう！ただの友人だ！！

21 コンプレックスとかあったりなんかしちゃったりする？

（外見的にも）地味な所か？

22 それを解消するために何か努力はしてる？

だからといって、チエシャ猫やハンプティーみたいになりたくもない。

俺は俺でいい。

23 じゃあ逆に自慢できることは？

強い所と家庭的？な所か。

24 人生で一番嬉しかったことは何？

ゴールデン・ティップスという超高級紅茶を飲んだときだ。

それは年の初めに摘まれた、まだ葉が開いていない芯芽（枝の先端

部の葉のつぼみ)

部分のことを示すんだ。表面には細かい小さなうぶ毛があり、加工後にも

この状態を残しているものを「ティップ」といい、その中でも発酵課程で発生した

紅茶液に染まって金色に見えるものを「ゴールデンティップ」と呼んでいて(ウンチクが続くので省略)

25 人生で一番驚いたことは?

そうだな。やはりスピードと初めて会った時。若くて驚いた。

26 人生で一番楽しかったこと

スピードの城のパーティーに行ったときか。

スピードが仕入れた美味な紅茶が一杯あって心が躍ったな。

27 人生で一番怖かったこと

父親と手合わせしたことが。本気でかかってくるから思わず退きそうになった。

28 人生で一番辛かったこと

両親や妹が他国の兵士によって殺されたとき。どうしてもいいかわからなくて放心状態だ。

思えばアリスがいたから何とか耐えたんだよな。

29 外向的?内向的?

外向的か?

30 道に1000万(日本円で)が落ちてました。どうします?
どうすると言われても……無視。

31 じゃあ、1000万円もらいました。どう使う？
国に寄付。

32 子犬が捨てられていた！！愛らしい声で鳴いています。どう
でる？

拾って育ててやるさ。

33 突然頼みごとをされました！ あなたならどうする？
引き受ける。自分に出来る範囲なら。

34 とても仲のいい友達と喧嘩しちゃったよ！どうしよう！？
相手が折れるのを待つ。自分が悪いなら、頭を冷やしてから謝る。

35 嘘はつけるタイプ？
どうだか。つけないかもな。

36 もしかしてその嘘はついてもすぐバレちゃったりしない？
解る奴には解るだろう。

37 何か癖ある？
帽子を被り直すこと。適度に被り直さないと夏場は蒸^むれて、時期ハ
ゲる・・・

38 誰かに何か言いたいことたまってる？
無いな。

39 あるって答えたそのあなた！ じゃあこの穴に向かって
思う存分叫んでください！！
言いたいことは愚痴るタイプだからあまり叫ぶもんじゃない。

40 ……酸素マスクいる？
いらん。

41 あなたにとって一番大事なものは？
己の志だ。

42 自分といたらコレ！ みたいなのある？
帽子。実は帽子は紅茶同様、家に結構コレクションしてある。

43 崇拜してる人とかいる？
父親だ。俺の父は黄昏の国の武官として働いていたんだ。

44 どうしよう！ 財布を掏られた！！
迷惑をかけるわけにはいかなから自分でなんとかする。

45 コレだけは誰にも負けないものってある？
うぬぼれは自分の身を滅ぼす。だからあまり自分でそういうことは
思っていない。

46 こいつには敵わないっていう人いる？
今は亡き父だ。

47 全部答えてきたね？じゃあこのノリで普段なら言えないよう
な秘密トークをお願いします！！

秘密ってものじゃないが俺は紅茶と帽子が好きで、ウンチクを語ら
せたら止まらない。

例えば、世界三大銘茶は「ダージリン」、「ウヴァ」、「キーマン」
という紅茶。

伝統的な紅茶の入れ方を「ゴールデンルール」といい、それには5
つの基本原則がある。

- 1・良質の茶葉を使うこと。
 - 2・茶葉を入れる前に必ず温めておく。
 - 3・茶葉の量は正確に。
 - 4・汲みたて、沸かしたての沸騰したお湯を使う。
 - 5・しっかりと蒸らす。
- 他にも、紅茶の原料茶葉の売りさばきのために、定期的に開かれる公開せり市「ティー・オークション」というものが（以後省略）。

48 ぶつちやけ作品内での自分の立場ってどうよ？
主婦？

49 ここぞとばかりに生みの親になんでも言っちゃえ！
うーん・・・まあ、頑張れ。

50 ここまで読んでくれた方に何か。
ここまで読むなんてそうとう頑張ったな。
純粹に、ありがとう。

オリキャラに50の質問
「Water Future」 <http://waterfuture.finito-web.com/orichara50.html>

35・茨の牢獄と断罪の場 前編

「茨の牢獄と断罪の場1」

狂ってる。

心の底からアリスはそう感じていた。

寒さをこらえるようにうずくまりながら。

「ドレス・・・汚れちゃう・・・キングがせつかく用意してくれたのに」

ここ、アリスが今いる場所は『茨^{しほ}の牢獄』と呼ばれる城の地下にある牢屋だ。

普通、罪人は城から少し離れたところにある『断罪の塔』へと連れて行かれる。

この茨の牢獄は昔使われていた・・・つまり、今は使われていない断罪の場。

茨の牢獄の存在は、王族と上層部にしか知られていない。そこに、アリスはいる。

身を少し動かすだけで、ジャラと鎖が音をたてた。

アリスの手には鎖、足には足枷^{あしかせ}がはめられている。

いま、アリスをこうさせたのは他の誰でもない、クイーンだ。

あの時、クイーンと対談した時、アリスはクイーンの狂気を身を持つて知った。

自分に対する憎悪も、結婚者^{キング}に対する愛情も、全て。

『お前さえいなければ・・・お前さえ・・・アリスさえ・・・』

クイーンの声が心の中でこだまする。

アリスを心から憎んでいる、あの言葉。

「私って・・・男運も女運も無いのねー・・・」

思わず乾いた笑いを漏らした。

変人には好かれ、女の子からは嫌われる。

「どうして、なの・・・私は、普通にしてるだけなのに」

アリスの言葉はひんやりとしたレンガの壁に吸い込まれた。

アリスにとつての「普通」が変なのだろうか。

女の子の友達が欲しいとアリスは望むだけだ。

しかし、それも叶わない。母譲りの美貌を持つ、から。

女性にはひがむ。仕方の無いこと。それは良くわかつている。わかつてはいるのだが・・・

これから先、女の友達ができないのなら、アリスは自分自身の顔を傷つける覚悟だつてある。

全て全て不毛なのだ。男達はアリスが好き。でもアリスは恋愛よりも友情を求めている。

けれど、その“友達”になれる女の子達はアリスを嫌う。

「ハア・・・」

じんわりと涙がにじむ。アリスはそれをこぼれさせないように上を向いた。

きつときつと、一度涙を流したら、泣くのを止められなくなる。

泣きたい。けれど、泣こうとしない。泣いてはならない。

アリスは、武官なのだ。自分から、武官になったのだ。

完璧な母と父であるには、涙を見せてはいけないのだと。

どうしても、必死に足掻いても、抗^{あらが}えないこと。

自分が決めたことだから。アリスは自ら、女で生きることを止め、戦場で生きることを選んだ。

唐突に、シャランという音がアリスの耳に入った。

どこかで聞いたことのある、音。段々とその音は近付いてきた。

「やはり、此処にいられたか」

「……」

その人物は、錫状からシャンシャンと音をたて、アリスを鉄格子越しに見た。

35・茨の牢獄と断罪の場 前編（後書き）

今回は短めでしたが、後編は長くなると思います。

さて、アリスの元に来た人物とは誰でしょう？
錫状といえば・・・あの人しかいませんよね？

36・茨の牢獄と断罪の場 後編

「茨の牢獄と断罪の場2」

「あなたは……確か、ビショップ……？」

「ああ。王の補佐、ビショップで合っている」

ビショップはアリスに付けられた鎖と足枷を見て、痛々しそうな表情をした。

何も自分がされている訳でもないというのに。

やがてビショップはその場にしゃがみこみ、アリスと目線を合わせる。

「アリス嬢。此处から逃げ出したいと思われるか？」

「えっ？」

アリスは自分の耳を疑った。

反響の国側、つまりクイーン側の人間なのに、何故アリスにこんなことを訊くのか、と。

「で、どうなのだ？」

「それは……逃げたい……けれど」

不審に思いつつそう答えると、ビショップは「そうであらうな」とだけ呟き、自身の懐を弄った。

「あの、何を？」

「心配はせずとも良い。拙僧せつそうは今はアリス嬢の味方、と言った所であるからな」

ビショップは何を企んでいるのだろう。

今「は」味方という言葉。どこか胡散臭さがある。

「さっきの言葉・・・今はってどうということなの？」

「拙僧は本来、反響の国の補佐官。しかしながらクイーンのやり方には賛同しかねる」

その返答に、アリスは心がざわついていくのが良く判った。

苛立ちともいえる感情が心を巢食う。キツと鉄格子ごしにビショップを睨む。

心が苛つく。自分がこんな目にあっているのは反響の国のせいだ。

「だったら・・・だったらどうして私をこの国に連れてきたのよ！！」

八つ当たりということは分かる。けれど口が止まらない。言葉が止まらない。

アリスの目の前の世界が滲にじむ。涙がまた溢れてきたのだ。ポタリ、と涙の雫がアリスのドレスに落ちた。

「どうして・・・よお・・・」

堰せきを切ったかのように涙が止まらない。

やっぱり、一度泣いてしまつと涙腺が緩み続けるものだ。

アリスは幼馴染にも誰にも見せたことのない涙を、敵国のビショップに見せた。

ビショップはというと何も言わずじいつとアリスを見る。

だがやがて、鉄格子の隙間から手を伸ばし、アリスの頭を撫でた。

アリスはビクリと一瞬体を震わせ、顔をビショップに向ける。

「……拙僧、は」

ボソリと囁くように小さな声で、ビショップは言葉を続けた。

「拙僧は王の補佐だ。連れてきて欲しい、そう申したのはキングだ。けれど此処にアリス嬢を閉じ込めたのはクイーン。だからこそ今は、アリス嬢を救う」

確かに「王」の補佐のビショップは、「女皇」の命令を聞く義務は無い。

だからこそ、アリスを助けようとしている。

ビショップの撫でる手は、とても温かく、優しくかった。

余計に涙が止まらなくなる。

「今くらいしか泣くときが無かるう？ 故に、泣きたいだけ泣くが良い。拙僧は何も言いはしない。」

泣き止んだら、もうアリス嬢は『黄昏の国のアリス』に成っているであろうしな」

アリスはただ、泣き続けた。涙を止める術なんて、もう分からなかった。

ようやくアリスは泣き止んだ。

どのくらい泣き続けたのだろう。目も腫れているのかもしれない。そうアリスが考えていると、ガチャリがして牢が開いた。ビショップが懐にしのばせていた牢の鍵で開いたのだ。

「アリス嬢。動かないで呉れ願う」

ビショップに言われた通り大人しくしていると、今度は二枚の紙を取り出した。

その紙にはすでに何か文字が書かれている。しかし達筆で何と書かれているのかよく分らない。これが式の発動に不可欠な式紙しきがみだということは言うまでもない。

アリスが不思議に思っていると、ビショップはその呪字が書かれた式紙の一枚をアリスの手の鎖に、もう一枚はアリスの足枷の所に置く。

「オン バザラ アラタンノウ オン タラク ソワカ。
彼の者に放恣ほうしを与えよ」

そう唱えると、式紙、否、紙に書かれた呪字が反応するかのように光を放つ。
そして、

パキン

と音を立て、鎖と足枷に亀裂が入り、割れた。

「嘘……」

アリスは信じられないと言ったかのように、足を見、手首を見る。鎖と足枷が、自身の手足から外れた。拘束していたあの忌まわしき玩具が。

一方、ビショップは鎖で赤くなつたアリスの手をとり、また、別の式紙を取り出し呪い^{まじな}を唱えた。

「オン コロコロ センダリ マトウギ ソワカ。
この者に安らぎを」

先ほどとは違い、まるで蛍のような、淡く優しげな光に包まれる。刹那、アリスの手足の赤みは引いていた。未だ、アリスは手足を凝視していたが、やがて顔を上げ、

「ありがとう」

と微笑んだ。

36・茨の牢獄と断罪の場 後編（後書き）

ビショップやたらと出張ってますね。

ちなみに今回の式術の呪いは、

真言（マントラ）とよばれる言葉をお借りしました。

真言とは

密教で、仏・菩薩などの真実の言葉、また、その働きを表す秘密の言葉をいう。

〔Yahoo!辞書参考〕

「オン バザラ アラタンノウ オン タラク ソワカ」は虚空蔵菩薩という空を管理する菩薩の真言です。

この真言を毎日100万回、100日間唱え続ければ飛躍的に記憶力が増大するとされます。

「オン コロコロ センダリ マトウギ ソワカ」は薬師如来というその名の通り

医薬を司る仏で、医王という別名もあり、衆生の病気を治し、安樂を与える仏の真言です。

興味のある方はまた調べてみてください。

アリスという洋風な話にこんな渋い宗教知識、失礼しました。

37・赤い夢と止まらぬ齒車

「赤い夢と止まらぬ齒車」

「アリス嬢・・・ドレスは目立つ上に動きにくかるう？他の服に着替えた方が良い」

確かにドレスはかさばるので動きづらい。

動きやすく、その格好で歩いていても不審がられない服、メイド服を着ることにした。

「着られたか？」

「ええ、まあ」

侍女の服に着替え、ビショップに着いていく。するとその途中、

「ビショップ待て。どこへ行くつもりだ？」

と、声をかけられた。ビショップは軽く舌打ちしてその人物に向き直る。

「ナイトか・・・何処へ行こうとも勝手であろう？」

ナイトは訝しげにビショップを見て、メイドに扮したアリスを見た。アリスは一瞬ひやっとしたが、目には緑のカラーコンタクトをしているし、

髪は1つにおだんごにまとめている。簡単なメイクだって施してい

る。

我ながら上手く化けたとアリスは思ったほどだ。きつとばれてはいない。

「その娘は？」

ナイトはビショップに対してこう聞いた。

その娘・・・つまりメイド姿のアリスのことを言っているのだ。

「メイドであるが」

「それくらい見りや分かる。そうじゃなくて、そのメイドはお前の専属メイドなのか？」

「如何^{いか}にも。今自室の戻るので付いて来て貰っているだけだ」

「へえ」とナイトは好奇の目でアリスを見る。その視線は先ほどと違い、疑うようなものの類^{たぐい}ではなく

ただ単にメイドに対する純粋な好奇心だった。やがてアリスから視線を外し

「しかし自室には戻れないぞ、ビショップ。キングから呼び出しだ」

こう言った。刹那、ビショップの眉がピクリと動く。ビショップは息をはきつつアリスを見る。

結局アリスはビショップの自室に、ビショップはキングの部屋に行くことになってしまった。

別行動は遠慮したかったが致し方ない。ビショップが戻ってくるまでアリスは部屋で待機状態だ。

一方ビショップはというとキングの部屋前にいた。ノックをして中に入る。
すると・・・

「ビショップ。良く来てくれたな」

キングは、キングが好んで着る狩時の服を纏っていた。
細やかな刺繍がされたこの服は動きやすく、加えて威厳ある皇族らしさを漂わせている。

「キング、呼び出した理由とは一体・・・？」

ビショップは何故、キングが今日狩をする訳でも無いのにその服を着ているのか疑問に思いつつも本題を尋ねた。
キングは窓の外を見ながら、ビショップ、ナイト、そしてルークに言う。

「大切なものを取り戻すには、大切なものの大切なモノを壊さなければならぬか」

言う、というより独り言のように呟かれた言葉。

キングは何を思っ、何を想い、こうひとりごちたのか。言わずとも分かる。

アリスだ。

アリスが前のように忽然と姿を消したとき、キングは何もしなかった。

何もしようとはせず、ただ自室に籠^{こも}って死人のように、眠った。
それも1日だけであったが、その目を誰とも合わせようとはしなくなっていた。

「もう、奴等は来る。姉上も、動く。三人とも、覚悟しておいた方がいい」

ビショップは王の補佐。キングの言ってることもいつもなら誰よりも理解するが、

この時ばかりはキングが何を言いたいか明瞭に分かりはしなかった。ただ、自分の姉の^{クイーン}していることを知っているかもしれないという香りを匂わせただけ。

キング、とビショップは呼びかけようとした、が、次の瞬間。

ドゴオンと低い地響きがした。

ルークもナイトもビショップも驚きに駆られ、地響きの原因を探そうと窓の外を見た。

だが答えを見つけ出すより先にキングは口を開く。

「悪夢のお茶会、か。……赤く濡れたユメを見るのは誰だろうな」

そうしてキングの視線を辿ると、いるはずのないナイトメア、クロバー、ダイヤが庭に立っていた。

兵士に囲まれている。それはキングが動かす兵士でなく、クイーンの兵士だった。

歯車が、止まらぬことを知らないように、より強く速く加速した。た。

おまけ6 ハート女王に50の質問

くおまけ・ハート女王に50の質問く

01 お名前をどうぞ!!

ハートって言う名前よ。

02 性別は?

もちろん女じゃないじゃない?

03 誕生日!

あつーい夏に生まれたの。歳は16歳よ。

04 身体的特徴(身長とか顔立ちとか色々)

そうね、左頬に紅色のハートマークの刺青がしてあって、美少女だ
って自信を持って言えるわ。

05 動物に例えると?

愛らしいハムスターよ!ねえアリス、そうでしょ?
アリ「そうね。小さいところとか合ってるかも」

06 特技は?

メイクとか、あと刺繍!服を作ったりするの上手いわよ。

07 ご趣味は?

宝石、アクセサリー、ドレスを集めることね。

08 将来の夢など

ハンプティィ・・・とけけけ結婚することよ！！言わせないでよね！

09 好きな言葉とかある？
んー、才色兼備ね。

10 好きな動物は？
ハムスターよ！ねずみは大嫌いだけど。

11 好きな色
ピンク。だって女の子っぽいでしょ。

12 好きな料理
庶民臭いって思つかも知れないけど、ロコモコよ。

ロコモコっていうのは白ご飯の上にハンバーグと目玉焼きを乗せて、
グレイビーソースっていう
ソースをかけたものよ。美味しいわ。あたしが進めるんだもの、食
べて見なさい！損は無いから。

13 好きな異性のタイプ
優しい人。二重人格でも、ハンプティィが・・・その、す、好きだ
わ。

14 好きな同性のタイプ
大人っぽい包容力のある年上の女性ね。我儆言っても許してくれそ
うな人。

15 座右の銘は？
「能ある鷹は爪を隠す」あたしにピッタリな言葉よ！

16 暇なときなにしてる？

刺繍？メイク？小さなファッションショーを開いたり？

17 旅行とか好き？

好き！大好きだわ！

18 癒されることって何？

ハンプティーが笑ってくれたとき・・・本人に言っちゃ駄目よ！

19 一緒にいて落ち着く人はいる？

ここはハンプティーって答えたいけど、やっぱり兄様かなあ。

20 ぶっちゃけその人は恋人です！？

ううん。兄妹よ・・・失敗したわ、さっきの答えハンプティー
って答えとけば良かった。

21 コンプレックスとかあったりなんかしちゃったりする？
胸がないとこ・・・16歳といえども色気がほしい・・・

22 それを解消するために何か努力はしてる？
なるべく露出的な服を着てるけど効果はないみたいね・・・

23 じゃあ逆に自慢できることは？

美少女！アリスとは違ったタイプの美人よ、あたしは。

24 人生で一番嬉しかったことは何？

ハンプティーに頭を撫でてもらったことかな。すごくドキドキした
わ。

25 人生で一番驚いたことは？

ハンプティーがダンプティーっていう人格もあるってことよ。

26 人生で一番楽しかったこと
メイクすることの楽しさを知った瞬間ね。あれはあたしの人生を変えたもの。

27 人生で一番怖かったこと
父様や母様が死んじゃったこと。怖くて、怖くてたまらなかったわ。だって兄様まで死んじゃうのかって思ったもん。

28 人生で一番辛かったこと
アリスに婚約者をとられたこと。って言っても今考えてみると、あたしハンプティーが好きだから逆に感謝してるのよね。

29 外向的？内向的？
外向的！

30 道に1000万（日本円で）が落ちてました。どうします？
お金なんて有り余ってるわ、いらない。

31 じゃあ、1000万円もらいました。どう使う？
いらない。

32 子犬が捨てられていた！！愛らしい声で鳴いています。どうする？

兄様に頼んでみるわね。

33 突然頼みごとをされました！ あなたならどうする？
女王に頼みごとなんて良い身分じゃない。

34 とても仲のいい友達と喧嘩しちゃったよ！どうしよう！？
場合にもよるけど、基本的には相手が悪いわ！

35 嘘はつけるタイプ？
ついたことないからわかんない。

36 もしかしてその嘘はついてもすぐバレちゃったりしない？
うーん、ついたことないからって言うてるでしょう？

37 何か癖ある？
髪を払うところかしらね。

38 誰かに何か言いたいことたまってる？
あるわ。

39 あるって答えたそのあなた！　じゃあこの穴に向かって
思う存分叫んでください！！
言える訳ないじゃない！！ハンプティーに聞かれてたらどうするの
よ！

40 ……酸素マスクいる？
いないわ。

41 あなたにとって一番大事なものは？
あたしの母様から受け継いだハートのステッキね。

42 自分といたらコレ！　みたいなのある？
ハートマーク？

43 崇拜してる人とかいる？

いないけれど、あえていうなら母様。

44 どうしよう！ 財布を掏られた！！
財布は持たない主義なのよ。

45 コレだけは誰にも負けないものつてある？
刺繍の腕。アリスにも負けないわ。今も丁度ドレス製作中なの。

誰のドレスかは秘密よ？あたしのじゃないけど、楽しみにしてて！

46 こいつには敵わないっていう人いる？
ハンプティーとダンプティーね。

47 全部答えてきたね？じゃあこのノリで普段なら言えないような秘密トークをお願いします！！
う、そうね。実は結構経験者ぶってるけれど・・・恋に関してはウブなの・・・！

48 ぶつちやけ作品内での自分の立場ってどうよ？
我侬嫌味な女王って感じ・・・もう！でもこれからはその立場は変わるわよ？

49 ここぞとばかりに生みの親になんでも言っちゃえ！
ハンプティーとあたしどうなるの？あたしとハンプティーの馴れ初めでも書いてよ。

50 ここまで読んでくれた方に何か。
ご苦労様ー。これから黄昏の国のアリス（特にあたし）の応援よろしくね！

オリキャラに50の質問

h u r W
t r e a
m . f i n F
l i n i t o t u
r e - u r e
b w e b
c . h
o m t
/ p
o r i :
c h /
h a w
a r a t
a 5 e
0 r f
 . u
t

38・隠れた力と悪夢の原因

「隠れた力と悪夢の原因」

彼らは穩便おんびんに物事を済ませようと思っていた。

だから城の外壁の所で待ち、城に入る許可がおりるのを待っていたのだが……

何を血迷ったか、城の兵士たちがナイトメアたちを襲った。

焦点のあっていない瞳。誰かに、操られている。そう直感した。

無駄な争いを避けるため、逃げようとはするが、町に逃げては町の民に被害が及ぶ。

「ちっ！仕方ない、城内へ逃げるぞ！」

城の中ならば皇帝であるキングたちが兵士を止めてくれるだろう。自分の兵士をキングが操るはずは無いからだ。

「でも帽子屋！城の門は開いてないよ！」

ハンプティーが槍で兵士の攻撃を受け止めながら訴える。

確かに門は開いていない。ならば……強行突破しかない。

帽子屋は大剣、時計兎は鞭、ハンプティーは槍、チエシヤ猫はナイフ、クローバーは刀。

……この頑丈そうな外壁を壊すことができるのは……

「俺しかあらへんやろ」

ダイヤはガントレットで覆われた手で握りこぶしをつくり、力一杯に外壁を殴った。

一瞬の出来事。ピシッと音をたて、外壁にヒビが入る。思った以上に壁が崩れ、地響きをおこした。

「ダイヤ・・・お主・・・」

「・・・やりすぎだねエ」

「ですね・・・」

普段は仲の悪いチェシャ猫と時計兎さえも同意するほどの呆れ。

ダイヤはとうとう何か憑き物でも落ちたかのような良い笑顔でナイトメアとクローバーに振り返る。

「いやあ、勘弁。溜まっとったもんで。まあこの壁は事が終わった
ら黄昏の国費で直せばいいやろ」

ひゅつと振り下ろされた兵士の剣を、ダイヤは軽く避け、崩れた外
壁の瓦礫がれきの山に上った。

帽子屋たちもダイヤに続いて城の敷地内に入る。スペードとアリス
を見つけ出すために。

アリスは困惑していた。

突然の地響きと部屋の外から聞こえる怒号。どうしたら良いのかすらも分からない。

「アリス嬢！」

突如、ビショップが派手な音をたてて部屋に入ってきた。

アリスは天の助けとばかりにビショップを見るが、ビショップはアリスの手首を掴んで走った。

「え、ちよつ・・・ビショップ、どうしたの？何があったの？」

驚きながらビショップに問い詰める。ビショップは未だ走りつつもアリスの問いに答えた。

「少し厄介なことになったのでな。黄昏の国の数人の武官がこの城に来たのだが・・・

クイーンがその者たちを追い返そうとしておられる。この騒ぎに便乗し、アリス嬢を逃がす」

アリスは目を見開いた。黄昏の国から、武官が来たなどと、予想もしていなかった。

第一、わざわざビショップに逃がしてもらう必要だつて無くなる。

「それなら、私がその人たちと合流した方が良いんじゃない・・・」

「馬鹿を言いなさるな。こんな騒ぎを起こした者をキングが逃がすわけ無かるうが。」

アリス嬢を連れているならば尚更な。それに・・・」

不意にビショップは言葉を途切れさせた。

握っていたアリスの手を放して。それだけでアリスは悟った。

その者たちと合流してしまうとより明瞭にビショップが手引きしているバレやすくなる。

前を歩くビショップの背は、どこか苦しそうな、悲しそうな、虚無感が漂っていた。

38・隠れた力と悪夢の原因（後書き）

ガントレットとは手甲てこうのことです。

手甲とは手の甲や手首などを覆い、保護するためのものです。さすがに素手で壁を殴っては痛い（どころじゃない）のでガントレットをつけさせてみました。

39 武士の白刃と僧侶の錫杖 前編

「武士の白刃と僧侶の錫杖1」

「ビショップ、アリス嬢！」

突然にビショップが振り向いたので、アリスは驚く。ビショップはアリスを引き寄せ、それから伏せた。

アリスも強制的につられて伏せる。状況判断ができていないアリスの目の端に映った物は、

白刃しんげとヘリオードル石のような黄緑色の目、若葉を思わせる新緑色の髪。

「やれやれ、手荒い挨拶であるな」

ビショップはゆっくりと立ち上がり、伏せた弾みで廊下へと投げ出された錫杖を拾った。

相手方は真っ直ぐにビショップを見つめている。

「久方ひさかたぶりというべきか、ビショップ」

アリスも立ち上がると、その男 クローバーを見る。

クローバーもアリスに視線をめぐらせ、アリスと目が合う。

だが、アリスは思った。おそらく、クローバーは自分がアリスだとは気付いていない。

何故なら、メイドに変装しているのだ。気付いたら、相当な洞察力だろう。

「今、貴様その侍女をアリス嬢と呼んだろう。ということはその

者はアリスか」

「・・・そうよ」

アリスがそう頷くと、クローバーも納得したような表情を見せた。

「どうりで、雰囲気似ていると・・・その格好も似合っている」

「口説くのはその辺りにしてもらおうか。何の用だ？クローバー」

ビショップが腕組みしながらクローバーに言葉を投げかける。

クローバーは「なっ・・・」と声をだし、うつすらと赤みを帯びた顔でビショップを睨む。

「くっ口説いてなど！貴様じゃあるまいし、この禿げ偽僧・・・！」

「禿げではない、坊主だ！僧侶は皆禿げているものだ。そんなことも知らぬとは」

「貴様は僧侶でなく偽僧だろう！人の姉上に手をだしておいて良くその様なことが言えたものだな！」

「これだから姉好きは・・・未だ姉離れできておらぬのか？悲しいことよ」

「な「あー！もう！言い争いは良いから、話進めるわよ！」

このまま延々と続きそうで、どこまでも幼稚な言い争いになっていく口論にアリスは終止符をうつ。

クローバーもビショップもお互いが昔からの知り合いなので、話し

ているとどうやら素に戻るようだ。

2人は自分たちの言い争いを恥じたのか、一度静かに深呼吸した。そして心を落ち着かせたらしいクローバーはやがて口を開く。

「兎に角も、アリスが無事で何よりだ」

「アリス嬢を守ったのは拙僧であるのだがな」

ビショップとクローバーは顔を見合わせてから、アリスを見た。

「アリス、ここから去れ」

「そういうことだな。下に降り、庭から外へ出ると良い。」

他のメイドや執事たちも避難しているものがあるから怪しまれることは無かるう」

2人の顔つきが違っていることに、アリスは気付く。先程のような表情でなく、戦う時の真剣な顔つき。

アリスは少しだけ戸惑いながらじり・・・とゆっくり後退る。

ビショップは左手に握っていた錫杖を一音鳴らした。

今まで聞いたことのあるような静かで澄んだ音じゃなく、力強く大きな音。

空気が、震えた。

ビリビリとアリスの肌にわずかな振動が伝わる。

クローバーは窓から差し込む光が反射した白刃はくじんを構え、

ビショップは光を受けた金に輝く錫杖を左手に純白の式紙を右手に構えた。

「アリス、行かれよ」

アリスは駆け出す。だがその途中、そつと後ろを振り返った。
戦^{いくさ}が、始まる。

40・武士の白刃と僧侶の錫杖 後編

く 武士の白刃と僧侶の錫杖2く

その空間には、音が無かった。

人の声や騒がしい足音はするはずだ。しかし騒がしいはずなのに、そこだけは音が無い。

「静かだな・・・」

クローバーは呟いた。自身の声しかない、その場所で。

「当たり前、と言ったところか。遮音結界しゃおんけつかいの式をさせてもらった。お前は騒がしいのは嫌いであろう？心遣い、感謝してほしいものだ」

そう言ったビショップに対し、クローバーはフツと笑った。そして次の瞬間、白刃が光る。その切っ先はビショップへ。だが・・・

「甘い」

ビショップの錫状によって、受け止められていた。否、受け止めるというより受け流す。

クローバーが打ち込めば打ち込むだけ、ビショップによって受け流され、衝撃が和やわらげられる。

「黒羽くろばね」

懐かしい名で呼ばれ、クローバーは顔をしかめた。

「何だ・・・毘沙門^{びしゃもん}」

クローバーは毘沙門と呼ぶのをためらうように間を空ける。

その名はクローバーとビショップの本名だ。誇称の国に2人がいたときの、本名。

クローバーは黒羽。ビショップは毘沙門。クローバーとビショップとは、海を渡り、他国に来たときについた^{あらな}字。

「腕を上げたようではあるが、まだ発展途上・・・覚えているか？ 誇称の国にいたとき、お前は一度だって拙僧には勝てなかった」

それがどうした、と言わんばかりにクローバーは打ち込む速さを変える。

もっともっと速く、一縷^{いちろう}の隙も無くす。

「ほう」と、ビショップは感嘆し、クローバーが有利になったと思われた、が。

「ぐっ・・・!!」

ビショップは容赦無く、クローバーの腹に錫状を叩き込む。

クローバーは刀だけは決して手放さず、壁に叩きつけられた。

「確かに凄い。しかしながら、お前は拙僧に勝てん」

「な、んだと？」

クローバーは腹を押さえ、苦しそうによろよると立ち上がった。ビショップは見下すかの如く、言い放つ。

「黒羽、師匠が言っていたであろう。お前は剛。拙僧は柔。これが何を意味するか、分からぬか？」

「・・・・・・・・」

クローバーは何も言わない。無表情に、口を開こうとはしない。

「剛は柔より劣^{おと}っていると。例えば、岩と粘土。

高き場所から岩を落とせば、岩は砕け散る。対照に粘土は落としても砕けることは決して無い」

淡々とそう告げる。クローバーが勝つことは無いと思われた。しかし、やがてクローバーは口元に笑みを浮かべる。

「何を笑っておられる？」

「そんなもの、決まっている。確かに柔は剛に対して負けることは無かるう。

だがな、粘土では相手に傷をつけることは不可だ。柔は、剛に勝つことはできぬ」

口角をあげて、クローバーはビショップを見る。

毘沙門は腕組みをして、黒羽を見返した。

40・武士の白刃と僧侶の錫杖 後編（後書き）

今回見事にアリス登場してませんね。ごめんなさい。
ちなみについに40話突破しました！！早いものです。
また機会があれば小話書かせていただきます。

41・メイドの口調とアリスの確答

「メイドの口調とアリスの確答」

逃げながら、アリスは考えていた。

本当に、それでいいの？

自分だけ、自分1人だけが逃げていいのか。

何故ならこの騒ぎを起こす原因になったのは自分。なのに、当事者が逃げるだなんて卑怯だ。

それに今アリスが逃げたとしてもまたキングは同じ事をするかもしれない。

そうだったら同じことの繰り返し。終わり無きループ。まるでメビウスの輪みたいだ。

アリスは考えをまとめると、足を止めた。そして逆方向へ走り出す。逃げさせてくれたビショップとクローバーには悪いけれど、ここで決着をつけておかないと駄目になる。

反響の国も、黄昏の国も、そして自分たちも。

とりあえず、アリスは自分専用の部屋と言われていた場所に行くことにした。

何ができるかなんて分からない。部屋に行って、何をするかも分からない。

ただ、最初この国に来たとき初めて居た場所が、また何かの始まりである気がしてならなかったのだ。

人々の流れに逆らい、走る。しかしその途中。

「アリス!!」

誰かにそう呼び止められた。そろりとアリスは声の方へ振り返る。するとそこにいたのはメイドのリデルだった。

リデルはつかつかと歩みより、アリスに詰め寄る。

「アリス！何してるの！？早く避難しないと！」

「え、あの、え？リ、リデル・・・その・・・敬語はどうしたの？」

アリスは何よりリデルの喋り方に驚いていた。前までならきつと『アリスさま！何しているのですか！？早く避難してください！』と言っただろうに。なぜ、今は違うのか。

「そんなことはどうでもいいわ。あれはいわゆる猫かぶり状態なだけ。それで？何故避難しないの？」

「何故って・・・」

何故残りたいのか。改めて他人^{ひと}からぶつけられた疑問。

アリスは静かに目を瞑^{つむ}る。

助けられてからほんの一ヶ月しか時は経っていない。しかし、色々なことがあった。

そんな中で何度も迷い、何度もどっちつかずに思った。けれど、もう。

「もう、迷いは無いわ」

ずっと目を開き、リデルの瞳をしっかりと見つめる。

真剣に、意思のある目で。アリスの心には、もう霽もやは無かった。澄んだ、強い意志のある、瞳。

「全て、私が起こしたことよ。決着を着けるべきだから、私は、逃げるわけにはいかないわ」

それを聞くと、リデルは優しげに微笑んだ。

（あれ？）

アリスは首を傾げる。リデルの微笑した顔が、誰かに似ていた。リデルの顔、ではなく、どこかで見たことのある表情。

「そう言ってくれて良かったわ。アリス、着いてきて。アリスの部屋へ行きましょう。」

私、あなたに言わないといけないことがあるの。誰にも聞かれないし」

アリスは先ほどのリデルの顔に疑問を覚えつつも大人しくリデルについて行った。

「あの、どうして敬語止めたの？」

何となくアリスは聞いてみた。するとリデルは「あー・・・」と言葉を紡ぐ。

「切羽詰った状態だったから。本当は最後まであの喋り方を貫こうと思ったのだけれど・・・」

「最後・・・？最後って、何？」

アリスは少し、不安に駆られた。

リデルの言った最後。それは何を意味する？

この騒ぎが終わる時がくるまで、という意味だろうか。
リデルはというと否定するかのように頭かぶりを振る。

「何でもないわ。それより、ほらはや・・・！？」

不意に、リデルは言葉を途切れさせた。

アリスは頭にクエスチョンマークを浮かべるが、すぐにその理由が分かった。

殺気。それも禍禍まがまがしいほどの。

「避けて！！」

アリスは直感的に、そう叫んでいた。

41・メイドの口調とアリスの確答（後書き）

どうでもいいですが、最近は修正週間です。

最初のころの話が物凄く見るも恥ずかしいほどの書き方で、おまけに誤字脱字、余計な空白などが多いにありましたので修正しています。

話自体は変わっていないので安心してください。

ちなみにキャラクター（一部除く）の年齢も少し上がりました。あとがき登場人物紹介に修正年齢が書きかえられています。

42・赤い戦慄と窮地の助け

「赤い戦慄と窮地の助け」

リデルは転がりつつも何とか刃物をかわし、すぐに立ち上がる。状況を判断しようと視線を辺りにめぐらせた。すると、そこには剣をかまえた兵士がいた。

「なっ……どうして……」

何故たかだかメイドに襲いかかるのか。アリスもリデルも驚きに駆られていた。

「……」

兵士は無言で、2人に向かい剣を振り下ろした。

「っ!!」

危ない。けれど兵士はたった1人。これくらいなら振り切れる。

「アリス！走って!!」

リデルは後ろに、アリスのいる方へ叫ぶ。だが、返事はない。リデルは不思議に思い、そつと後ろへ振り返った。

「アリスっ!？」

激しい糾弾^{きゆうたん}。刃が風を切る音。戦慄^{せんりつ}が、はしる。

何とか、アリスは剣を避けていた。でも、駄目だ。

前の兵士の剣は避けたがアリスの後ろ。剣をかまえた兵士がきた。

アリスは目の前の兵士にいつぱいで、それに気付いていない。

たとえ気付いたとしても、今からでは避けれない。

マズい。リデルは本能的に、そう感じていた。

「アリスっ！！危ない！！！！」

「え？」

肉を切るような音が、やけに生々しくリアルに聴こえた。

赤い。目の前が、リデルの目の前が赤く染まる。

自分が。^{アリス}自分が、紅い。アリス「リデルから、血が流れる。

剣が、確実に、リデルの胸を貫いた。アリスを^{かば}庇って。口からも血があふれ出す。

赤、紅、朱、あか、朱、赤、あか、紅。あかい、わたし。

アリスは目を見開き、リデルを見た。

「リデル・・・？リデルっ！！」

ガシャガシャと金属のぶつかり合う音がした。

それは兵士の鎧の音。兵士が集ってきているのが、言わずとも解かる。

どんなに解かりたくなくとも、どんなに信じたくなくとも、それが事実である限り、真実だ。

「あつ・・・」

目の前の兵士が、剣を振り下ろした。

アリスは血まみれのリデルを抱きしめ、目を瞑^{つぶ}った。齒を食いしばつて。

このまま、2人とも、死を迎えてしまうのか。

死ぬのは嫌だ。まだ、何もしていないのに。アリスがそう思ったときのことだ。

突如、アリスの近くで鈍い音がした。アリスは困惑しつつ目をゆつくりと開ける。

そこにいたのはこぶしを握りしめたダイヤ。

アリスに切りかかるうとしていた兵士は、ダイヤによって吹っ飛ばされていた。

フウと息をつき、ダイヤがアリスに振り向く。

「まったく・・・女のコに手をあげるなんて、どんな教育されとんねん。

アリスちゃん、大丈夫やった？そっちの子は・・・どっからどう見ても平気そうやない・・・な」

ダイヤはリデルを見て顔を歪^{ゆが}めた。

「アリス！」

その声に反応し、アリスは声がした方を見る。

それは、アリスが思ったとおりの人物・・・ハンプティータ。

「ザンネンだけどお、感動の再会ってワケにはいかないみたいだねエ」

「チエシャ猫！無事、だったの・・・」

チエシャ猫はそのアリスの安心したような様子に
ペロリと舌をだし、指と指の間に小刀を2、3本かまえた。

兵士を殴り飛ばしながら、ダイヤはアリスの目をしっかりと見る。
それから

「早く、そのメイドちゃん、手当てしたり！ここは俺らに任し
て」

「そうだアリス！早く行って！僕らを信じてくれ」

「後で十分にハグしてくれてかまわないからねえ」

そう、そろそろと沸いでた兵士と応戦しながら3人が言う。
アリスはためらいがちに、リデルを背負う。

「みんな・・・ありがとう。また後で！」

その言葉に、ひっそりと生きて会おうという言葉をしるばせ、ア
リスは目的地の部屋へ向かった。

リデルが、アリスの背でうつすらと目を開け、視線を強くしたこと
を知ることは無く。

43・消えた記憶と曇天の空

「消えた記憶と曇天の空」

アリスは部屋につくと、リデルをベッドの上に寝かせようとした。しかし、突然、リデルがアリスの腕を掴む。

「なっ・・・」

強く引っ張られ、アリスはバランスを崩す。すると、リデルの顔が目前まで迫った。

「リ、デル？」

何が、起こったのか。あんなに流れていたリデルの血が止まっている。

というよりむしろ、拭き取られたかのように血と傷が綺麗さっぱり消えていた。

「な、にが・・・起こって・・・？」

「アリス」

リデルはアリスの名を呼び、まっすぐ真剣にアリスを見た。

「今から、話すこと。信じられないかもしれないけど、聞いてほしいの」

空の色をした蒼い瞳が、ただ、アリスの目を見つめる。

なんて、綺麗な色、なのだろう。

まるで、サファイアの宝石みたいだ。

アリスはリデルの目の色に見とられながら、コクリと頷いた。

「まず・・・私の血がどうして流れてないかは・・・どう言ったらいいのか・・・」

リデルは、アリスが混乱してしまわないように、気を使ってくれているようだった。

「リデル。そんなに気を使ってくれなくても平気よ。

例え、その話が理解できなくても本当のことだと信じるから」

「そう、ありがとう。じゃあ言うわね。

私は、人じゃないの」

アリスはその言葉に驚き、というより驚愕を隠せなかった。

リデルは人じゃない。人間ではない。獣人でもない。だったら、何？

「だから血も流れない。さっき斬られたときの血は他人から人ではないと悟られるのが嫌だったから、

ちよつと細工したの。あなた以外から、私のことを知られるのは避けたかった」

ごめんなさい。と謝られる。

今も兵士と戦っているダイヤと、ハンプティー、チェシャ猫に対するリデルの懺悔したい気持ちがあつきりと伝わってきて、アリスは思わず顔をそらした。

「でも、リデルはどうしてそのことを私だけに教えてくれるの？
それに、人じゃないとしたら・・・あなたは、何なの？」

そう聞くとリデルは目を伏せ、静かに話し始めた。

「・・・黄昏の国に1人の女武官がいたわ。その武官は交渉のために、反響の国へ使者として行った。

するとその国の皇帝に見初められ、求婚されたの。その武官は、祖国のため、承諾した」

アリスはハツとしてリデルを見る。その話は、アリスが今まで聞かされた、自身の話だったからだ。
聞いたことのある、聞き覚えのある、1つの物語。

「そして結婚式当日。武官は、皇帝の姉に呼び出され、部屋に向かった。

その皇帝の姉は皇帝のことを心から愛していた。故に武官が憎くて憎くてたまらなかった。

なので自身の使える禁呪、相手に大きな害を与える黒魔術を使い、武官を殺そうとしたわ。

けれど、殺せば後々が面倒なことになる。だから、殺すまではしなかったものの、

黒魔術の中の忘却魔術で武官の記憶を奪い、そして皇帝の補佐官にある術を使わせ、

黄昏の国と厄介なことにならないように偽造工作させたの。それで」

「ねえ」

アリスはリデルの顔を見ずにそう言った。リデルのした話はあまりにも同じだった。

「皇帝の補佐官の使ったとある術って、まさか・・・式術？」

リデルは頷いた。これで、確信できる。

この話の、1人の女武官とは・・・

「その武官の名は、アリス＝リデルよ」

ゆつくりとアリスは目を閉じた。

リデルの言葉がすんなりと、心に染みるように入ってくる。アリス＝リデル。その名前が意味するもの。

「私は、黒魔術で分離した、アリスの記憶なの・・・」

薄々気付いてはいたものの、やはり驚き、目を見開いた。

「ジョーカー。この騒ぎを見てくれ」

マントを羽織ったスペードは、反響の国の城の前で目を細めた。大騒ぎになったその場所を見て、驚くことしかできない。

『ああ、凄いな。これはまあ、1000年前の世界大戦よりは当然劣るが、中々楽しそうだ』

1000年も前から生きていた異形の者^{ジョーカー}に対し、スペードは呆れたような表情をする。

この騒ぎも、楽しむようなものでもないというのに。

「ナイトメアが来てる可能性が高いな。・・・ジョーカー、ほうかつ包括してくれ」

『分かった』

ジョーカーはそう同意した。刹那、スペードの体を闇が覆う。おどろおどろしくスペードを取り巻く。

『だがスペード、気をつけろ』

「？」

『雨が、来るぞ』

ジョーカーは曇ってきた空を感じ、そう告げた。

これから起こる出来事の大きさを語るように、曇天の空は黒味を増していく。

スペード、否、ジョーカーは怯えるかのように空を見上げた。

44・1つの事実と多くの真実

「1つの事実と多くの真実」

真実は、多くある。そして事実はたった一つだけだ。

人の信じた事の数だけ真実はある。だが事実は実際に起こったこと・
・つまり1つだけ。

アリスは大勢の人間から「真実」を聞かされた。

でも、今は目の前のリデルから「事実」を聞かされている。

「私の、記憶?・・・それって・・・、」

アリスの言葉にリデルは頷きながら言う。

「アリスの記憶が凝り固まったもの。それが、私よ。」

だから目を閉じると、アリスの小さいころから体験していたこと
が甦るわ」

だから、トリデル言葉を紡ぐ。

「アリスは私で、私はアリスなの」

アリスがりデルの顔をどこかで見たことがあって当たり前だ。
なぜなら自分自身なのだから。

「でもそれだとおかしいわよ!」

「何で?」

声を荒げたアリスに対し、リデルは静かに問うた。
アリスも一度心を落ち着けてからリデルに答える。

「リデルが私の記憶というのはおかしいのよ……だって、帽子屋と戦ったときや兇手に襲われたときに
私の記憶、一部だけ戻ったの。リデルが記憶って言うんなら、その一部の記憶は何？」

「……それは、言い方を悪くすれば残り粕^{かす}ね。一部だけ記憶がアリスの身体に残ったのよ。
ほら、見て？現に私の方がアリスより少し幼いでしょう？それは所々の記憶が抜けているから」

これで説明は終わり、とりデルは言った。
アリスも他に聞きたい事も無いから黙る。

「じゃあ、アリス。あなたに私を……いえ、あなたの記憶を戻しましょう」

リデルがあまりに淡々というので、アリスは少し驚く。
アリスの記憶が戻る。すなわちリデルがアリスに戻ると言うこと。

でもそうなれば、リデルはどうなる？
リデルという存在は一体どうなる？

「消えるわ。全て。私と関わった全ての人の記憶から消滅する。だって、私は所詮、記憶だもの」

「え……！？そんな……のって……」

自嘲気味に笑うリデル。

アリスは、どうしてリデルがそんな風に自らを嘲るのが分からない。理解などできやしなかった。

「私は人じゃない。人から忘れられていく記憶よ」

確かに、人は記憶を忘れる。どんな形であれ、忘れさる。

人間は様々な記憶を持ち、どんどん新しい記憶を手に入れる。だから、当然忘れられていく記憶もある。

それは否めないのだ。

「でも、だからって、人の記憶からも消えるなんて、そんな。おかしいわ、そんなの」

人から忘れられ、存在がなかったことにされてしまう。

それが例え記憶であろうと、そんなこと悲しいじゃないか。あまりにも、つらすぎるじゃないか。

「だったら、私は今までの記憶はいらないし、リデルが人じゃなくてかまわないから。」

だから、お願い。存在が消えるなんてこと、止めて」

アリスはさすがのように懇願した。けれどリデルは頭を横に振る。

その顔には、慈愛に満ちた、優しい微笑みが浮かんでいた。

「ありがとう、アリス。でも、もういいのよ。あなたの記憶は大切だわ。1つ1つがかけがえのないもの。」

それをあなたから奪うなんて、私にはできない。大丈夫。私は消えるけれど、あなたは覚えておいて。

私が視たりデルとしての記憶はちゃんと残る。残って、アリスの以前の記憶と共にアリスに渡される。

私は死ぬわけじゃない。あなたが憶^{おぼ}えていてくれるなら」

アリスは小さく頷いて、言った。

「忘れないわ。決して」

それを聞いて、ふわりとリデルは微笑み、アリスに近付く。

リデルはアリスの頬に両手で触れ、顔を近づけた。

鼻先とおでこがぶつかり合う。アリスは静かにまぶたを閉じた。刹那にリデルから淡い光が発した。

記憶の、濁流。

一気に押し寄せて映像のように流れる記憶。

幼少期から現在まで。素早く、鮮明に。しっかりと、くっきり、はっきりと。

頭がパンクしそうで、でも頭はその記憶をちゃんと受け入れている。

リデルの姿がおぼろげに、霧のようにかすんだとき、アリスは確かに聞いたのだ。

「アリス、赤い箱を開けてみて」と。

たった独りきりになってしまったアリスは、言われた通り

部屋の片隅にポツンと置いてあった赤い箱に近付き、ふたを開ける。

そこには真新しいトンファーに、白い紙。水色のエプロンドレスに、右端にリボンのついたカチューシャ。

そして、アリスの目と同じ色、蒼い涙型のペンダントが納まっていた。

アリスはエプロンドレスの上に置いてある2つ折りにされた紙を開く。
そこに書いてあったのは、「ありがとう。ずっと友達よ」というわずか13字の文章だった。

知らず知らずのうち、アリスの瞳から涙が溢れていた。
そのとき、アリスは心の底から感じていた。

リデルが消えた、いや、最初から存在しなかった存在。だが違う。
リデルはアリスじゃない。アリスはリデルの記憶じゃない。
リデルという名のアリスの友達。リデルは生きていた。リデルは確かに在^いた。

アリスはすつと涙を拭^{ぬぐ}うと、髪をまとめていたゴムを外し上を見た。
その瞬間、アリスは『黄昏の国のアリス』となった。
リデルという記憶を身体に秘め、メイド服のリボンを外す。

もう、寂しくないよ。もう怖くなんかないよ。
だって独りじゃないから。リデルという友達が傍にいるから。

45・女剣士と猫嫌い

「女剣士と猫嫌い」

青い靴。白い靴下。水色のエプロンドレス。リボンのついた白いカチューシャ。蒼い涙型のペンダント。

カラーコンタクトを外し、メイクを落として武器を手を取ったなら、先の見えない黒い穴へ行こう。

その先に待つものは、善か悪か。

それは誰にも分からない。

アリスは走った。どうなるかなんて分からない。

だけど、ただ進むことしかできないのだ。

そう、クイーンを助けなければならない。

狂眼が、黒魔術が、彼女を完全に飲み込んでしまう前に。

であるから、今アリスが向かっているのはクイーンの部屋だ。

「早くしないと・・・」

ウロ覚えの記憶を頼りにクイーンの部屋へ向かう。

そんなアリスは記憶を思い出すのに必死でその気配に気付くことができなかった。

「アリス＝リデル」

アリスは急に誰かに名を呼ばれる。

ハッとその方向へ振り返れば、その人物は無表情に立っていた。

「ルーク……」

「どうも。私の部屋の前をうろついていたので驚いた。
確か貴方は『茨の牢獄』にいたはずなのに。貴方1人であそこから脱出するなんて不可能。

一体、誰が手引きしたのやら」

アリスは心の中で、1人の僧侶の姿を思い浮かべた。
知られてはまずいという気持ちで心を占める。

「まあ、そんなことはどうでもいい、か。私は足止めせねばいけないの。」

アリス「リデル。貴方をここから行かせはしない」

「なら、私が足止めしてあげますよ」

張り詰めた空気の中、突如、介入する第三者の声。

それは片眼鏡をかけ、白い時計を胸に下げた、猫嫌いの人物。

「ルークがアリスを足止めするというのなら、私がルークを足止めします」

もう一度、ゆつくりとこう言つて、時計兎はルークを見据えた。

ルークは「三月兎、か」と時計兎の通り名を呼び、同じように見据えるように相手を見る。

「できるの？私を足止めだなんて」

「できます。いえ、しなければなりません」

ルークが剣を構え、そして時計兎に向かって走る。

時計兎はギリギリまで相手を引き付けてからそれを避け、鞭を一瞬でアリスにまきつけるとそのままルークの背後へアリスを投げる。

「え、えっ・・・!？」

アリスはあまりに突然な出来事に焦るが、態勢を整え何とか上手く着地した。

だがやはり急に投げられたのにはいささか不満だ。

「時計兎！何するの!？」

そう訴えてみるが、時計兎はアリスの顔を見ず、ルークと対峙して言う。

「アリス、そのまま真っ直ぐ走ってください。すると聖堂につきます。」

そこの裏階段からクイーンの部屋の近くまで行けますから」

「っ・・・!分かった。ありがと、時計兎!」

アリスはタツと走り出す。ルークもアリスを追おうとしたが、剣を持つルークの右手に鞭が絡みつき、動きを止めた。

先程、時計兎はルークの攻撃をギリギリで避けた。

と、思われていたが、僅かに刃が時計兎の頬をかすめていた。

時計兎は左手で血を拭くと、そのまま舐める。

親指に付いた血を、ペロリ、と。

「足止め、と言ったでしょう？行かせません」

「・・・なら、貴公を倒して行くまで」

巻きつかれた鞭をとると、ルークはキツと時計兎を睨みつける。
時計兎は相手の女剣士に向かい、感情を出さずに告げた。

「安心してください。僕は、女性といえども手加減しません。
いいえ、手加減はしますが、アリス以外は女性と見れないもので。
アリス以外はメスネコにしか見えないんです」

「安心できる要素が1つも無いけれど。それに、何故メスネコ？」
そう問うと、時計兎はにっこりと笑って

「私の一番嫌いな動物は、ネコですから」

と答えた。

45・女剣士と猫嫌い（後書き）

最近は戦闘シーンが続くので、苦心です。
戦闘シーンってどうやったらず上手く書けるのじゃないかな・・・

46・同属嫌悪と火の道化者

「同属嫌悪と火の道化者」
ビエロ

カツン、と靴音が響く。

誰一人としていない、聖堂で。反響の国の城にあるこの聖堂は、あまりに静かだたまらない。

まるで、別世界のような。

「着いた・・・けど、裏の階段ってどこ？」

そろりと辺りを散策する

周りが静かだと思わず自分も静かになってしまふ。

少し薄暗い聖堂で、ステンドグラスがただ1つ目立っている。

そのステンドグラスのそばには扉があり、アリスはそこに向かい、階段を探そうと思っていた。

けれど、その刹那。

ガッシャンと音がし、何かがステンドグラスを突き破って転がり込んできた。

アリスは咄嗟とっさにトンファーを構えるが、入ってきたのが帽子屋だと分かるとトンファーをおろす。

その帽子屋は傷だらけだった。何があったというのだろう。

「帽子屋！何があったの？大丈夫！？」

アリスがそう呼びかけると、帽子屋は平気だという意味を込めて頭を縦にふった。

ジャリ、と割れたガラスの破片を踏みつつ、誰かが割ったステンド

グラスをくぐって入ってきた。

「ナイト・・・！」

ナイトは剣を構え、殺気を放ってアリスたちに近付く。
ナイトも帽子屋同様、体のいたる所に傷を負っており、帽子屋と交戦していただろうことがすぐに分かった。

「反響の国の城で、キングの膝元でこんな騒ぎを起こしたナイトメア。」

それは排除せねばならない・・・覚悟しろ」

こうナイトは静かに告げた。帽子屋も大剣を構え、立ち上がる。
アリスは困惑しながらも2人を見る。どうしたら良いのだろう。

「俺も負けるわけにはいかないんだ」

帽子屋と、ナイトが激しくぶつかり合う。
キンツと、刀のぶつかり合う音が聖堂に響いた。
アリスは呆然とその成り行きを見守ることしかできない。

「っ！！？」

突如アリスは禍々しいものを感じた。頭で考えるより早く体が横に動く。

さっきまでアリスが立っていた場所に剣が下ろされていた。
そこには兵士^{ボーン}がいた。操られし兵士。
兵士はアリスに剣を向け、襲い掛かった。
それを見たナイトは交戦中にも関わらず叫ぶ。

「止めるポーン！！騎士の風上にも置けない！
お前たちの主はクイーンでなくキングだろう！気をしっかり持て
！」

直属の上司に怒鳴られ、一瞬兵士は気が戻ったのかピタリと動きが止まる。

しかし、またすぐにアリスに剣を振る。

ナイトはハツとして、帽子屋を振り切りアリスを助けようと駆けようとする。

「待て、戦闘中にどこに行く気だ？」

けれど、帽子屋がナイトの肩を掴み、そう言った。
ナイトは少し煩わしげに帽子屋に振り返る。

「どこへ行く？そんなの分かりきっている。アリス＝リデルの所だ。
俺の部下を止める。」

イカレ帽子屋、貴様は助けないのか？とんだ人間だな。同じ国の人間だというのに」

「いや、俺はアリスを見捨てる訳じゃあない。ただ、俺が手出ししなくともアリスは自分で何とかする。」

武官を、舐めてもらっちゃ困る。俺は、アリスを信頼してるんだ」

そう言い切った帽子屋とは対称的に、ナイトは眉間にシワを寄せた。
この男と自分は合わない。そう感じたのだ。

アリスがトンファーで兵士を倒すのを見て、ナイトは軽く鼻を鳴らす。

波長が合わないのだと、悟った。

そのとき突然バンツと音がして聖堂の扉が開いた。
そう思うより早く、アリスと戦っていた兵士が倒れた。一瞬の出来事。

血が、跳んだ。

「ポッポーン！何が・・・まさか、アリス・・・な訳はないか」

ナイトはアリスを見てから呟く。

アリスはダガーという刃物を持つてはいるが使っていないことは明らかだった。

だと、したら。この兵士を攻撃したのは、ダレ？

「誰だ」

帽子屋が低く問う。

その疑問を投げかけられた人物は、この場に不自然なほど馴染んでいて、気配も薄い。

まるで、最初からいたかのようにだった。

全身をくすんだ黒いマントで覆った人物は、兵士たちの血がついた鎌を下ろすと、マントのフードを上げた。

警戒して、アリス、帽子屋、ナイトはそれぞれの武器を構える。

「道化者、ジョーカーだ」

ジョーカーと名乗った人物は、黒かった。

マントもそうだが、髪も目も全て漆黒の色だ。

その黒真珠のような瞳はアリスを見る。

「安心しろ。用があるのはアリスのみだから」

そう言つて、その男はアリスに近付く。アリスは何故か逃げない。怖いとも、恐ろしいとも感じず、ただ、黒い髪と目に意識は惹かれていた。

それからアリスの手を掴むと、ジョーカーは聖堂から出て行く。アリスはされるがまま、ジョーカーに引きずられるようにして、ジョーカーと共に出ていった。

「アリス・・・！」

帽子屋がジョーカーをおいかけようとするが、それをナイトが阻んだ。

「戦闘中にどこへ行く？」

先ほど、帽子屋の言った台詞をそのまま言い返すナイト。帽子屋はフウ、と息を吐いた。

「負けん気、強いんだな」

「褒め言葉として受け取っておくぞ、イカレ帽子屋」

ジョーカー。帽子屋はどうしてか、ジョーカーがアリスに危害は加えないと心のどこかで確信していた。

それは何でだろうと考えつつ、帽子屋は、大剣を構えた。

46・同属嫌悪と火の道化者（後書き）

ひさびっさの更新すいませーっん・・・
アリスの下書きノート二冊目突破しそうです。
このペースで行くと50話行きますよ（汗）
ナンテコッタイ。

小話2 good night（注意！）（前書き）

この話は、アリスキャラを使った遊びのようなもので
本編とは何一つ関係ありません。
そしてこれは「死ネタ」です。

以上が苦手な方は戻ってください。

OKな方どうぞ。

ちなみにルークさんとナイトが登場します。

小話2 good night（注意！）

- good night -

自分自身ではいつも通り歩いているつもりだけど
身体がフラフラしてちゃんと歩けない。

歩いても歩いても辿りつけないもどかしさに苛々するけど、
やっとの思いで目的地に着いて、ノックもせずに扉を開いた。

そこは、幼馴染であるナイトの家。

ナイトは家族から離れて、一人森の近くに住んでいる。

いきなり開いた扉、そして入り口に突っ立っている私を見て、ナイ
トは翡翠色の目を少しだけ見開いた。

「絨毯の上、血が染み込んだら落としにくい。だから外で話そう」

ナイトは一目見ただけで何か事情を察したらしい。

さっきは絨毯に落ちた血は落としにくいとか言ってたくせに、
今は自分の服に血がつくのもかまわず、よろよろと歩く私の肩を抱
き、外まで連れてってくれた。

そして、無造作に並べられた丸太の上に私を座らせる。

改めて心を落ち着かせると、鼻をつく鉄の臭いがした。

毎日着ている近衛の制服が、見るのも嫌になるくらい血で濡れてい
る。

この血は、返り血と自分の血の両方。
正直、意識が飛びそうなくらいの痛みにも慣れてきた。

私はこんな致命傷を負ったことが無かったから、
痛みには免疫がついてると思ってたけど、そんなことは無いと思い
知らされた。

本当の痛みは、頭がくらくらする。
そして、痛いはずなのに、思考だけはやけにクリアになるとい
うこ
とも

今日、初めて知った。

「で？」

ナイトがそう聞いてくる。

私は仕事でへました、とだけ答えた。

確かに私とナイトは恋人同士、という関係にはある。
ただどなんで、どうして氣力を振り絞っても来たのだろうか。
自分自身、尋ねたい。

「この傷のせいで死ぬなあって思ったから、クイーン様に許し貰っ
てここに来た」

クイーン様は手当てしようとい度も言っただけで私は首を振った。
どうせ手当てしても助からない。
だったら、最期に自分のしたいようにしたかった。

近衛になってから、私の死に場所はクイーン様のお傍だとずっと信
じていた。
だけど、実際はこうしてナイトの傍にいる。

自然に動いた足は、私をここへ導いた。

「何で、無理してまで俺のところなんだ？」

「わかんない」

視線を落とすと、未だお腹の血が止まっていけないのが見えた。けど、目が霞んで、視界がぼやける。

息をするのも疲れてきて、もうそろそろかな、なんて思う。

「でも、死に直面したとき、真っ先に思い浮かんだのがナイトのことだったから」

「そうか」

「うん」

どうして、ここに来てしまったのだろう。

どうして、この男を思い出したのだろう。

どうして、クイーン様の傍で死を迎えなかったのだろう。

どうして、この男と出逢ってしまったのだろう。

出逢わなければ、こんなにも胸がいたくなる、なんてことなかったのに。

でも、出逢っていなかったら、こんなに穏やかな気持ちで死を迎えることなんてなかった。

あんなに毎日が、飴玉みたいにきらきらと光ることもなかった。

なんて、乙女チックなことを考えてみる。

わたしは男勝りだったから、町娘の子たちみたいにおしゃれも人形遊びもしなかった。

だから、最期くらい女の子っぽいこと、考えても良いよね。

騎士である以上、どこでも死ぬ覚悟はできていた。

だけど、その覚悟を鈍らせたのはナイトなんだよ。

「ね、ナイト」

そう呼びかけると、ナイトは視線だけこっちに向けてくる。

そんな全く持つて意味ももたない、何気ないことも全て愛しいと思える私は、

どうやら自分で思っていた以上に目の前の男に惚れてるらしい。

「私の世界は、ナイト中心にまわってた。

一日だって会えなかったら、つらかったよ」

「.....」

ナイトは何も言わない。黙りこくってるだけ。

それでも私は言葉を紡ぐ。

自分でも信じられないくらい、言葉がスラスラとでる。

だって、最期くらい素直になりたいから。

「今、私が死んでも」

ああ、駄目だ。

「ずっと好きで」

目の前の景色が霞んで、頭が白い霧みたいなのに覆い尽くされている。

「いて、くれる？」

最後のそれは、言葉になっていたんだろうか。

私が倒れる間際に見たものは、
青い空と白い雲、視界の端に捕らえた緑の木々、
そして、目を伏せたナイトの姿。

これが、私の最期なんだ。

痛みがなくなったら普通は元気になって体力も回復していくのに、
今はお腹の痛みがなくなった途端、力を奪われたみたいにこうして
倒れてしまった。
でも、痛みはもうない。
ただ、もっと生きたかったなあ、という胸の痛みだけではなくならな
かったけど。

「ルーク」

私が、温かくて優しい白い霧に包ま^{くる}れているときに、ナイトが私の
名前を呼んでくれた。

あまりの心地よさに、目からあったかい涙が零れ落ちる。

「good night」

その声に誘^{いざな}われるように、私は目を閉じた。

ナイト、この世界の誰よりも貴方が好き。
前は中々素直になれなくてごめんなさい。

確か私の初めてのキスを奪ったのも、ナイトだっけ？
あまりに突然で、まだ幼馴染だと思ってたときにされたから、はつきりとは憶えてないや。

そういえば、一度も私からキスしたことって無かったよね。
だって恥ずかしかったから、できなかったんだよ。

ねえ、ナイト。ゆっくりでいいから、迷わずちゃんとこっちに来てね。

そしたら、私からキスしてあげる、から。

だから、悪いけど、あなたよりちょっと早く、

おやすみ、なさい。

小話2 good night（注意！）（後書き）

最後に近づくにつれて、

ルークの一人語りも乙女っぽくなる感じを

味わってほしくて書いてみました。

いわば習作です。

これが40話記念と言ったら、怒られる気がします。

47・黒魔術と女皇の本心

「黒魔術と女皇の本心」

「あなた、何者？」

アリスはジョーカーに尋ねる。だが、ジョーカーは無言で走る。さつきからこんな調子だ。

「どこへ連れて行くつもりなの？」

「・・・・・・・・」

何がしたいのか分からない。

流石にアリスも焦りを感じ、手を振り解こうとした。

でも、ジョーカーは手を放そうとはしてくれない。

この華奢な手のどこにそんな力があるのだろう。

「あの、ジョーカーさ、^{かしま}姦しいな。俺はお前を黄昏の国に送り返すだけだ。少し黙っていてくれ」

その言葉にムツとして、アリスは目の前の男を睨む。

姦しい、黙っている？それだけじゃない。黄昏の国に連れてかれる、なんて。冗談じゃない。

アリスはここでせねばならないことがある。

「離して！私はここでしなきゃならないことがあるの」

「そうかもしれないが、戻れ」

アリスはその言葉に焦燥し。逃げようとした。
その時だ。

「っ！アリス！！リデル！！逃げろ。この先は、拙い。後ろに走れ」

そうジョーカーに言われた。

でも、こんな奴に言うことなんて信用できない。
会ったばかりなのに。

「早く逃げろ！」

声を荒げるジョーカーにアリスは反抗する。

「貴方は人に指図してばかりじゃない。

さつき会ったような人間、そこまで信用できるとても？」

「そんなこと言ってる場合じゃない。さもないと・・・」

「さもないと、どうなる？」

突然現れた声。

嫌な予感が体中を駆け巡る。

アリスは汗を流しながら、ゆっくりと振り返った。

紅く彩られた唇。長い睫毛。白いドレスを着こなした、その人物。

「アリス」

名を呼ばただけで、こんなに嫌な汗が流れたのは初めてだ。

アリスは横にいるジョーカーを盗み見すると、苦虫を噛んだかのような表情をしていた。

ジョーカーは本当にアリスのことを助けようとして、逃げろと言った。

だが、アリスにとって逃げなくて正解だったのかもしれない。

アリスは今、目の前にいるこの人物の元に行こうとしていたのだから。

「良くも、まあ。あの牢獄から逃げ果せれたものだ」

にこり。と笑んでいる。だが、それは怖い。

つうつと汗が伝った。

会わなければ、と思っていたのに実際会うと恐ろしい。けれど、アリスはちゃんとクイーンの双眸を見つめた。本質を、見極めるように。

「クイーン……兵士を動かしたのは、貴方？」

内心確信を持ちつつも、アリスはクイーンに問うた。

クイーンは悪びれる様子なく、右手をひらひらと振った。

「そうだ。まあ、あまり役には立たなかったようだがな」

言い捨てるような物言いに、アリスは沸々と怒りが沸いてくるのを抑え切れなかった。

「何言ってるのよクイーン！……自分の都合で人を操っている

とても思っているの？

人を操って何かあったときの責任なんてあなたにとれるの？

クイーンのはてることは、人の命を弄ぶってことなのに・・・分かってるの！？」

人のイノチを弄ぶ。アリスは何より心を痛めた。

国のトップにたつものは、人の命を手のひらに乗せているのと同様だ。

自分の命一つで、生命を投げ出す人もいる。

アリスだって、国を護るためならばそうする。

けれどそれを望まない人間を無理やり操って命を投げ出させるなんていけないことだ。

それを分かっていながらすることは、もっとタチが悪い。

だが、クイーンはアリスに対し、くっつく元^{もと}に弧を描く。

「何を馬鹿な・・・私は女皇^{クイーン}だ。民草など、私のために命を投げ出して当然」

アリスは愕然とする。

込み上げる怒りで心がいつぱいになる。

「そんなことつ「アリス下がれ！」

アリスはクイーンに向かって足を進めようとする。

だが、それはかなわずジョーカーに引っ張られた。

アリスをかばうように抱きしめるジョーカーの背中越しに、アリス

は見た。

クイーンの手から赤と黒の混じった色をした炎が発しているのを。
黒い靄もやがクイーンの周りを囲うようにして渦巻いていた。

これが、黒魔術。

近寄っただけで足が竦みそうになる。

炎で熱いはずなのに背中では凍るように冷たい。

冷気が、アリスのすぐ横を通り過ぎた。

アリスは目を見開いて、その炎を凝視する。 動けない。

「アリスっ」

ジョーカーが苦しそうに呻いた。

炎による外傷はないようだが、炎とともに吐き出すようにでたあの黒い靄に苦しんでいる。

靄に包まれながら、アリスは思う。

この靄は、クイーンの苦しみ、痛み、怒り、妬み、憎しみ。
そして身を引き裂かれるほどの悲しみ。

助けて。

この、救いを求める声、は。

「クイーン、の……本心……」

朦朧とする意識の中。

ジョーカーは意識を失ったアリスを横抱きにしながら、何とか靄か

ら抜け出す。

そして、気付いた。

アリスの頬に伝う、一筋の涙に。

48・黒い瞳と真紅の双眸

「黒い瞳と真紅の双眸」

ジョーカーは自分の腕の中にいるアリスを見て、ため息をつく。

信じてもらえなかったのは仕方ない。

自分でさえ、自分のことを怪しいと思う。

ただ、黒魔術の影響を受けているのは気になる。

自分も、あの黒魔術を避けようと思えば避けれたはずなのに。

ジョーカーはそつと目を伏せる。

そして、先ほどの状況を思い出していた。

スピードがああ炎を避けたがらなかった。

アリスを炎から守ろうとした。自分の身を呈^{てい}してまで。

これが人間の自己犠牲と愛情か。

そう思い、息をつく。

クイーンはまたすぐ自分たちを見つけ出すだろう。

見つかるより前に逃げなければ。

今はただ、外に逃げることを考えて、アリスを起こさないように走る。

ジョーカーは雨が降っている外を見て、眉をしかめた。

ザアアア・・・という雨の音で、アリスは目を覚ました。

やけに近くで聞こえる雨音と、湿った土や、木々の匂いがした。ゆっくりと目を開けると、そこには自分を見る黒い目がある。

「っ！ジョーカー？クイーンはっ・・・」

辺りを見渡すと、そこは城内の庭園。

今はどうやら木の下で雨宿りをしているらしい。

「クイーンからは逃げてきた。全く・・・だから逃げると言ったのに。」

黒魔術は普通は一度捕らえられたら逃げられない。使う方も、使われる方も。だから、厄介なんだ」

どこか棘々しさのある口調。

しかしよく見たら、アリスには寒さを考慮してか、ジョーカーのマントが被せられていた。

「でも、私は・・・」

「でも、何だ？止めるつもりか？クイーンを。馬鹿らしいことは止めて、深窓の姫でもしておけ」

「何で、そういうこと、言うの？私はクイーンを止めたい。」

だってさっき、クイーンの本心が聞こえた。助けてって・・・」

その言葉にジョーカーは目を剥く。

黒魔術の使用者の本心が聞こえるなんて、ない。ただの人間にはあり得ない。

けれど、アリスはただの人間。だとしたら。

そこまで考えてから、アリスの胸元の蒼いペンダントに初めて気付く。

あれは、とジョーカーはアリスの記憶が無かったことを思い出した。そうしたことだったのかと。

そんなジョーカーの心境を知ってか知らずか、アリスは口を開く。

「私の道は、私が決める。今までみたいに、色んな真実に振り回されたりしない。

ちゃんと事実を知った上で、自分自身で道を切り開く。どんなに困難な道でも諦めたりしない。

だから、だから私は、助けてと願ったクイーンを止めたい、いえ、救いたい」

アリスは立ち上がると、ジョーカーにマントを返す。

ジョーカーはマントを羽織るところ言った。

「・・・誰にも、頼らないつもりか？」

「そう、かもしれない。今まで散々迷惑をかけてきたし、これ以上迷惑をかけたくない。

個人の勝手な願いで振り回していいようなものじゃないと思うものの」

「今更」と、ジョーカーは呟く。

そして、何か吹っ切れたかのように、マントを羽織っていた手を止める。

それどころか、マントを脱ぎ捨てた。

ジョーカーは木に掛けておいた鎌の刃の部分を眺め、なぞりながら言った。

「アリス・・・俺は構わないが、せめて、“こいつ”だけは、信じてくれないか」

「え？こいつ？」

こいつというのが何を指しているのか分からず、アリスは反復する。

するとジョーカーは、自身の胸ポケットから1つの指輪を出した。
ガラスのような透明な宝石のついた指輪。

指輪を左手の中指にはめると、指輪を擦るように右手で触れる。

「何を・・・？」

「まあ、良いから、黙って見ている」

ジョーカーはそう言うのと、木の下から出て、雨を全身に浴びた。
その瞬間、アリスは瞠目した。
何故なら、変わっていたから。

「スパー、ド？」

黒い髪は金の髪へ。黒い眼は真紅の眼へ。指輪のガラスの宝石は、
紅い宝石へ。

染まるように色が変わっていく。

スパーードは悲しげな瞳で、アリスを見つめた。

「アリス・・・」

切なげに、かすれた声が發せられた。

「ど、どうして・・・？」

「アリス」

驚くアリスに、またスペードはアリスの名を呼んだ。
その声色に、アリスはそつと身体を震わせる。

「僕じゃ、駄目なのかな・・・？」

悲しそうに、消えそうな声で言葉を發す。

「僕は、アリスを助きたい。アリスに頼って欲しい。アリス・・・
僕じゃ、駄目？」

アリスは戸惑って何も言えない。

答えようとしても、何を答えていいか、分からない。

「・・・好きだよ、アリス」

「!？」

「僕は皆に『王』だから、守ってもらってる。助けてもらってる。
だからそれと同じで、僕も、皆を助けたいんだ。

僕は、好きだよ。黄昏の国も、皆も、それにアリスも。

それら全て、僕の手で守りたい。全て、守れるなんて思っていないよ。

だけど、今までみたいに、最初から何もせず諦めることは、もう、
絶対したくない」

スピードは、天を見上げる。雨が降って、しばらくは止みそうになかった。

小話3 恋の病に薬なし（バレンタイン記念）

バレンタイン。

日頃つつましく想いを秘めた女性が愛をこめて想い人にお菓子をささげる日。

とはいえそれは誇称の国限定の行事であって、他の国では少し違うのだ。

黄昏の国も、誇称の国のバレンタインとは少し違う。

「と、誇称の国では男女はそういうふうな2月14日を過ごすものだ」

ただいま会議室にて、ナイトメアと王とその近衛と補佐の男性陣でお茶会が開かれていた。

そんな中「時に、」とクロバーが誇称の国でのバレンタインの話をしたのである。

そして今に至るわけだ。

「へえー、そうなんや。この国では、お菓子だけを贈るってワケじゃあないもんなあ」

ダイヤはクロバーの話聞いて、うんうんとうなずいた。

帽子屋の入れた紅茶と同じ色をしたソファに座り、腕組みをする。

「カードとか花束とかやな。誇称の国みたいに女の子からだけでもないやろ」

ダイヤはゆっくりと視線を後ろに動かした。

そこには先ほどダイヤが言ったように、花束やカード、綺麗に包装された箱が山積みになっている。

「いやあ、モテるねエスパーは」

チエシヤ猫は猫舌のため、紅茶を息で冷ましつつ呟いた。
山積みとなった贈り物はスパード宛てのものだ。

スパードはというと、その処理に困った様子でため息をつく。

ちなみに贈り物は全てクローバーやナイトメアたちにより安全確認をされ済みだ。

安全確認の仕事が終わった後、スパードがやって来て、いい紅茶の葉が手に入ったからとそのままお茶会が開催された。
毎年恒例の出来事だ。

「モテても、ね」

フウっとスパードは目を伏せる。
きっと今、彼の頭の中ではアリスのことが思いだされていることだろう。

「そんなこと言ったら罰が当たるぞ」

「でも、本当に欲しい人からじゃないと意味がないじゃないか。
僕だって貰いたくて貰ってるわけじゃないのだし」

その言葉に少し軽蔑したかのような視線がスパードに集まった。
スパードはしまった、と自分の発言を呪った。

「うつわー、サイテーやな」

「失礼すぎますね、スピード」

「女子おなこの気持ちも考えて欲しいものだな」

「スピードがそんな態度とるからア、アリスが女子じょしから嫌われるんだよお」

「可哀想だ、アリスも女性たちも」

一同に責め立てられ、スピードは言葉を詰まらせた。
ちよつとでも口を滑らせるところでいじられる。

噂が広がらないだけマシかもしれないが、それでも後悔の念はやまない。

「し、仕方ないじゃないか・・・そうだ、ハンプティーならこの気持ち分かってくれるだろ？」

唯一自分を責めなかったハンプティーに助けを求めると、ハンプティーは予想していなかったのか肩を揺らす。

「え、えーと」

「どう思っ？」

ハンプティーは、期待に満ちた顔で自分を見るスピードに耐えられず、

「うん、まあ・・・」と言葉を濁しつつ答えた。

しかし、確かに貰えるならアリスから貰いたいのは皆同じだ。

すると、突然コンコンと部屋に控えめなノックの音が響いた。
入ってきたのは、アリスとハートの2人。

「そろいもそろって景気の悪い顔しちゃって。何よ」

ハートは何かを大事そうに抱え室内に入ってくる。
アリスも何かを持っていた。

「アリス、どうしたんだ」

帽子屋の問いにアリスはふつと表情を和らげる。
それから手に持っていた何かを差し出す。

「これ、茶菓子にと思ってね」

皿に乗ったそれはチョコレートクッキーだった。

「これは・・・」

「クローバーから聞いたの。今日は女性から大切な人にお菓子を贈
るんでしょう？」

皆は・・・私にとって大切な人だからいいかな、なんて」

アリスの笑みに皆も顔を綻ばせてクッキーを食べた。
(・・・あまい)
サクツとしたクッキーはほどよく甘く美味しかった。

と、その時。

ハートが顔を真っ赤にさせながらハンプティーに、大事そうに抱え
ていた箱を突き出した。

「えっと？ハート、何かな？」

「こっこれ、作って余ったの！だからあげる！もったいないしっ」

あーあ、とアリスは呆れる。

あれほど予行練習と言ってアリスを巻き込んでまで、可愛らしくチョコを渡そうとしていたのに。

恥ずかしさからこのようなことを口走っている。

ハート自身もその発言を悔やんだように表情を歪ませる、が。

ハンプティは箱を開け、チョコをゆっくりと口に運ぶ。

「おいしいよ、ハート。チョコ、ありがとう」

ハートはその言葉にさらに真っ赤になり、照れを隠すかのようにアリスのクッキーをかじった。

微笑ましい、と思うと同時に、帽子屋はサラリとそれをやってのけるハンプティをある意味で尊敬した。

その気がないのに、そういうことができるなんて、と。

「あ、そういえば。アリス、これを」

クローバーが思い出したように声を上げる。

それから袖から白い箱を出して、蓋を開けた。

そこには、花をあしらった練りきりが入っていた。

「あら、貰っていいの？」

クローバーは無言で頷いたのを見て、アリスはひとつ練りきりをつまむ。

「わ、凄い可愛い。器用なのねクローバーって。食べるのが勿体無いわ」

「姉から教わったことがあってな。・・・この国では、バレンタインを男から送っても良いのだろう?」

アリスはその発言に驚きつつ、ゆっくりと微笑んだ。それから、あ、と声を上げる。

「クローバーといい、誇称の国の人ってこういう行事を大切にするのね」

そのアリスの言葉に首を傾げる。

それは、どういう意味だ?

まさか、と思い至ってからダイヤが口を開いた。

「アリスちゃん。それって、もしかすると・・・」

「ビショップからね、苺クリームの入ったお饅頭が届いたの。・・・あつ他にもキングからカスミ草が」

カスミ草の花言葉「清い心」というカードとともに贈られてきた。

こうしてはおられない、とクローバー以外の男たちはアリス（とハート）に贈るための物を何にしようか思案する。

そんな中、ハートだけがまだ顔を染めながら呟いた。

「まさに男たちもあたしも

恋の病に薬なしって感じね・・・」

黄昏の国にもバレンタインが、流行の兆し、だ。

2月14日。

小話3 恋の病に薬なし（バレンタイン記念）（後書き）

はい。

よくわからないグダグダつとした話になりました・・・

とりあえず

ちゃっかりなクローバーさん

贈り物をするビショップとキング

赤面するハート

モテるスピード

いじられるスピード

がかけたので満足です。

ただ全部詰め込んだら訳分かんなくなりました（笑）

49・嬉し涙と女王の誘い

「嬉し涙と女王の誘い」

冷たい雨が、スペードに落ちる。

そうしているときは、全て、苦しいことも悲しいことも忘れられる気がした。

「駄目なんて・・・そんな」

「じゃあ頼って欲しい。誰もみな一人で生きている人間なんていないから。」

人から幸せや喜びを分けてもらって、生きてる。アリスだって、一人じゃない」

アリスは一人で、片意地張って生きていた。

弱みを見せることは、母らしくも父らしくもないと思っていたからだ。

だから誰にも弱みを見せなかった。

「アリスは、アリス自身が思っている以上に、たくさんの人に愛されている」

それは、恋愛の意味であっても、友情の意味であっても、大切に、想われている。

今度はアリスの目を見て、スペードは諭すようにアリスの頬に触れた。

「アリス・・・どう？」

スピードは頼ってほしいと言った。

アリスは少しも自分が背負った荷を分けてくれない。それがたまらなくもどかしい。

スピードだけじゃなく、皆そう思っているはずだ。

「ええ・・・ごめん、なさい」

「謝るほどのことじゃないよ」

「・・・ありがとう」

「お礼を言うほどのことでもないよ。これは、僕の我侭なのだし」

そうして、ふんわりと微笑んだ。

頼ることも弱みを見せることも、悪いことじゃない。

むしろ、1人で抱えて1人で苦しむことのほうが、よっぽど苦しいのだ。

「そうだアリス」

アリスは何？という意味合いを込めて首を傾げる。
スピードがどこか子供のような笑みを見せていた。

「ハートが」

あれだけアリスのことを嫌っていた女王。

「アリスがもし無事に帰ってこれたら」

アリスがいくら望んでも、決してアリスと仲良くしようとはしなかった。

「一緒にお茶会しよう、ってさ」

けれど、もう。

アリスはハツとして、スピードを見た。
本当のことだという意味で頷くスピード。

アリスは女友達がない。いたとしても極端に年下や、ごく僅かだ。
アリスが武官になるための鍛錬を積み重ねている間、女の子達はお洒落や恋に夢中になっていた。

ハートもそうだ。

ハンプティーに恋をして、好かれるためにお洒落をした。
だがハートがいくら自分を美しくなるよう磨いても、ハンプティーはアリスが好きだった。

だからこそ、ハートはアリスが嫌いだった。
拳句の果てには、政略結婚として嫁ぐはずのキングにも、アリスが好きだからと断られた。

アリス自身、ハートに嫌われていることはよく分かっている。
もう、和解するのは無理ではないかとさえ思えた。
だけど、お茶会を一緒にしようという誘いは

「友達、って思っているのかしら」

「うん。・・・いいと思うよ」

ハートはもうアリスを妬み、嫌っていないから。
自分がアリスにした仕打ちを悔やんでいる。

スピードの言葉にアリスは手で顔を覆う。
すこし、嬉し涙がでてしまったのを隠すかのように。

やっとあの不毛なサイクルから抜け出せそうな気がしてたまらなかつた。

『それでアリスは今からどうするつもりなんだ？まさかこのまま黄昏の国に帰るわけじゃないんだろうが』

指輪から発したジョーカーの声にアリスは頷く。

そして真っ直ぐ空を仰ぎ見る。

雨は先ほどよりもゆるやかになっていてあと数十分もしたらやみそうだ。

「私、人に頼ることはいけないと思ってた」

“リデル”だったときも、誰にも頼らずに1人だけでなんとかしようと足掻いていた。

その結果、こんな大事おおいごとになってしまった。

「だけど頼ることは悪いことじゃないのね。それを気付かせてくれて、ありがとう。」

・・・今から私はクイーンのところに行くつもりよ。だから、着て欲しいの。クイーンを止めたい、から」

「ああ、もちろんだよ」

クイーンを止めに。
クイーンを救いに。

「行こう。全てを終わらせに」

50・白雷と師匠の教え

「白雷と師匠の教え」

金属のこすれ合う音。そして、式の音。

「ふっ！」

クローバーは刀で、ビショップは錫杖で。

攻防、どちらが優勢なのか、どちらが劣勢なのか分からない。ただ戦っていた。

「オン　ベイシラマナヤ　ソワカ・・・式、白雷！」

ビショップがそう唱えると、式紙から雷が発した。

「（威力が、上がっている！）」

驚きを努めて顔に出さないようにしながら、クローバーは白雷と対峙する。

まだ2人が誇称の国にいたときは手合わせをしていたが、あの時より威力は上がっていた。

「（それに、速さも・・・）」

光の速さで駆ける雷。

昔の手合わせではこれをくらって気絶したこともある。それくらい、威力が強い。

ビショップは「さて、どう切り抜ける？」と意味を込めほくそ笑んだ。

反撃してやりたいのはやまやまだが避けるだけで精一杯なのだ。しかし、このまま避けていても何も変わらない。

ふと、クローバーの頭の中に昔のことがよぎった。

『もし自分より強い敵と戦うことになったらどうする？』

懐かしい師匠の声。

2人きりのとき、唐突にそんなことを言うものだから、クローバーは少し戸惑ったのを覚えている。

『逃げる？それとも命乞いをする？』

幼き自分クローバーはどう答えたらう。

師匠の問いかけに、どう返事をしたらう。

『それがしはにげる気も、命いのち乞いもせぬ！』

『そう、じゃあどうする？』

『たとえ勝ち目がなくてもたたかう！』

この答えに師匠は言ったのだ。

その考えは命を無駄にするだけだと。

でもクローバーは逃げ出すことや、諦めたりすることが嫌いだった。クローバーにとっては死んだら死んだで仕方のないことだし、

逆に戦って死ぬることは武士にとっては光栄なことだと思っていた。

『でも黒。よく考えてごらんさい。死んでしまつたら何もできない』

師匠は黒、と愛称で呼んでから目を伏せた。

『死んだらもう二度と誰にも会えない。こうして私の授業を受けることも、ね』

師匠はそう言つて、いじわるそうに笑つた。

何もできない。その言葉が当時のクローバーにとても重くのしかつた。

『それでも黒は死を受け入れることができる？

もう一生愛しいと思つたものと話せないし、触れることもできない。

それって、とても悲しいことじゃないの？』

『・・・かなしい、こと』

死は悲しいもの。

死んだ本人だけでなく、残された友達や家族さえも悲しみに浸つてしまう。

『だから強い人と戦つてもいいけれど死を受け入れるのは止めなさい。

最後の最期までもがいてもがいて生きる道を選びなさい』

最善の努力をつくしたうえで死んでしまつたらそれは仕方の無いことだけれど、と苦笑まじりに付け加えた。

生に執着し、必死に生きようとして足掻くことは決して恥ずかしい

ことではない。

そう師匠は言ったのだ。

『そうだクローバー。代わりに死ななくて済むような方法教えてあげる』

『え．．．？』

『でもこれは毘沙門たちには内緒ね。あの子達は、死を受け入れるなといっても受け入れてしまうから』

小さく、しかししっかりと言われた言葉を思い出し、クローバーはゆっくりと刀を構えた。

師匠の言ったその教え。

今ここで使わなければ、どこで使えというのだろうか。

「っ！？」

刀を構えた姿勢で、まっすぐ、ビショップに突っ込んだ。

流石にビショップもこれには予想外だったのか目を見開く。だがすぐに白雷をクローバーに落とした。

「ぐっ！」

クローバーは苦しさからうめく。

ビショップのその苦しげな声を聞き、無意識的に気を緩めた、が。刹那、横から刃が迫った。

「しまっ．．．！」

式を発動させる暇もなく、錫杖で防ぐ暇もなく、その刃はビシヨップの肩を斬り裂いた。

式術は基本的に誰にでも使えるが、上手くなるには生まれ持った天性が必要だ。

それと同時に、本人のとてつもない精神力・・・集中力がなければ長時間使うことも上手く使うこともできない。

ビシヨップの集中力は半端じゃない。それこそトップクラスといえる。

その集中力が凄いらこそ戦闘にも実用でき、強いのだ。

だが今、不意をつかれたことによって集中力が切れた。

つまり、式の効力も消えたのだ。

遮音結界の式も切れ、水を打ったかのように急に騒がしくなる。

白雷もまた、フツと掻っ消えた。

「まさか・・・真直ぐ突っ込んでくるとはな・・・」

ビシヨップは自身の肩を押さえ呟いた。

一方クローバーは僅かに口角を上げる。

白雷のダメージもかなりあったはずなのに、だ。

「これは師匠が言っていたことだ。

致命傷を喰らって死ぬより、緩い攻撃を喰らってでも相手に反撃し、生きること。それが師匠の教え」

確かに白雷の威力は上がっていた。

けれど、強くなったのはビショップだけでない。

クローバーもまた、ビショップと同じように強くなったのだ。

だから、白雷をひとつ喰らっても、以前と違い倒れたりしなかった。

「なるほど。肉を切らせて骨を断つ・・・あの人らしい考えであるな」

苦しげに笑い、こつ漏らしたビショップの視界に何かが映った。

白い狼の形をした、何かが。

「っ・・・あれは、」

目を見開いて、その狼を見る。

クローバーも不思議に思い、狼を見る。

やがてボウンと音がするとどこにも狼はおらず、白い式紙のみが場に残った。

ビショップはその式紙を握り締めると口を開いた。

「悪いがこの勝負、お預けだ」

そう言うが早いか、タツと駆け出す。

「なっ、」

クローバーも急いでビショップの後を追った。

「（あれは式神の術か・・・）」と心の中で考えながら。

50・白雷と師匠の教え（後書き）

どうでもいい豆知識。

幼き日のクローバーは師匠から「黒」と呼ばれていました。
幼き日のクローバーは言葉遣いが幼い。

51・式神と黄昏の童話

「式神と黄昏の童話」

式神とは要するに式術でつくった使い魔のこと。

その姿は術者によって様々だ。

おそらく先ほどの白い狼も誰かの式神で、ビショップの突然の行動から考えると何かの合図だったのだろう。

けれどここで決着をつける予定だったクローバーにしたら面白くない。

特に途中で戦いを放棄など、もってのほかである。

「待てビショップ！」

「待てといわれて待つような奇特な人間もいなかろう」

ビショップの逃げ足の速さに少し苦笑を漏らしつつクローバーは相手を追う。

未だスピードを落とすことなく走るビショップは、何を思ったか自身の懐をまさぐった。

そして式紙を2枚ほど出すと

「ゆけ。式神」

こう言い放った。

式紙はボウンと猫の姿に変化し、素早くその場を去った。

一方ビショップはどこかを目指し走る。

「ビショップ貴様、途中で戦を放棄するなど言語両断」

「悪いが拙僧は僧侶だ！大和魂をもった武士どと同じにしないで
もらいたい」

そう言い争いをし、だが双方息を切らすこともなく走り続けた。

スペードは木の下に行き、雨を避けると紅い指輪に触れた。

「ジョーカー、ジョーカー。聞こえる？」

ああ、とジョーカーの低いような高いような良くわからない音程の
声が聞こえた。

そういえばジョーカーとは何だろう。

スペードが国に来ていたことに気をとられて、アリスはそれを考える
のを忘れていた。

「そうだスペード。その、ジョーカーって何なの？その指輪も・・・

」

紅い指輪をちらりと横目で見ながらアリスは尋ねる。

ジョーカーという存在が考えれば考えるほどわからなくなる。

雨がかかるとジョーカーはスペードになった。

「何と言つか、簡潔に言えば“火”かな」

「火？」

アリスはスペードの言った意味が理解できず、そのままオウム返し

した。

無知は罪なり、というが今のアリスは罪だらけになってしまう。
理解できないことばかりだからだ。

「うん、火。火の悪魔、火の神・・言い方は色々あるけどね。
とにかく、火をつかさどる人間ではない異形のモノ。」

それがジョーカー。アリスも知ってる・・って、今は記憶、ないんだっけ？」

「あ、いいえ。記憶は戻ったわ。そういえば、いつていなかったわね」

ただ、リデルのことは言わないつもりだ。

全てが終わったと言うつもりだから、今は言わない。

スピードはというと記憶が戻ったことに喜び、また口を開いた。

「なら、アリスも知っているだろう？」ライオンと火のピエロ』
っ
ていう童話」

ライオンと火のピエロ。それは黄昏の国の民なら誰でも知っている
おとぎはなし
御伽噺。

とある森に住む動物の王様、ライオン。

平和に森を治めていたけれど、ある日突然どこからか国を寄越せと
火のピエロがやってきた。

当然王様のライオンはそれを拒否したけれど、寄越さないなら、と
ピエロは森を焼き、動物達を苦しめた。

そこで王様ライオンは火のピエロと対峙してそれを止めさせようと
した。

だけれどピエロは嘘つきだ。

ピエロが逃げようとすると、ピエロは足を滑らせ森の泉に落ちてしまふ。

森の仲間は助けようとはしなかったけれど、ライオンだけはピエロを助けた。

命が助かったピエロは、ライオンに感謝し、幾末までライオンの一族に仕えると約束した。

そしていつでも助けられるようにと、ライオンのしていた指輪に入った。

ライオンが危なくなったときは、火のピエロが助け、森はそれからずっと平和だった・・・という話だ。

「それが、どうした、の？」

「この話の舞台となる森は黄昏の国。動物たちは国の民。ライオンは黄昏の国の国祖。

ここまで言ったら、わかるだろう？」

アリスはゆつくりと頷く。

そう、その御伽噺の火のピエロとは、ジョーカーであることに。

「話の通りなら、この指輪にいるジョーカーは僕の先祖・・・国祖に助けられてその恩で僕も助けてくれている」

「でもなぜ、スピードが待ったく別の、ジョーカーになったの？それにどうして雨でまたスピードに戻ったの？」

『俺の特技には包括と言うのがある。それは宿主に乗り移る技。

だがな、俺は水が死ぬほど大嫌いだ。水以外の魔術を喰らっても痛くもかゆくも無いが、水だけは一滴も駄目だ』

だから雨を浴びただけで包括が解けたのだ。
そしてスピードに戻った。

『人間が俺のことを火の神と言おうが、火のピエロと呼ばうが関係ない。

ただそこに存在しているモノ。それで充分だ』

ハッキリとそういったジョーカーに、スピードはまるで我が子をつくしむように指輪を撫でた。

51・式神と黄昏の童話（後書き）

更新はしても話が全く前に進まないですね。

そしてついに五十話突破・・・

早いものですね。

それではここまで読んでくださってありがとうございます。
これから頑張りますのでどうかよろしくお願いします。

52・王の役目とその感情

「王の役目とその感情」

流石に姿をバラすわけにもいけないので、スペードはジョーカーに包括してもらっていた。

「アリス、これからクイーンの部屋に向かうが……ちゃんと付いて来い」

スペードinジョーカー。

それはスペードの意志はあるものの、喋り方もジョーカー、外見もジョーカーの色になる。

本当に誰だか見分けが付かなくなりそうだ。

「ええ、じゃ行きましょう」

「スペードの部下に見つかる色々都合が悪い。だから見つからないよう、最善の努力はするつもりだ」

と、ジョーカーは目配せしながら言った。

けれど突然、「そんな必要はない」とここにいなかったはずの誰かが言う。

そこにいたのはキングだった。

いつやって来たのかなんて分からないが、こちらに歩み寄ってきていた。

「キング……どうして……」

キングは一瞬アリスに視線を向けるが、すぐにジョーカーに視線を移す。

そこにいるキングは、見たことの無いような殺気を纏っていた。

「どうして？・・・分からないか、アリス。

ここは俺の城。反響の国の中心部であり、民の拠り所である城だ。ここで黄昏の国の武官と我が国の兵士が戦ってみろ。

平和に暮らしていた民が怯える。俺は国のトップにたつ皇帝として、民を怯えさせる訳にはいかない。

だから、アリスといえども・・・騒ぎの中心ならば、刀を向ける覚悟もある」

淡々とした、けれどしつかりとした口調でキングは告げた。

「ッ・・・！」

アリスが横目でジョーカーを見ると、ジョーカーは眉を寄せ、唇を噛んでいた。

こぶしを握り締め、目を伏せて。

「（ジョーカー・・・？）」

ジョーカーは苛立ちを感じていた。

それも全部、スピードのせいだ。

包括をしているときは、スピードの思考などすべて自分に伝わる。

そして今、スピードの苛立ちや苦しみという感情がジョーカーに流れ伝わってしまう。

この苛立ちは自分の感情じゃ、ない。
スピードの意思だ。

ああ、とジョーカーは思う。
悔しいのだと。スペードのこの感情は悔しさからきているのだと分かった。

近い歳で、国を治めているという同じ立場に立つ者同士。
だが、スペードとキングには決定的な差があった。

それは、感情だ。

スペードはアリスを助けに国をハートに任せ、この国にきた。
けれど、キングはアリスへの想いをおさえて、国のために刃を向けることもいとわない。

国のトップに立つ者としては、どちらが正しいのかは明白。

一国の主は、その国、その民、そしてその国が長い歴史をかけて作り上げた誇りをも背負う。

要するに、スペードの行為は、軽率そのもの。

いくらジョーカーの力あったとしても、その命、落としていたかもしれないのだ。

ジョーカーは心配そうに自分を見るアリスにかぶりを振ってから、もう一度キングと対峙する。

「だが、貴様も知っているんだろう。貴様の姉であるクイーンのしていること全て。

黒魔術に飲み込まれていることも、貴様に対する姉の思いも、だ」

その言葉にキングはわずかに反応し、肩を一瞬揺らす。

キングは聡い。だから、この騒動の原因についても気づいているの

だろう。

キングは口をつぐんだが、ジョーカーはその沈黙を肯定ととり、話を続けた

「なら、何故姉を止めない？ 姉を止めることを、弟である貴様ならできただろう。

・・・確かに、敵国の武官が戦っていることも危険であり、それを止めることも重要だ。

しかし民にとっては、自国の女皇が黒魔術に飲み込まれていることの方がよっぽど恐ろしいのではないか？

よっぽど危険だと思わないのか？」

「・・・そうかもしれない。いや、そうだろう。だが、俺には姉を止める力が無い。それならば」

姉でなく、敵国の武官の排除の方が良い。

自分が我慢さえすれば、民に姉の手が及ぶことはないのだから。

「歯痒いな」

ジョーカーは小さくそう呟いた。

彼もまた、何もできない自分に苛立ちを感じているのだと感じた。^{キング}

王は国や国民のためにできることは多くある。

けれど、それはあくまで王としてのこと。

一人の人間としてできることはあまりにも少ない。

大きな権力を持つ者は、同等に大きな責任を問われるのだ。民を気にかけず滅んだ王はいくらでもいる。

反響の国も以前は王政だったが、王が民のことをかえりみなかったため、今のような帝政になった。責任という鎖は、とてつもなく重い。

「アリス、ここを去れ」

「・・・できないわ」

「アリス。頼むからここを去れ。そうしなければ、俺は、お前を、殺すかもしれない」

まるで吐き出すように、言われたその言葉。

「殺す」というその言葉が、妙に響いて聞こえた。

52・主の役目とその感情（後書き）

皆さん、お久しブリーフです。

（いきなり下品ですんません）

学校卒業、そしてまた入学いたしました。

環境の変化についていけず大変ですが

これからも頑張って更新していくので応援宜しくお願いします！

どうでもいいのですが、今回のサブタイトル、かったいですね。

アリスって何歳向けの話なんでしょうか。

何歳から何歳までが楽しめるのか、ちょっとした疑問です。

では、読んでくださり、ありがとうございました。

おまけ7 クローバーに50の質問

く おまけ・クローバーに50の質問く

01 お名前をどうぞ!!

本名は黒羽だ。

クローバーというのは黄昏の国にきたときについた名前だな。

02 性別は?

立派な男児だ。

03 誕生日!

秋生まれだな。歳は18になる。

04 身体的特徴(身長とか顔立ちとか色々)

身長は・・・女子おなごよりは高いが、男の中では低い方だ。

右頬に濃緑のクローバーマークの刺青がある。

髪は高い位置で結っている・・・そんなところか。

05 動物に例えると?

動物・・・うむ、悩むな・・・

鷹、しか思いつかぬ。

06 特技は?

物を憶えるのは得意だ。

黄昏の国の書庫の本の内容も大抵は憶えている。

07 ご趣味は?

刀の手入れ。

手先は器用な方だ。時折、武官たちから手入れを頼まれたりもする。

08 将来の夢など

近衛としてスピードを守った後、引退して穏やかに暮らせれば良い。夢であつた近衛にはもうなれている故、満足だ。

09 好きな言葉とかある？

師匠の言っていた言葉だが、「本当に強い者というのは、弱い者を守れる者」というのだ。

それは幼い自分に影響を与えた言葉だった。

10 好きな動物は？

鳥は愛らしいと思うぞ。

11 好きな色

落ち着いた色がいいな。藍色や蘇芳色などがそうか。

12 好きな料理

味が濃い、脂っこい料理は苦手だな。

薄味のほうが好みだ。

13 好きな異性のタイプ

自分のすることに理解を示してくれる女性だ。

14 好きな同性のタイプ

同性の場合は落ち着いた者が好ましい。

少なくともビシヨップのような、人を小馬鹿にしたような者は嫌いだ。

15 座右の銘は？

成せば成る。やれば出来るという意味だ。

16 暇なときなにしてる？

鍛錬や勉強をしている。

やはり男たるもの、文武両道を志すべきだな。

17 旅行とか好き？

国の文化に触れるのは好きだが。

18 癒されることって何？

甘味を食べることだ。

だが正直、洋菓子より和菓子の方が正直舌が慣れているから、和菓子のほうが美味しい。

19 一緒にいて落ち着く人はいる？

長らく会っていないが、某の幼馴染（的存在）だな。

20 ぶっちゃけその人は恋人です！？

いや。兄弟弟子の一人で、幼い頃から一緒だった。

師匠が幼いそいつを拾ってきてな。

言っておくが、ビショップではないぞ。

21 コンプレックスとかあったりなんかしちゃったりする？

・・・童顔だ。

22 それを解消するために何か努力はしてる？

顔の造形を作り変えるのは無理だ。かといって、歳より幼く見られるのは・・・

23 じゃあ逆に自慢できることは？
髪、か？

自分でいうのは何だが、中々綺麗な髪だと思うぞ。

24 人生で一番嬉しかったことは何？

師匠に認めてもらえたことだ。

一人前の武人として、これからも精進してゆくつもりだ。

25 人生で一番驚いたことは？

武者修行に誇称の国から出て、様々な国を見たときだな。

自分の知っていた世界はとてつもなく小さかったと思い知らされた。

26 人生で一番楽しかったこと

戦うことだ。

戦争は好きじゃないが、戦うこと自体は楽しい。
胸が熱くなって高揚してしまうんだ。

27 人生で一番怖かったこと

幼い頃の話だが・・・人斬りに襲われたことだな。

なんとか生きれたがあのとときほど恐怖を感じたことはない。

28 人生で一番辛かったこと

上の話で、人斬りに斬られたことだ。

浅かったものの、傷口が物凄く痛んで、人を斬る痛みを忘れないようにしようと思ったものだ。

29 外向的？内向的？

俺は初めて会った人には警戒心が強い。
おそらく内向的だろう。

30 道に1000万（日本円で）が落ちてました。どうします？
届ける。

31 じゃあ、1000万円もらいました。どう使う？
莫大な金は貰うのが億劫になるため、受け取らぬ。

32 子犬が捨てられていた！！愛らしい声で鳴いています。どう
でる？
拾う。

33 突然頼みごとをされました！ あなたならどうする？
できることなら承諾しよう。

34 とても仲のいい友達と喧嘩しちゃったよ！どうしよう！？
冷静になれるまで頭を冷やす。

35 嘘はつけるタイプ？
つける、が、あまりつきたくないな。

36 もしかしてその嘘はついてもすぐバレちゃったりしない？
どうだろうな。分からない。

37 何か癖ある？
特には。

38 誰かに何か言いたいことたまつてない？
そこまでたまっていないから平気だ。

39 あるって答えたそのあなた！ じゃあこの穴に向かって
思う存分叫んでください！！！！

・・・。

40 ……酸素マスクいる？
・・・。

41 あなたにとって一番大事なものは？
一番大事なものの、か。

一概には決められないが、時間だな。俺にとって一番幸せな今が大事だ。

時間を惜しむことについては誇称の国の偉人たちも言っていたしな。

42 自分といたらコレ！ みたいなのある？
・・・刀しか思いつかぬ。

43 崇拜してる人とかいる？
師匠だ。

44 どうしよう！ 財布を掏られた！！
掏り返すか。

師匠に掏り方は教えてもらった。
曰く、いつ必要になるか分からない、そうだ。

45 コレだけは誰にも負けないものつてある？
人としての誇りだ。

46 こいつには敵わないっていう人いる？
やはり、師匠以外に有り得ない。

47 全部答えてきたね？じゃあこのノリで普段なら言えないような秘密トークをお願いします！！

本当にどうでも良く、秘密でもないが・・・

俺は一人称は「俺」と「某」で使い分けている。

某は少しかしこまった時などに使う。

本当にどうでも良いものだ。

48 ぶっちゃけ作品内での自分の立場ってどうよ？

どうだろう。こちらが聞きたいくらいだ。

49 ここぞとばかりに生みの親になんでも言っちゃえ！

・・・そうだな。ビショップとの戦いに決着を着けてもらいたい。

50 ここまで読んでくれた方に何か。

有難う。ここまで読んでくれたこと、感謝する。

オリキャラに50の質問

「Water Future」 <http://waterfuture.finito-web.com/orichara50.html>

53・騎士の剣と式神術

「騎士の剣と式神術」

速やかなしい。風の切る音がした。

時計兎の肩をルークの剣がかすめ、ルークの頬を時計兎の鞭がかすめる。

ルークの頬を、僅かな血が伝った。

ルークも時計兎も、戦いのスタイルはスピード重視だ。

音速とされるルークの剣技は男顔負けだ。

隙のない、その速さ。

一方時計兎は、鞭という扱いにくい武器を使っているに関わらず、完璧に使いこなしている。

鞭のように、長く、リーチがある分隙が生じやすい武器は相当の技量を持った手練でないと使えない。

つまり、鞭の隙を補うためには、使用者の的確な腕と素早さが必要になる。

それを時計兎は兼ね備えているということだ。

「中々やるな」

そう呟き、走りこむルーク。

キラリと光る振り上げられた銀の刃。

ぞっとするほどの、刃物の輝き。

速い。ルークのスピードが、また上がった。

時計兎はかるうじて剣を避ける。

が、続けざまに右、左とルークの攻めの手は止むことがない。
振りかぶり上、右、踏み込んで左、再び上、右、右・・・
光る銀の流線と規則正しいリズム。基礎のなった攻撃。

これだけ同じリズムで同じ型を打ち続けるには相当な鍛錬が必要だ。
それも全て、幼い頃からルークが培ったもの。

「くっ・・・」

眉間に皺をよせる時計兎とは対称に、ルークは表情を変えず時計兎を追う。

一見すれば、ルークの優勢。

しかし、そうでもない。

時計兎はルークの攻撃を読んできている。

基礎のなった技だからこそ、次の一手も大体だが予想がつく。

そう、ルークの攻撃は一向に止まないが、決定打にも至らない。

しかも時計兎の対応も段々と変わってきている。

鞭をしっかりと握り、ルークが剣を振り下ろすより前に避けているのだ。

やがて時計兎は何かが閃いた、というかのように時計兎の表情も変化していく。

ルークが下から上に斬りあげたその時。

わずかな隙ができたのを時計兎は見逃さない。

体をやや右向きに保ちながら重心を安定させ、時計兎は鞭を持った右手をスイングさせた。

すると、鞭は意志を持っているかのように真っ直ぐルークの手元に

向かう。

柄にからみつく、そのまま時計兎は右手を引く。

ルークの剣が、不思議なまでにするりと手から離れる。

一瞬のせめぎあい。

そして、銀の刃が、宙を舞った。

「あっ……」

剣は鈍い音をたて地に落ちる。

息をつく暇もない、攻防。

そして鞭は、今度は強くルークの鞭をたたく。

背中を走る痛みにルークは顔をゆがめると、そのまま地に膝をついた。

「さて」

息をついた時計兎。

長いようで短くて、短いようで長い戦いだった。

「これで終わりですね。あなたは地面に膝をついた。もう戦わないでしょう」

時計兎は鞭を手に巻きつけ回収すると、地に落ちていた剣を拾い、ルークに差し出した。

「どうぞ」

「っ！……どういっつもり？」

あまりに自然に差し出された剣。

ルークは思わずそれを受け取ってしまいそうだったが、敵から渡された剣をとるのを躊躇する。

「どういふつもりといわれましても、ね。別に深い意味はありませんよ。」

ただ、試合相手に敬意をこめて握手をするのと同じようなものです」

殺し合いをするためにここに来たわけじゃないですから、と言葉を付け加え、時計兎はルークに剣を渡す。

「剣というのは騎士の魂なんでしょう？ま、私は鞭ですし、騎士でなく武官ですからよく分かりませんが」

ルークは信じられないというように、目を瞬かせる。

そして、自分の手の中にある剣をみて、素直に礼を言いたくなった。

この剣は尊敬する父から貰ったもの。

名のある名家から生まれた自分。父が王直属の騎士で、ずっと憧れていた。

最初は父も自分がおしとやかなお嬢様になることを望んでいた。

しかし自分は父と同じ騎士になると強く訴え、毎日訓練した。

その姿を見て、当初は遊び半分じやできる仕事でないと反対していた父も、

自分が本気だと認めてくれるようになった。

父が引退した日、父から譲り受けた剣である。

「では、大人しくしておいてくださいね。ま、あなたは後ろから人を襲うような人ではないでしょうが」

そう言い、時計兎がルークに背を向けたとき。
どこから来たのか白い猫がその場に現れた。

「猫・・・!？」

驚く暇もなく、猫は煙につつまれ姿を消した。
その場に残っていたのは白い紙。

時計兎は警戒しつつ、その白い紙を手でつまむ。
だが、その紙は少し文字のかかれた何の変哲もないただの紙だ。
いや、ただの紙でなく、式紙ではあるのだが。

先ほどの白い猫は、と事情を知るルークは目を見開く。
白い猫はビショップの式神だ。その式神はルークの元にきた。
ということは、キング、もしくはクイーンに何かがあったということ。
と。

ほんの少しだがキングは式術が使える。
ビショップから少しながら習っていたからだ。
そこで、キングは式術のなかのい式神術に目をつけ、こう言った。
「ルークとナイトが無きとき、自分と姉に何かあればビショップに
自分の指揮を遣わせる」と。

要するに、キングがクイーンに何かがあったときは、
キングはビショップに式神を遣わせ、ビショップに何かがあったと
知らせる。

そしてそれを受けたビショップが、ナイトとルークに式神を遣わせ、
それを知らせるという仕組みだ。

キング式術を使えるといってもまだ未熟。

式神を創るのにも力が必要。

ビシヨップのように複数式神を創ることはできない。

つまり、1つしか式神ができない。

ナイトかルーク、どちらか一方に知らせても、ナイトとルークが一緒にいるとは限らないし、

もしキングとクイーンどちらにも危険等が迫っていれば、どちらか一方だけ呼んでも意味が無い。

故に、まずビシヨップに知らせる。

そういう風になっているのだ。

その式神が、ルークの元へ来た。

おそらく今頃ナイトのところにも式神がいつていることであろう。

・・・式神がきたということは、敬愛するクイーン、もしくはキングに何かあったということだ。

ルークは痛む背中のこと忘れ、駆け出す。

クイーンの身、ただそれだけを案じて。

時計兎も、自分を抜かしてまで走ったルークを不審に思い、後を追った。

53・騎士の剣と式神術（後書き）

今回のマメ知識です。

式神は使う人によって形が違います。

色は全部白に統一されていますが。

キングは狼、ビショップは猫の形になります。

ちなみにクローバーは鳥です。

しかしクローバーは式術を使うのが苦手なので滅多にでてこないと思います。

54・炎の魔力と女皇の傀儡

「炎の魔力と女皇の傀儡」

去れと言われた。殺すかもしれない、と言われた。

けれどアリスは去るつもりも、殺されるつもりもない。
クイーンを止めに來たのだ。

「去るつもりはない、か」

動く様子がないアリスを見てキングは呟く。

キングはこの時、アリスが去ってくれたらどんなに良いだろう、と考えた。

愛しい人に刃を向けることはとても辛い。

けれど、姉にアリスたちが刃を向けることはもっと辛い。たった一人の肉親なのだ。

姉を狂わせたのは自分で、今この騒ぎを起こしているのは姉。
随分勝手な言い分だとは思う。

だけれど、自分では姉を止められない。

かといって、アリスでは姉に殺されるかもしれない。

それだけは絶対に嫌だ。

そうなれば、道は一つ。

アリスを国に帰して、自分が姉の傀儡かいらいになることしか、ない。

「アリス、俺の後ろに」

ジョーカーがアリスを庇うように、アリスとキングの間に割って入る。

それを見て、キングの胸が締め付けられるようにキリリと痛んだ。

浅ましい嫉妬だとキング自身分かっている。

アリスを今脅かしているのは自分なのに、アリスをそんな不安そうな顔にさせることが憎たらしい。

不安そうなアリスを守る、隣の男が恨めしい。

赤子のような独占欲と我侷。

自己嫌悪で、吐き気がする。

だがそれも、自分自身のせいだ。

キングは渦巻く感情を抑えながら、右手を前に突き出すと、静かに詠唱を始めた。

「氷に属する全ての粒子よ。創主を屠^{ほふ}った我に従え」

氷の粒子がキングの右手に急速に収束される。

やがてその氷の粒子は形とっていく。

「氷刃」

三日月刀へと形を変えた氷を持ち、キングは斬りかかる。

氷は炎に弱い。だから炎の魔法を使い、対抗すればいいのだが、今のジョーカーにはそれができない。

何故なら、氷を炎で溶かせば水ができてしまうからだ。

一般人にはなんてこと無いただの水だが、ジョーカーにとっては、一滴の水でさえも弱点となる。

それに、水を被れば包括が解け、スピードの姿があらわになってしまう。

それは避けたいことなのだ。

「ジョーカー退いてッ」

キングが斬りかかっているにも関わらず突っ立っているジョーカーの前に出て、アリスは氷刃を受け止めた。

だが、受け止めたトンファーが氷刃の影響でピキピキと凍っている。

このままではトンファーを持っているアリスでさえと察したのか、アリスは氷の刃を弾いて、後ろへ体を引いた。鈍い音をたて、氷刃が地面に振り下ろされる。

そしてアリスのトンファーと同じように地面が少しずつ凍っていく。

氷刃に触れたものはいかなるものであると凍らせる。持っている術者は例外として。

「チツ・・・厄介だな」

ジョーカーは舌打ちして、氷刃を避ける。

水が当たらないように避ければいいかもしれないが、万が一、水滴がかかったとしたら・・・そう考えるとジョーカーは行動に移せない。

けれど、相手のキングは本気だ。本気で、自分たちと戦っている。もしかしたら、このままアリスも、スピードも討たれる可能性がある。

ならば、とジョーカーは決意したように鎌を握り締めた。
それから、心の中で、スピードに呼びかける。

・・・スピードは、ジョーカーの呼びかけに応じた。

「やってくれ」と。

「下がってくれ、アリス」

ジョーカーはアリスにそういうと、キングに向かい手をかざす。

とてつもなく高い魔力を持った者は詠唱なしに魔法が使える。

そう、ジョーカーは炎を司るモノ。

炎系魔力は計り知れない。

炎の粒子がジョーカーの手に集う。

「何・・・!？」

キングの氷刃に向かって、それは炎の渦を作る。

渦は、瞬く間にキングの氷刃を溶かした。

と同時に、溶かされた氷の雫が、ジョーカーの手を掠める。

「ジョーカー！水が・・・っ」

「ああ、そうだな」

ジョーカーはなんと無いというように頭をふると、ふ、と小さく笑んだ。

『スピード、頑張れよ』と心の中で言うと、目を閉じた。

やがて。

色が落ちていくように。色がはげていくように。

火のピエロが、黄金の獅子へ。

漆黒の髪は、黄昏の色をした金髪に。

黒曜石のような黒い瞳は、燃えるような火色の瞳に。

「っ!？」

「キング・・・僕は、君を倒す」

黄昏の王が、そこに立っていた。

55・赤い薔薇と冷ややかな笑み 前編

「赤い薔薇と冷ややかな笑み」

キングは目の前に立つ、ここにいないはずの人物を見て瞠目した。さっきまで黒髪黒眼だったはずの人物が一瞬で姿を変えたことも、声の質が違ったことも、すべて驚きの対象だった。

「・・・スピード王、か。黄昏の国の王が何の用だ？」

「だいたい、家臣たちは何も言わなかったのか？貴殿が単身でこの国に来ることを」

キングは努めて驚きを顔に出さないようにし、静かに問う。

スピードはぐつと唇を噛んでから

「家臣は、欺いてきた。国のことは、優秀な妹に任せてある」

と言った。

その言葉を聞いて、キングは思った。

スピードもキングも、好き好んで「王」なる存在になった訳でないと。

立場は似ている。しかし、同時に立場は真逆。

似ているようで、似ていない。同じようで同じじゃない。

「キング、あなたがアリスに刃を向けるといふのなら、僕はあなたを倒す」

スピードは鎌を構え、キングを睨むように見る。
キングはスピードを見返した。

「やってみろ」

見下されたその言葉にスピードは殺気を張り詰める。
キングにもスピードにも隙がない。

アリスは固唾を飲んだ。

先に動いたのは、キングだ。

「氷刃ッ」

「！」

また氷の刃が襲う。

スピードはそれをかわす。

アリスは何もせず、否、何もできず、ただ2人を見る。
それでも、止めなければとアリスが一步足を出した。

が、その瞬間。

ゾクリとした空気が、耳元を駆けけるのをアリスは感じた。
禍々しい、いやな感じ。

その禍々しさのする方を、アリスは振り向いた。

「ク、イーン……」

背筋の凍るような冷笑。
口紅で赤く彩られた口元。

冷やかな目線。

『み・つ・け・た』

クイーンは、声こそは出してないものの、確実にそう言いながら、髪飾りに使っていた赤い薔薇を手で握りつぶした。

その行為に、アリスは狂気を感じ、体を震わせた。

キングとスペードが争っている、こんな状況で、一番会いたくなかった人物に会ってしまった。

アリスは唇をかむ。

胸に煌く蒼色のペンダントをしっかりと握って、恐怖で震える体をおさえつけた。

「アリス・・・？」

動かないアリスを不思議に思ったのか、キングもスペードも動きを止めた。

アリスの視線をたどったそこにいる人物に、2人は目を見開いた。

「姉上・・・っ」

「女皇っ！？なぜここに・・・」

クイーンはなにも言わず、笑みを浮かべたまま、廊下の奥に消えた。

「姉上っ！待っ・・・」

クイーンを追おうと、アリスたちは足を踏み出す。
だが、それは2人の男に止められた。

「動くな、スピード……そしてアリス」

「キングも、と言った所か。無闇に突っ込んで、相手の思っ壺であるぞ」

「クローバー……それにビショップ！よかった、無事だったのね」

アリスは軽傷の2人を見て、思わず安堵の声を出す。

アリスにとって、2人は互いに自分を助けてくれた存在だ。

どちらかが動けなくなるまでの怪我をしていなくて、純粹に喜んだ。

「おかげさまでな……無傷とは言わないが。まあ、それより」

と、クローバーは視線をスピードに移す。

スピードはクローバーの視線に気付いたのか、肩をすくめた。

「クローバー……君に迷惑をかけたことはすまないとは思っけど、正直、後悔はしてないよ」

クローバーはスピードの言葉に溜息をついた。

しかしそれは、気苦労、絶望、呆れといった感情ではなく、言うならば、大きな吐息のようなもだった。

「とにかく、説教は帰ってからゆつくりさせてもらっ。先に、2人に言いたいことがある。もう、争いはよせ」

キングとスピードを見て、クローバーは言う。

争っても、なんにもならない。

国のトップに立つ者として、争うより前にすべきことがある。

「口がなっていないな、異国の者。

それに・・・部外者は黙っていてもらいたいのだが？これは俺と姉の問題だ」

キングが見下すように言うと、クローバーはあきらめた様子で、静々と頭を垂れた。

「それは失礼いたしました。それがし某は黄昏の国の王の近衛にございます。このたびは、とんでもない無礼を働き、申し訳ございません。

しかし、アリスや国民を巻き込んでいる時点で、もう貴殿と姉君の問題ではないかと思われます。

このまま闘っても、埒はあきませぬし、良い事などひとつもありません。どうかその刃、お収めいただきたく・・・」

スピードは久々に聞いたその口調に目を細める。

クローバーが自分のことを「某」というのもなかなか珍しかった。出会ったところは、スピードに対してもこの口調だったのだが、慣れるうちに素になっていった。

そのことを思い出し、スピードはこんな状況ながら、フツと笑みをこぼした。

「なぜ、良い事はひとつもないと？」

「、破壊は無を生み出します故」

「無から生み出される有だつてあるだろうに。

それに貴兄とて、この国に来て一度もその刀を抜かなかったわけではあるまい？」

キングにそう指摘され、クローバーはぐつと喉を詰まらせた。

もともと、クローバーはこのような口上の争いは得意でない。ダイヤの方が、こういうのは向いている。

そもそも城内で別れたのだが、ダイヤたちはいったい何をやっているのだ？」と

クローバーは苛々をまったく関係ないところにぶつける。

ハラハラしながら見守っているアリスとスピード、

ほくそ笑んでいるビショップ、冷やかに自分を見下げるキングの視線を感じながら、クローバーはその口を開いた。

55・赤い薔薇と冷やかな笑み 前編（後書き）

全然更新してなくってほんとすみません！

新生活でかなり忙しくなってしまいました。

空いた時間を見つけてはなんとか更新していきたいと思っています。
す。

いろいろがんばります。

56 赤い薔薇と冷ややかな笑み 後編

「赤い薔薇と冷ややかな笑み2」

「ビショップがアリスを連れていたからと言いつつさせていただきま
す。」

確かに拙者は刀を抜きました。けれど、今はそんなことを言っ
ている場合ではないのは、貴殿ほどの人物ならお気づきでしょう」

確かに、とキングは心中で思う。

争いはよくないことくらい分かる。だが、いわばこれは各々の志、
意志のぶつかりあいなのだ。
引くに引けないのだろう。

「・・・あの」

そのとき、黙っていたアリスが口を開いた。
眼は、まっすぐにキングを見つめて。

「みんなに、言おうと思っていたことがあるの」

アリスはずっと思っていた。

守られ、大切にされるのを拒もうと。

なぜなら、守られ大切にされればされるほど、誰かに迷惑をかける
ことになるから。

アリスはそう思い、ひとりで何とかしようと考えていた。

そうすれば、迷惑は誰にもかからない。

だから、アリスは皆を拒んでいた。

仲間だなんだと言いつつも、心の奥底では、それを拒否していた。

けれどそれは違うのだ。

そのことを、教えてくれたのは、アリスが拒んでいた皆だった。

「私、以前クイーンの声が聞こえたの。クイーンの心の声がね」

「姉上の、心の声……？」

「ええ。助けてって言っていたわ。私を、黒魔術から救ってほしいって」

「黒魔術は一度捕らわれてしまえば、自分から抜け出すのは難しい。

それに力を操りきれなければ、己の心の闇を増幅させてしまう」

今まで傍観していたビショップがつぶやくように言った。

クイーンの今の姿は、力に捕らわれてしまった典型的な“魔女”だ。

「だから、私はクイーンを救いたい。キング、あなたの姉を助きたいの」

「どうして、そこまで……？」

キングは疑問を口にする。

こう言えば何だが、クイーンはアリスに対しひどい仕打ちをしてきた。

なのになぜ、アリスは救いたいと思っていられるのだろうか、そう思ってしまう。

「……クイーンと私は似てるわ。自分一人で全部を背負いこもう

とするところがね。

クイーンは自分ですべてを背負い込みすぎて、ああなってしまう……」

アリスは、クイーンの姿を思い出しながら言葉を紡ぐ。

誰にも弱みを吐くことのできないクイーンと、誰にも弱みを見せることのできないアリス。

この二人は、性格は違えど、根本はよく似ているのだ。

「私も、このままだとクイーンによってなっていたかもしれないわ」

このまま一人で生き続けていたら、心が壊れていたかもしれない。

「馬鹿な話だけど、今回、スペードに言われて初めて気付いた。

私は一人じゃなかったって。私は、人に救われながら生きてたんだって。

私には支えてくれる人たちがいたのよ。私の知らないところで、私を支えてくれてた人たちが」

だからこそ、アリスは今までまっすぐに生きてこられた。

ハンプティという幼馴染や、自分を慕ってくれていた人々がいたから。

クイーンにもキングやルークみたいに自分を支えてくれる人々がいたが、

彼らの存在に気付く前に、精神が黒魔術に侵されてしまったのだ。

「一人じゃない幸せに、私は気付けた。ならばクイーンも気付けるはず。

……私は皆に救われた。だったら、今度は私が皆を、救う番よ。クイーンを救いたい理由なんてない。

ただ、苦しんできたあの人を、救いたいていうだけ」

誰かが苦しむ。

その誰かが苦しみから逃れたいと思っているのなら、救ってあげるのが、人の持つ愛情だ。

「私はクイーンを救いたい。でもそれは、私ひとりじゃかなわない。だから皆、お願い。クイーンを、苦しみから救いましょう。皆が皆、誰かに救われたみたいに」

返事はない。が、それぞれの表情ははつきりと、肯定を表していた。

クイーンは、部屋で赤い薔薇を弄んでいた。

その香りに、酔うように、うっとりとした目で笑む。

「もうすぐだ。もうすぐ、アリスが消える……」

嬉しそうに赤い薔薇に口づける。

自身の唇にひかれた紅は、薔薇のように鮮やかで、血のように紅い。

「キング……私のいとらしい弟……。ずっとずっと、永遠に、お前は私のものだ」

部屋の前まで近づいてきた足音に、クイーンは笑みを深くした。ゆっくりと立ち上がり、手に持っていた薔薇を地面に落とす。そして、グシャリと、薔薇を踏みつぶした。

「アリス……来るがよい。お前との遊びも、もう終結だ……」

薔薇が、散った。

56 赤い薔薇と冷やかな笑み 後編（後書き）

えーと・・・五か月も更新してなくて本当にすみませんでした。
気付けばもう十二月です。

お待ちしてくださった皆様、なんとか涼村は生きてますよー！。

とりあえず、完結だけは絶対させますので、
どうか気長にお待ちください。

とりあえず、頑張っていきます。

おまけ7 ダイヤに50の質問

くおまけ・ダイヤに50の質問く

01 お名前をどうぞー!!

ダイヤっちゅーんや。よろしくな。

02 性別は?

男やで、オ・ト・コ。

03 誕生日!

真夏に生まれたなー。髪も暖色やから暑苦しかったらしいで。

あ、歳は十九や。

04 身体的特徴(身長とか顔立ちとか色々)

左頬にダイヤモンドマークがついとして、顔は結構男前やと思っけどなあ。
ん? だれや今自画自賛言ったやつ。

05 動物に例えると?

クローバーに聞いたら、キツネやつて。

何でや・・・食えない奴ちゅー意味か?

06 特技は?

そら勉強することに関しては負けへんで。
飯にも国一の文官なんやし。

07 ご趣味は?

運動することやんなあ。

なんかスポーツとかすると頭も活性化するし、精神力もつくで。

08 将来の夢など

うーん、そーやな・・・

俺ンとこの銅の一族とスペードが、お互いを認め合えるようにすることしか思いつかんわ。

俺の実家とスペードは折り合いがわるーてな、困るんや。

09 好きな言葉とかある？

ベタに愛とかゆつてみよか。

10 好きな動物は？

動物は全般に好きやで。かわえーやん。

11 好きな色

赤かなー。

どうでもええけど赤ってクローバーの故郷やと魔払いの色らしいわ。

12 好きな料理

辛い味が好みやで。

13 好きな異性のタイプ

ノリのええ子かな。あと笑うと可愛い子とかも好きや！

14 好きな同性のタイプ

同性やつたら・・・一緒にバカやれるようなあつかるーいな奴やな。

15 座右の銘は？

「継続は力なり」やろか。

日々の努力を大切にせえよ。

16 暇なときなにしてる？

あんま暇がないから分かん。

多分、同じように暇な奴と話すんちゃう？

17 旅行とか好き？

嫌いではないけど、特別好きっちゅう訳でもないで。

18 癒されることって何？

小さい子とかとふれあったときとか癒されるわー。

自分より小さいもんは、なんか守ってあげたくなるなあ。

19 一緒にいて落ち着く人はいる？

あんまおらん。一番落ち着くんは一人のときやし。

そもそも俺の性格上、人と話してたりするとテンションが上がってまうから。

20 ぶつちやけその人は恋人です！？

この質問、飛ばしてもいいやんな。

21 コンプレックスとかあったりなんかしちやったりする？

コンプレックスなあ・・・

左目に眼帯しとることくらいしか思いつかん。

22 それを解消するために何か努力はしてる？

こればかりは、な。

しゃーないことや。

23 じゃあ逆に自慢できることは？

うーん、明るいところや。

・・・あと俺なあ、意外と空気読むんやで。

24 人生で一番嬉しかったことは何？
ジャッククラス
そやな。王の補佐に選ばれたことや。

25 人生で一番驚いたことは？
同じく王の補佐に選ばれたことやで。

俺、銅の一族の人間やったから、選ばれることはないと思ってたんや。

余計驚いたわ。

26 人生で一番楽しかったこと
俺、最初は武官の方に所属しとったんやけど、そんな時クローバーと手合わせしたんや。
手合わせゆつてもただの手合わせやのーで、どっちも本気で戦ったんやで。

あのときほど高揚したときはなかったかもなあ。

27 人生で一番怖かったこと
怖かったことなー。

・・・俺の祖母の説教や。怖いで、あれは。

28 人生で一番辛かったこと
・・・辛かったこと・・・ねえ。

母親に、この左目のせいで蔑まれた時期・・・やな。

俺の弟や妹は母に愛されとったのに何で俺だけ、っっておもっとった。

29 外向的？内向的？
外向的やろ。バリバリの。

30 道に1000万（日本円で）が落ちてました。どうします？
あんま金額でかいとな。拾うのも気がひけんで。
百円くらいなら拾うかもやけど。

31 じゃあ、1000万円もらいました。どう使う？
スピードに国費にしてもらうことかもしれんなあ。

32 子犬が捨てられていた！！愛らしい声で鳴いています。どう
でる？

絶対拾うで。
動物は可愛いしなあ。

33 突然頼みごとをされました！ あなたならどうする？
いいで〜って言う。
人好しやな、俺も。

34 とても仲のいい友達と喧嘩しちゃったよ！どうしよう！？
場合によるわ。こっちに非がないのに、自分から謝るのは嫌やし。

35 嘘はつけるタイプ？
あたりまえやろ。
話術が巧みやないと、補佐は務まらないで。

36 もしかしてその嘘はついてもすぐバレちゃったりしない？
いいや。
でも、ま、気付く奴は気付くかもしれんけどな。

37 何か癖ある？
髪をかきあげたり、とか。
苛々したときとかについしてしまうんや。

38 誰かに何か言いたいことたまつてない？
あるで。

39 あるつて答えたそのあなた！ じゃあこの穴に向かって
思う存分叫んでください！！
いい加減、銅の一族もスペードを認めーや！！
スペードもや！銅の一族と歩みよろーとせえ！！

40 ……酸素マスクいる？
……貰つとくわ。

41 あなたにとって一番大事なものは？
友達やな。

42 自分といたらコレ！ みたいなのある？
眼帯してる明るい男、やろ？印象は。

43 崇拜してる人とかいる？
おらへんよ。

44 どうしよう！ 財布を掏られた！！
ああーあ、サイアクな気分になるやるなあ。

45 コレだけは誰にも負けないものつてある？
話術と体術。どっちもそれなりに自負しとる。

46 こいつには敵わないっていう人いる？
えっとー。

王であるスペードと、祖母やな。

47 全部答えてきたね？じゃあこのノリで普段なら言えないような秘密トークをお願いしますー！！

・・・俺はなあ、ハンプティーみたいに虐待されとったわけやないんやけど、母が嫌いや。

あの人、昔から俺はあつてないものみたいに扱ったから。

48 ぶっちゃけ作品内での自分の立場ってどうよ？

ムードメーカーちゃうか？

49 ここぞとばかりに生みの親になんでも言っちゃえ！

アリスちゃんとの仲、ちよつとは進展させえよ？

あとなあ、小話でええから銅の一族についてとか、書いてや？

50 ここまで読んでくれた方に何か。

お疲れさん。あんがとなー！。

オリキャラに50の質問

「Water Future」 <http://waterfuture.finito-web.com/orichara50.html>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1350d/>

黄昏の国のアリス

2010年10月10日19時44分発行